

地球の箱船を求めて

第一話 そしてみんな死んでしまった

生野以久男

プロローグ

昭和三十年代（一九五〇～一九六四）、日本ではエネルギー源の大転換がはじまる。これまでの石炭から安価で使い勝手のよい石油への転換だ。

日本列島の太平洋ベルト地帯には工業地帯が連なり、石油をエネルギー源とする製鉄、製油、化学工業、電力といった重厚長大工業の工場群で埋め尽くされていった。そしてコンビナート方式で集中立地した工場群は経済成長の波に乗って生産第一主義の生産活動を展開する。

こうして昭和三十年代後半から四十年代前半にかけて、日本経済は高度成長期に突入し、急速に成長する。だが、四十年代に入ると、急激な成長にともなうさまざまな歪みが日本列島のいたるところで表面化しはじめる。

大気や水域など自然環境が一段と悪化し、さまざまな悪影響があらわになる。ことに、太平洋ベルト工業地帯周辺での自然環境の悪化は凄まじく、大気汚染や海域・河川湖沼の水質汚濁などによる周辺住民への健康被害が顕現化する。そして四日市喘息、水俣病、イタイイタイ病、カネミ油症といった急性被害による公害病患者が大量に生み出されたのだ。

太平洋ベルト地帯が「公害問題」で行き詰まると、高度成長に酔い痴れた企業は「公害処女地」である日本海側の裏日本へ目が向ける。調子のいいジャーナリストや経済学者らもこれからは「環日本海時代」だとも囁く。

企業の目が日本海側に目を向けはじめられていることを知ると、いままです陽の当たることがなかった日本海に面したG県は、こんどこそ高度成長のバスに乗り遅れまいと、県唯一の大型港であるN港整備を国に働き掛け

る。

後進県として焦りのなか、四十二年、河口港であるN港から三キロ北上した地点に掘り込み港を新設し、後背地に大企業を誘致して一大臨海工業地帯を開発するという新港開発構想（N新港プロジェクト）を打ち上げる。さらにその後、高度成長がそろそろ終わりを迎える時期（四十五年）に、県は同プロジェクトの当初計画規模（二万五千トン級の岸壁を三本、五千トン級を五本）を一挙に三倍に拡大する。

翌四十六年、精練から圧延までの一貫生産の計画をもつアルミ工業（S金属）の誘致に成功する。アルミ精練には大量の電力を必要とするため、あわせて石油火力発電所（S金属とT電力の共同出資による共同火力発電所）も誘致され、N新港プロジェクトが漸く軌道に乗りはじめる。

そのとき、N新港プロジェクトの先行きに大きな影響をおよぼす二つの事件が相次いで国内外で起きる。

第一の事件は、四十七年七月、係争中の四日市公害訴訟の判決があり、四日市喘息の原因物質が火力発電所からの亜硫酸ガス（硫酸酸化物）とその周辺工場からの大気汚染物質によるものと認定されたことである。

そのなかで、翌四十八年三月、S金属はアルミ一貫生産工場の立地に向けて本格的活動を開始するため、新会社（Sアルミニウム工業株式会社（Sアルミ））を設立する。つづいて同年四月、Sアルミに電力を供給する石油火力発電所を建設するために新会社（N共同火力発電株式会社（N共火））が設立された。

誘致企業にとつて、企業側の敗訴の判決は当然予測されていたことであつた。だがそれは予想を超えたものであつた。この判決を契機に、四日市喘息の元凶のひとつである火力発電所に対して、住民の極めて厳しい目が向

けられることになったのである。

つづく第二の事件は、誘致企業が新会社を設立した半年後にやってきた。全世界に衝撃を与えた第一回目のオイルショックである。

第二次世界大戦後における東西対立の冷戦構造もとで、石油利権を巡る国際的緊張が一段と高まっているさなか、産油国に採掘権を含め石油資源の国有化の動きが現れる。そして一九七三年（昭和四十八年）十月、ついにアラブ産油国は石油禁輸の戦略を実行に移す。これにより石油価格が一挙に四倍も跳ね上がった（第1次オイルショック）。

急激な石油価格の高騰に、日本経済は翻弄され、オイルショックのまえに為す術がなかった。大気汚染など環境への影響を軽視し、安価で使いやすい石油を大量に消費して高度成長に浮かれていた日本経済は大打撃を被る。これを機に、日本経済の高度成長期は終焉し、時代が大きく変わっていく。そして日本経済はもちろん、世界経済も大きな曲がり角を迎えることになった。

N新港プロジェクトの前途にも暗雲が立ちこめる。

石油価格が急騰するなか、前途の不安を抱えながらも、SアルミとN共火は立地を進め、昭和四十九年十月、工場と発電所の建設に着手する。だが地元住民の公害反対運動は予想を超えて激しいものだった。

Sアルミは計画を見直し、大幅に縮小するも、なんとか操業をめざす。

一方、N共火は計画規模通りの発電所の建設を進める。だが試運転開始を控え、送電線建設で地元住民との交渉が難航し、難渋する。

操業開始のタイムリミットが迫る一九七六年（昭和五十一年）三月、N共火の社長田村康平が不可解な死を遂げる。

第一章

1

左手を皺だらけのベージュのコートのポケットに突っ込み、右手にポストンバッグをぶら下げた浅黒い顔の若い男がひとり、風が吹き抜けるようにするりと改札口を通り抜け、駅舎へ滑り込む。駅員の姿もなければ、男の前にも後にも人影はなかった。

男は改札口を出たところで、足を止めた。一七〇センチほどだが、痩せていて細身のせいも、実際よりかなり高く見える。

男は立ったままポストンバッグを手から放す。鈍い音を立て、足下に落ちたバックの僅かに開いたファスナーの隙間から下着らしい白い衣類の一部が覗いている。

男は浅黒い顔をゆっくり動かし、辺りを見回した。まだ学生気分が漂っている好奇心の強そうな大きな丸い目には微かに不安げな光があった。

あらかた乗降客は改札口を通り抜けたのか、それとも日曜の朝のせいも、駅舎のホールの中真ん中に棒立ちしている彼に通行を妨げられる乗降客もなく、その奥にある待合用のベンチも閑散としている。

人気もないのに、左手の片隅にある売店には煌々と明かりが灯っていた。新聞や週刊誌など陳列してある品々が灯に照らし出されていたが、売り子の姿は見えない。回りにも人影はなかった。

しばらく辺りを眺めていた男はおもむろに身を屈め、ポストンバッグを持ち上げる。そして未開の地の入り込むような用心深い足取りで、左右に

目を配りながら、ホールをゆっくり横切る。

駅舎から一歩外に出ると、冷たい風が吹きつけた。シベリアおろしの季節風か。男は痩せぎすでほっそりとした体躯を思いきり縮める。

彼はふたたびポストンバッグを投げ出すように歩道に落とすと、両手で急いでよれよれのベージュのトレンチコートの際を立てる。

駅前広場はバスターミナルらしく、数台のバスが駐車していた。

広場の縁に沿い、前面に左から右へ広い幹線道路が走っている。幹線道路からT字型に幅広い大通りが突き出すように前方へ垂直に伸び、大通りは両側に商店が連なるアーケードとなっていた。

早朝だというのに、大通りの一角に人びとが群がっている。赤い信号灯を点滅しているパトカーが並び、救急車の警笛音が近づく。

男は一度ひとの群れの方に足を向けたが、途中で引く返し、足早にタクシー乗り場に向かった。

「なにかあったの」

開いた扉から振り向いた中年の運転手に声をかける。

「なんでも、そのホテルで泊まり客が首を吊って死んでいたそうさ」

のんびりした声が返ってきた。

「すぐ戻るから一寸待ってて」

身体を屈めて、座席にポストンバッグを放り込むと、男はひとが群がっている大通りに向かって走り出した。

「お客さん、お客さん……」

後ろから運転手の声が追いかける。男はかまわず走る。

アーケード商店街から横に入った路地の奥に、ホテルらしい高い建物がそびえていた。ガラスの回転扉を押してエントランスホールに入ると、担

架を持った救急隊員がエレベーターを待っているのが見えた。

彼は足早に近づきながら軽く会釈を交わし、後について開いた扉からエレベーターに滑り込む。警察の関係者と間違えたのか、隊員のひとりから笑顔が返ってきた。

エレベーターが降り、扉が開くと、男は開放のボタンを押して、救急隊員を先に通してその後につづく。止まった階のエレベーターのまえには若い警官がひとりぼつんと立っていた。彼は無言で担架について、テープを張り巡らした廊下を抜けて開放されているドアから室内に入っていく。誰も咎めるものはいなかった。

ドアの近くに丸テーブルと二脚のアームチェアがあった。テーブルのうえにほぼ空になったウイスキーの大瓶とコップが無造作に置いてある。その横にホテル名とルームナンバーを彫り込んだ透明の人工樹脂の細長い角柱が付いている鍵が投げ出されていた。

その奥に壁を頭にセミダブルの二つのベッドが部屋いっぱい並べてある。遺体は窓に近いベッドに横たわっていた。

警官一人と、ホテル関係者らしいマネージャー風の男と胸に見習いの標識をつけたキャップのボーイ風の二人が見つめるなかで、ひとりの年配の男が遺体のそばでしきりに「社長、社長」と呼び掛けていた。だが、担架を抱えた救急隊員が近づいてくるのを見て、その年配の男もベッドから離れる。

若い隊員が素早くベッドに上り、心臓マッサージを試みる。だが懐中電灯を取りだし、瞳孔を検査していた年かきの隊員に制止されてすぐ止めてしまった。

見習い従業員は中学を卒業したばかりか、一人だけ離れ、ドア近くで青

い顔をして様子を窺っている。若い男は誰にも気付かれないように手招きして見習い従業員を廊下に誘い出すと、従業員の背を押して、そのまま廊下の奥の非常階段へと連れ出す。

非常階段に通じるドアを閉めたとき、背後でエレベーターが停まり、なから数人の足音がつづいた。

「きみが発見したの？」

見習い従業員は一瞬間を歪めた。

「きみがあの部屋の鍵を開けたの」

若い男は見習い従業員の手に鍵が握られているのを見て、再度尋ねる。

従業員は黙って頷いた。

「それで……、泊まり客が首を吊っていた……」

「はい……、カーテンボックスのところ……」

吐き気を催したのか、急いで口を押さえた。

「自殺……か」

「……………」

見習い従業員は黙って彼の目を見ている。

「そうじゃない……の……」

「……ドアの陰にもうひとりのひとが……」

「え？ きみが入ったとき、室内に誰かいたの。きみ、はっきり見たの」

「いや、はっきりは見えてません。わたしはすぐマネージャーを呼びに行きま

したから……」

「どこで見たの」

「ドアの蝶番の隙間に人影が……」

「どんな風な……」

「背は低いようでしたが……」

「それで顔見なかったのかね」

「片目だけが見えましたが、全体は見えませんでした」

「それで……」

「……………」

「きみはそのままにしてマネジャーを呼びに行ったのか」

「共火の所長さんが一緒でしたから。所長さんを残して」

「キョウカ？」

見習い従業員は一瞬不審の目をして彼を見た。

「あの……、警察の……刑事さんではないのですか」

彼がポケットから名刺を取りだして渡そうとしたとき、見習い従業員はドアを開け、廊下に飛び出していった。彼はしばらく考えてから、非常階段を下りた。

2

「お客さん、困りますよ。待ち時間を入れさせてもらいましたからね」

中年の一癖ありそうな運転手は怒った口調で言う。

「亡くなった人はどこのひとなの、身元は分かっていたの」

「共火の社長だそうだ」

「きょうか？ なんのことですか」

「N共同火力発電（N共火）のことだよ」

G県は日本海に面したN市の臨海部にコンビナート方式の工業団地（N

新港プロジェクト）を開発中だった。その目玉企業として誘致したのがSアルミニウム工業（Sアルミ）である。

Sアルミは当初、精錬から圧延まで行い、一貫したアルミニウム製品生産工場を立地する計画だった。アルミ精錬には大量の電力を要する。そこで、Sアルミは安価な電力を大量に確保するために、この地域に電力を独占的に供給するT電力と共同出資して設立した会社がN共同火力発電株式会社（N共火）であった。

「社長が自殺ですか……」

「さあね……、まあ、殺されたようなもんじゃないのかね」

「え？ 自殺じゃないと……」

「なにしろ肝心の送電線が出来ず、親会社とSアルミの板挟みになっていたからなあ」

「板挟み？」

「まあね。で、どこへ……」

若い男が行き先を告げると、中年の運転手は一瞬目を光らせる。そして「お客さんはブンヤかね」と言ったきり、口を噤む。目的地に着くまで、時々バックミラー越しに陰気な目付きで若い男の様子を探るだけで、運転手は二度と口を開こうとしなかった。

3

M新聞N通信局は大通りから少しなかに入った小路の奥にあった。ペー
ジュの建物のモルタル壁一杯に黒ペンキで「M新聞社N通信局」と横長に

書かれていなければ、一般の住宅と見間違うにちがいない。ただ違うところといえば、普通は庭になっている建物前面の空き地がゆうに車を三台停めることができるアスファルトを張った広い駐車場になっている点だ。

若い男はしばらく駐車場の端に佇み、落胆した様子で古びた平屋の建物に点検するふうな目を向けていた。ようやく意を決したのか、玄関に近づき、ドアを押す。

玄関の土間につづいてカウンターがあり、その横に十畳ほどの細長い部屋があった。ここが執務室らしく、手前にスチールの事務机が二つ向かい合わせに並んでいる。その奥に、古びた応接セットを配置してあった。

事務机の上は散らかり放題だった。電話器が二つ、合わせた机の中央付近に置いてあり、そのまわりに新聞の切り抜きや書きかけの原稿用紙の類いが雑然と積み上げている。

広くない部屋のほぼ中央の奥まったところに応接セットのソファが背を向けている。その高い背が衝立となつて部屋を中央で仕切り、一つの部屋に別の空間をつくつていた。

若い男はここがN通信局の事務所かといささか悄然とした面持ちで、玄関の土間にしばらく突っ立っていた。しばらくして気を取り直したのか、奥に向かつて大きな声で「ごめんください」と叫ぶ。

「誰だ。大きな声を出すな」

人の気配がないのに、応接セットの辺りから、太い声がした。

「はい……、森野和彦です。こんどお世話になる……」

ソファの陰からずんぐりした太めの男が身を起こした。大きく伸びをしってから、黒枠の丸い眼鏡をかけ直し、彼を一瞥する。風呂に入っていないのか、ぶーんと鼻につく臭いが漂ってきた。

「よう、来たか。じゃ、駅前のNホテルまで取材に行つてくれ」

黒枠の丸い眼鏡がいきなり言った。

「はあ……」

突然取材と言われても、和彦には通信局からNホテルへの道順すら分からず、どう行けばよいのか分からなかった。彼は棒立ちのまま、汚らしい感じがするヒゲ面の男を見た。頭はボサボサで、濃い無精ヒゲが顎を一面に覆っている。この男が「しごきの川田」と呼ばれている男か。

彼は先輩記者がにやにやしながら話していたことを思い浮かべ、太めの男をじろじろ観察する。一ヶ月か二ヶ月の辛抱だ。この実習を了えれば派遣元に戻るか、あわよくば東京の本社勤務ということもありうる。それまでこまめに動いて、大過なく過ごすことだ、と彼は自分に言い聞かせる。

「おい、なにをしている。案山子のように突っ立っていないで、すぐ行く。泊まり客が死んでいたらしい」

「共火の社長だそうですね」

なにが案山子だ、と内心で反発した途端に、彼は運転手が言っていたことを思い出して口にしたのだ。

「……………」

男ははだまつて目を光らせた。しばらくじつと彼を見つめている。

一瞬、彼は余計なことを言ってしまったと思つた。東京本社での新人研修を終え、地方支局に配属された新米記者であつたが、OBとはいえ地方通信局の局長兼通信員にすぎない男に対していささか気負いがあつたのかもしれない。

「早く行んだ。間に合わんぞ」

彼は脱ぎかけたコートにふたたび腕を通しながら、外に出た。

大通りで流しのタクシーを待った。日曜のせいか、五分ほど立っていたが、一台のタクシーも通らない。彼は歩行者に道を聞き聞き、駅へ急いだ。

4

川田大造は若い男を追い出すと、再びソファに横になった。

田村康平が自ら命を断ったかと思うとやり切れなかった。彼は住民を強引に追い出していく県や立地企業のやり方に対して何度も批判的な記事を書いたが、田村康平とはなんとなくウマが合った。互いに共感するところもあった。

突然妻が小学生の二人の娘を残してあっけなく逝った。社会部の記者として脂が乗りきっていたときで、日本も東京オリンピックを無事終え高度成長の軌道を突っ走り出した時期だった。

彼にはいくつかの選択肢があった。だが家族を忘れて仕事に没頭していた自分を省みて、これまでの生活を捨てた。二人の娘を連れて生まれ故郷に戻り、ひとりで娘たちを育て上げた。

確かに、彼には連日仕事にかまけて家庭をかえりみなかった後ろめたさがあった。だがそうさせたのはそれだけではなかった。あまり深く詮索したことはないが、そのとき感じた全身を貫く衝撃がそうさせたのかもしれない。妻の死というより、死そのものに直面し、仕事のなかで自分を見失ったかもしれない。ただひたすら突っ走っていた自分に気付いたせいだったかもしれない。独り善がりの社会正義を振り回して仕事に明け暮れ、妻を犠牲にし子どもを打っちゃって置いたのだ。

田村康平もガンに妻を奪われ、残された一人娘を男手で育てた経験者だった。このことを知って以来、彼は田村康平に一種の親しみを覚えた。とはいっても、彼は手加減することはなかった。田村も彼が男手ひとつで娘たちを育てた同類であることを知っているのか、批判的な記事を書きつづける彼の取材に対していつも丁寧に応じた。

「なにがあつたのだろうか」

口のなかで呟く。彼は田村康平が死に直面したときのこころの動きを知りたかった。死を選ぶ気持ちに分からないでもなかった。自分も死を考えることがあつた。だが田村康平が自ら首を吊つて死を選んだことになにか釈然としないものを感じるのだ。

「本当に、田村康平は自分で首を吊る気になつたのだろうか」

ふたたび、口のなかで呟きながら、彼は頭のなかに生じた灰色の渦が次第に大きくなっていくのを感じた。と同時に、直接ホテルに自分で出掛けず、あの案山子男を取材にやったことを後悔した。田村康平の死を信じたくない気持ちもあつたが、自ら出向いて死者に敬意を表すべきではなかったか。

だがあるとき、ソファから身を起こした途端、目のまえに聳えるように突っ立っている若い男の、長めの細い首に載っている面長の幾分浅黒い感じの顔を目の前にしたとき、彼はなにか異質の生物に出っ食わしように反射的に身構えてしまった。その瞬間、「出ていけ」と叫ぶかわりに、取材を命じてしまっていたのだ。彼はあらためてすすくと伸びた細身の男を思い浮かべた。あの男とは反対に、寸詰まりの太く短い首で短軀で太めとくれば、オレと奴とは全く種類の違う人間と言うべきなんだ、案山子男を異質の生物と思い、身構えるのも無理がないよなあ、と自分に言い聞かせ、

彼は思わず嘔き出してしまふ。大きく重い頭に押えられて首が猪首になり、身体が縦じゃなく横に拡がっただけだったのだが。

5

「——N共同火力社長田村康平氏が宿泊先のホテルで首を吊って死んでいた。六時半過ぎに迎えに行った同社社員がフロントから何度電話しても応えがないので、不審に思つて従業員とともに部屋を訪れ、発見した。所轄警察署によると、発見者によつて、遺体はベッドに下ろされていたが、現場の状況などから見ても、カーテンボックスの棧に引っかけた針金ハンガーで首を吊つて自殺した、とみられる。死因は窒息死で、四月一日午前四時から六時ごろに死亡したと推定される。部屋には鍵がかけられていたが、遺書などはなかった。送電線建設が難航し、悩んでいたらしい——」

和彦は漸く書き上げた原稿を差し出しながら、「どうして自殺を凶つたのか、理由ははっきりしないということですが、関係者の話によると、最近送電線問題のことを苦慮し、過労で、うつ気味だったそうです」と付け加えた。

「ご苦労さん。本当に自殺したのか、そこが問題だな」

川田は受け取つた原稿にはろくに目を通さず、そのまま屑籠に捨てる。

「ボツですか」

彼はむつとした表情をあらわにした。大体、こんな男のもとでどんな実習をしろというんだという思いがいつぱんに出た。

「田村康平の死亡記事は送信済だ。遅かつたということだ」

「まだ時間が……」

「地方のしがない通信局からの原稿は時間が勝負だ。それに、田村康平社長が過労で、うつ気味だったとは一体誰から聞いたのだ。そんな紋切り型の理由に騙されるな。彼はうつ病なんかになる男ではない」

川田の目には異質な生物を見るような光はなかったものの、よく覚えとけと言いたげに、大声で言い放つ。彼はそっぽを向いて、川田の横顔に白い目を向ける。

「まさか最初からボツにするつもりで取材に出したわけではないでしょう。そんな時間に気になるのなら、前もつて締め切り時間を指定するなり、原稿を電話で送るように指示してください」

「なにを寝ぼけたことを言う。お前さんは一年間みっちり仕込まれた一人前の新聞記者じゃないのか。俺はお前さんを一人前の記者として扱っているんだぞ。もつともお前さんが赤ん坊だというのであれば、別だ。俺だつて、赤ん坊には手取り足取り教えるがなあ」

こう言つて、川田は顔を歪め、笑っているのか悲しんでいるのか分からない複雑な笑顔を向けた。彼は一瞬むつとした。川田が彼と背丈が同じくらいだったら、怒り狂つたことだろう。だが背の低い川田を見下ろしていると怒りが消えてしまった。

「まだまだ赤ん坊です。こんなことすら気が付かなかつたくらいですから。ビシビシしごいて下さい。一から勉強をやり直します。そのために川田局長のところへやつて来たのですから」

彼は精一杯の皮肉を込めた。だが川田には通じるはずはなかった。

通信局といつても常駐者は一人で、大きな事件や特別な企画などがあった場合、必要に応じて応援の記者が集まるのだった。ただ川田が受け持つ

ているN通信局は特別で、常時新米記者が応援という名目で現場実習を兼ねて派遣されていた。

「おい。調子が良すぎるぞ。それから局長というのはよせ」

「でも……」

「川田でいい」

「分かりました。では田村康平氏の死んだ理由を徹底的に探ることにいたしましょうか。もしかしたら、自殺したのではないかもしれないし……」

彼は嫌みたっぷらしい口調で、口からでまかせなことを言う。というより、そのときなぜか、彼の脳裏に「殺されたようなものだ」という無愛想で陰気な運転手の咳きが突然鮮明に浮かんできたのだ。

田村康平の死にはなにかが隠されているのかもしれない。チェックインしてから死亡したと推定される四時過ぎまで、田村社長はホテルの部屋でなにをしていたのだろうか。疲れ果てた人間が一寝入りしてから、発作的に首を吊るといふようなことがあるだろうか。これから自殺しようとしているものが、そのままに一寝入りするようないふことがありうるだろうか……。それとも誰かと会って話し込んでいたのだろうか。送電線問題が一体どう絡んでいるのか。

「なに、殺されたとでも言うのか。おい、でたらめ言うな。思いつきであれこれ決して言うな。これは鉄則だぞ。誰に殺されたというのだ。誰が殺すか……」

「それではあくまで田村康平氏は自殺したと考えておられるわけですか」

「そう短絡するな。俺は田村康平という男がうつ病なんかにならないと言ったのだ。だから、自殺したとしてもうつ病が原因ということではないということだ」

「うつ気味ではないという確証でもあるのですか」

「……………」

川田は黙って新米記者を睨みつける。

「それでは田村康平氏はうつ病以外の原因による自殺か、あるいは送電線が建設できないことを苦にして……」

「田村康平氏の死について軽々しくとやかく言うな。なにも知らないくせに……。大体、死者に対して失礼だ」

彼は不審な目を向ける。彼には川田の言うことがどうしても理解できなかった。別に軽々しく言っているつもりはなかったし、かといってとくに莊重に扱わなければならない事柄とも思えなかった。

「そうですか。じゃ……」

どう言えばいいのか、とつづけて言おうとした。だが彼は川田の目が潤んでいるように感じて、急いで言葉を呑んだ。

「もちろん、他殺の線を一〇〇パーセント否定つもりはないが、いまのところそう断定できる情報をもつてもいない。きみはどういう根拠でそう思うのか」

別人のようなしんみりとした調子だった。

「これといった根拠はいまのところないのですが、ふと、そんな感じがしたものですから……」

彼はタクシーの運転手が言っていたと言おうとして思わず口を噤んだ。

そんなことを言い出したらまた川田に叱られそうな気がしたのだ。それよりも川田から理詰めで問い質されるとなんとなく自分の方が間違っているような気もする。だが別の自分が鋭く反発する。なんとなく引つ掛かるものがあるのだ。あの運転手が呟くように言ったことが余韻となって耳の奥

で響く。彼はこころのなかで、川田がなんと言おうと、このネタをものにして、無精ヒゲのクマ面野郎をあっと言わせてやる、と叫んだ。

6

その夜、市内のお寺で田村社長の仮通夜が営まれた。

お寺に行く前に、和彦はNホテルに寄った。田村康平が死んだ現場をもう一度ゆっくり見たいと思っただからだ。

フロントで来意を告げ、マネージャーに面会を求めた。

「川田さんのところにおられるのですか」

黒の背広を着た中肉中背の色白のマネージャーは受け取った彼の名刺を片手に、カウンター越しに抜け目なさそうな目を光らせ、彼をじろじろと眺め回す。

「部屋はすっかり片づけてしまいました。明日から改修する予定ですが、準備の都合もありますので、今日は勘弁してください」

「ほんとうですか。一寸、覗きだけです。なにか都合悪いことがあるのですか」

マネージャーがウソをついているらしいことが分かった。ここはねばるほかない。

「はつきり申しますと、当方にとつて今回の出来事は途轍もないダメージだったのです。いまは一刻も早く立ち直りたいところです。あのことは私自身早く忘れてしまいたいし、世の中にも早く忘れさせたいのですよ。ですから、あのことはもう終わったことで、もう誰にも触れて欲しくないの

です。わたしたちの立場に是非ご理解願いたいのです」

マネージャーは身体を小さくして、まるで両手を擦るような言い方をした。

「なにもないことまでほじくり出そうなんて思っていないですよ。真実を知りたいだけです。第一発見者のあの従業員はいませんか。彼が現場でなにを見たか、現場でどう感じたか、ということについてはもう一度話を聞かして欲しいのですが……」

「その男はもう帰りましたよ。彼はすべてを警察に話しているはずですよ。それ以上のことはなにもないはずですよ」

彼は愛想笑いを浮かべて話すマネージャーの目を覗きながら、急に逃げ出していた坊主頭だった従業員を思い浮かべた。警察にどんな話をしたのだろうか。マネージャーから口止めされたことはなかったか、一度確かめておきたかった。

「そうかもしれませんが、同じことでも自分の目で見、自分の耳で直に聞いておきたいのですよ。彼の住まいはどちらですか」

「明日、彼が見えたら、聞いておきます。なんなら、こちらからご連絡いたします」

マネージャーは新聞記者の取材をあくまで阻止したいらしい。

「ぼくではダメなら、川田を連れてきますよ」

彼は目の前に立っている抜け目ない目つきのマネージャーが「川田のところにいるのか」と言ったことを思いだして圧力をかける。一瞬、マネージャーは嫌な顔をした。

「そうですか。川田さんによろしくお伝えください」

マネージャーはいやに丁寧な口調で言い、薄笑いを浮かべる。彼は引き

下がるほかなかった。だがマネージャーの勝ち誇ったような薄笑いが彼を一層奮い立たせた。

「ところで、先程部屋は片づけてしまったと言われましたが、本当に現場の部屋は片づいてしまっているのですか。警察の現場検証はすっかり済んでしまったのですか。そんなに簡単に済むんですか」

もしこれが本当なら、警察は田村康平の自殺になんの疑念も抱いていないということだろう。彼はじつとマネージャーの目を覗き込んだ。だがマネージャーは決して彼と目を合わせようとしなかった。マネージャーはウソをついていると思ったものの、彼はあきらめてカウンターを離れた。

カウンターの前面のコナーが小さなロビーになっていて、テーブルと椅子が並んでいる。彼はホテルのパンフレットを手にとって、椅子を引き寄せる。

一階にはフロントのほかにレストランもあるが、二階と三階にもいくつかの飲食店が入っているらしい。四階と五階が宴会場で、六階から一二階が客室だ。田村康平が宿泊した部屋は確か最上階の一二階だった。

彼はパンフレットから目を上げ、おもむろに顔を回し辺りを見た。マネージャーがカウンターの中央に立ち、視線をくぎ付けにして彼を見守っていた。

エントランスの回転扉を入った右手に二階へ通じるエスカレーターが伸びている。エレベーターはその奥の壁際にあつた。

彼はゆつくり首を回し、もう一度エレベーターの位置を確かめる。カウンターのマネージャーには壁際のエレベーターがエスカレーターの陰に隠れて見えないことを確かめると、おもむろに立ち上がる。

彼はマネージャーの目を盗んでエレベーターに乗り込む。一二階まで行つ

てみたが、エレベーターの前の廊下には黄色のテープが張り巡らされ立ち入り禁止になっていた。

まだ事件は決着していないのだ。もしかしたらやはりこれは単なる自殺じゃないのかもしれない。

だがマネージャーをはじめ回りの連中は田村康平の死をなぜか単なる自殺として処理したがっているようだった。なぜかそんな雰囲気があった。

田村康平の自殺を否定するものはないのか。田村社長を恨んでいた者がいなかったのか。トラブルはなかったのか。彼は必死に嗅ぎ回ったが、そんなものは一切嗅ぎ取ることができなかった。

ホテルから通夜が行われるお寺への道を辿りながら、彼は田村康平の自殺現場を繰り返し思い浮かべた。その度に自殺に対する疑いが膨れていく。

お寺の門を入っていくと、本堂脇の広場にテントを張った受付が見えた。仮通夜とはいえ、あまりの手回しのよさに、いささか違和感を覚えながら、彼は受付の近くに佇み、訪れる弔問客を一人ひとり窺った。本葬はい

ずれ本社のある隣のS市で行われるというのに、弔問客が切れることなく続く。

彼にとつて当然なことであつたが、弔問客はすべてが初めて見る顔であつた。それでも彼にはどんな立場のひとかなんとなく見当がついた。どうしても見当がつかないときは、弔問客が去つたあと、なにげなく受付に近づき、机のうえに広げてある記入帳を覗き込んだ。なんどもそんなことを繰り返しているうちに、はじめは怪訝そうな面持ちでじろじろ見ていた受付の色白で面長の女子職員とも笑顔を交わすようになった。

弔問客のなかには受付に何枚もの名刺を重ねて差し出し、そのまま引き返すものもいたが、多くは受付で記帳を済ませると、本堂に向かい、焼香

の列に加わる。彼は目ぼしい弔問客の顔を覚えて、焼香を済ませた帰りを掴まえようを待ちかまえていた。だが俄勉強の身には、数多いなかから誰にポイントの絞ればいいのか分からない。まごついているうちに相手に乗せた車が去っていく。

「どうだ、うまくいっているか」

川田がにやにやして近づいてきた。そして新米記者の顔を一目覗くと、身を翻し受付へ向かう。

「おやじさんは元気かい？」

川田は記帳しながら、面長の女子職員に声を掛ける。

「はい。お陰様で……、あのひとは……」

目が彼に向いている。

「あの男か、今朝着いたばかりの応援団だ」

川田は彼を手招きする。

「紹介しておこう。こちらはN共火の木村……春治はおやじさんだ」

「木村由紀です」

「そう。こちらは……、おい、早く言わんか。世話が焼ける奴だ」

「はあ、森野和彦です」

由紀は和彦を見上げるように顔を上げると、くすりと笑った。

「本当に、お前さんは一体、何センチあるんだ？」

「七五センチ」

「そう高いほうでもないな。でも俺より二〇センチも高い。立ったままで取材するときは気をつけるんだ。相手を見下ろすような格好にならないようにな。こころもち腰を屈めるんだな」

川田は本堂の方向に足を運びながら、ぼそぼそと言う。

「あの女の子とは知り合いですか」

「可愛い子だろ。俺も独身だからな。まだまだ捨てたもんじゃないぞ」

「え？」

「へんな声を出すな。あの子のおやじは反対派の論客だった。まあ、地区移転の合意後、地元雇用ということで、あの子はN共火に就職した。この頃の若い子に地元で就職したいなんて思う子はいやしない。女の子にとって、火力発電所の建設現場なんて、職場としても魅力ないしな」

「建設現場で働いているんですか、あの子は」

「建設現場といっても発電所はあらかたできています。事務所は隣接して建設された立派なビルのなかだ。お前はまだなんにも知らないんだなあ」

焼香が始まっていた。順番を待つ列には県や市の関係者、地元関係者、ホテルのマネージャー、建設工事を請け負っている数多くの会社の関係者のほかに、反対派の住民も混じっていた。川田は目ぼしい弔問客の一人ひとりについて説明し、ときには弔問客と言葉を交わし、彼を紹介した。

「いいか。あそこに並んでいる連中が田村康平社長に一番近い連中だ」

左側の壁を背に、遺族やN共火らの関係者が一列に並んで、焼香を終えた弔問客を送り出している。

「遺族の一番目が田村康平の一人娘だ。次がその連れだな。娘夫婦は田村康平社長の家の同居して、身の回りの面倒を見ていた。夫人は十数年前にガンで亡くなった……」

三十代らしい喪服を着た小柄の女性のとなりに、細身のサラリーマン風の男が寄り添って立っている。遺族はこの二人きりだった。

「……三番目に並んでいる縁無しメガネの一見神経質に見える背の高い男がN共火の下藤常務だ。建設所の所長を兼ねている。単身赴任中だ。なか

なかたフで一癖ある男だ。万年社長候補だが、今度もどうかかな……」

見覚えのある角顔の男はしきりに遺族に気を配っている様子だったが、どこか爬虫類を思わせる嫉妬深そうな細い目をしている。

「……その次の日焼けしたスポーツマンタイプの男がT電力の村川企画部長だ。田村康平社長の後輩だが、やり手だ。社長候補のひとりだ。きれる男だ……」

明るい大きな目を動かして焼香客を見定めているふうだが、どこかおっとりした風情が感じられる。その隣に小男のくせに肩幅の広いがっちりした体格の大きな赤ら顔があった。小狡るそうどこかひとを小馬鹿にしたような顔付きをしている。

「その隣の小男がSアルミの倉多常務だ。建設所長を兼ねている。彼も単身赴任だ。身体は小さいが重量挙げの元学生チャンピオンだったそうだ。飲ん兵衛で、なぜか下藤所長と仲がいい。単身赴任同士で呑んでばかりいるからだろう。如才なく押しが強く抜け目ないと言う評判だ。まあ、関西流なのかな。彼はたしかN共火の取締役も兼ねていると思うがね……」

川田はひとりで説明を続ける。川田の声に領きながら、彼は倉多の顔が大きく見えるのは長髪のように額が禿げ上がっているからにちがいないと思う。大きな顔に似合わない薄い唇が気になったが、彼は目を移し、一人ひとりをチェックしていく。

目はふたたび、弔問を受けている遺族に戻る。沈痛な面持ちでじつと耐えている姿に釘付けになった。突然父親に自殺された娘の気持ちがあるものであろうか、と彼はあれこれ思いめぐらしていた。

7

あくる日から、和彦は川田が教えてくれた人びとのなかから目ぼしい相手を選んで取材を試みたものの、その先々で門前払いを喰い、情報が思うように集まらない。新顔で取材の方法も拙劣ということもあつたが、まるで彼の前に目に見えない厚い壁が張り巡らされているようで、にっちもさっちもいかないのだ。

彼らには死は厳粛な事実で、死因を詮索することは死者に対する冒瀆だという思いがあるようだった。死は冒すことができない聖域なのだ。これを詮索することは誰にもできないことなのだ。ことに自ら死を選んだひとの場合にはことさらその思いが強かった。

ことに、N共火は取材に一切応じようとしなかった。建設工事中の作業員を掴まえて自殺した前社長のことを聞いても、固く口を閉ざし、目をそらす。珍しく口を利いても通り一遍で、故人を悪くいうものはひとりもいなかった。T電力のN営業所でも徹底した箝口令が敷かれているのか、故田村社長のことになる、なぜか途端に口が堅くなって、社員の誰一人口を利こうとしないのだ。

警察も過労による自殺として処理してしまっていた。地元の賛成派にしろ、反対派にしろ、よそ者の彼を誰も白い目で見ただけで、口を開こうとしなかった。そのなかで、一人だけ、はつきりものを言う男がいた。Sアルミの建設所長を兼ねている肩幅の広い小男の倉多常務だった。

「どうも田村社長にはコスト意識が足りなかったな。殿様稼業の電力育ちにはありがちなことだが、公害防止対策への投資が大き過ぎる。地元住民の言いなりになって公害対策を進めていたが、いくら公害防止に金をつぎ

込んでも、そう効果が上がるもんじゃないんや。電気エネルギーの缶詰めともいわれるアルミ製品をつくるわが方としては、電力コストが一銭でも低ければ低いほどいい。ますます熾烈化している国際競争のことを考えてほしいのだ。電力コストを低く抑えることができれば、当社は操業前に御陀仏や」

またこうも言った。

「田村社長が自殺したとなると、膠着状態だった送電線交渉がどうなるか。T電力の手先に過ぎないとはいえ、さらに混迷を深めることになるだろうな。まあ、当分この問題はお預けだな」

何日も取材を続けたが、これといった収穫はなかった。田村康平がN共火の二代目の社長で、二年前の昭和四十九年四月に就任したこと、この四月で二年間の任期が切れ、再任の予定だったということぐらいしか分からなかった。

だが取材を通して彼には腑に落ちないことがあった。

取材を重ねれば重ねるほど、なにかが隠されているという感じがしてならなかった。なぜ、任期切れの直前に死ななければならないのか。再任を控えていてなぜ自ら死を選んだのか。社長を続けることに嫌気が差したとでもいうのだろうか。

それにしてもあんなに批判的な倉多常務が田村康平の社長再任にとくに反対した様子もなかったのはなぜか。反対したがT電力に押し切られたとでもいうのだろうか。社長交代で、建設工事に遅れが出ることを恐れたからだろうか。それとも別の思惑でもあるのだろうか。

田村康平が社長に就任してからの二年間、一体なにがあったのか。死を選ばねばならないようなことがあったのだろうか。川田は否定するが、や

はり密かにうつ病が彼をむしばみ、発作的に死を選らばせたのではないだろうか。それとも……、なにか特別のことが隠されているのだろうか。

彼は関係者の何人かを取材すれば芋づる式に事実が明らかになるだろうと高を括っていた。だが現実には思っていたのと大違いだった。いくら取材を重ねても、自殺か他殺か、いずれかの手掛かりとなるものはない。ひとつ掴めなかった。それよりもますます迷路の奥のほうに迷い込んでいくようであった。

事態は想像したことと全く違った方向に展開していくではないか。彼は焦りを感じはじめていた。

閉鎖空間のような土地でいかにして情報を集めればいいのか。いろいろな方法を試みるが、なにをやってもうまくいかず、彼は思い悩んだ。すっかり考えあぐね、終日机の前でぼんやりすることが多かった。

確かに、なにかが隠されている。そんな気がしてならないのだ。だが隠されているものはなにか。なにが隠されているのか、全然検討がつかなかった。分からないだけに、ますます彼は苛立った。

そんな新米記者を見かねたのか、それとも自分より背が高い細長い図体が目障りなのか、川田が「これまでN共火でどんなことがあったか、見てみるんだな。これが共火関係の最初の一冊だ」と言いながら、机にスクラップブックを投げて寄越した。それから「取材するまえに、背景や土地柄を知らなきゃ、田村康平社長を巡る人間関係を理解できない。それから、上から見下ろしてはなにも見えてこない。地に這いつくばって、下の方からものを見るようにすることだ」と言う。

川田に言われて、彼は取材のたびに人懐こい笑顔を浮かべて近づくと鼻先でびしゃりと勢いよく戸を閉めるようにそっぽ向く周辺住民たちの堅

い表情を思い浮かべた。それはよそ者の彼とのコミュニケーションを頭から拒否するものであった。

「いまになっても、周辺地域にとってN共火は招かざる客なのだ。とくに移転を強いられた地元住民にとってはその思いが強い。だから、N共火のことなど口にしたくないのだ」

川田はこの投げに言う。

「でも、N共火は誘致されたのでしょうか。それなのにどうして地元を嫌われ、反対されるのですか」

「N新港プロジェクトは県が進めているものだ。N共火の立地を誘致したのは県であって、地元住民じゃない」

「よく分からないですね……」

「日本の行政がいう地元には直接的に個々の地元住民が含まれないといったほうがよい。県や市町村当局が地元なのだ。県知事や市町村長はいつも自分らが地元を代表していると思っている。N新港プロジェクトはそういった県が主導するプロジェクトなのだ。これには地元であるN市さえ口が出させない。まして地元の個々の住民はむろんのことだ。だから、反対なら反対運動を起こすほかない」

企業が工場を立地する場合、適地探しから用地取得はもちろん、地元住民への説明、合意の取り付けなどを自前で行なうものと、前もって県等の地方自治体や第三セクターが開発した工業団地や工業用地への誘致に依じて立地するものがある。後者の誘致型では用地買収などの諸手当てが済んでいるので、面倒な用地取得交渉などを省略できるが、問題も多い。誘致に際して、誘致側はできるだけ有利な条件を提示するから、あとで条件を巡るトラブルが生じることがある。

「一度、木村のおっさんに会ってみるか」

「あの子のおやじさんのことですか」

彼は氣のない返事をする。

「おい、あのおっさんは強烈だから、気を付けろ。まあ、N新港プロジェクトについて、一通り、状況を呑み込んでからのほうがいいだろう。スクラップブックの残りはあのロッカーのなかだ」

川田はソファの横に並んでいるロッカーを指差す。

8

和彦は机の上でスクラップブックを開く。分厚い切り抜きの中に、田村康平の死の謎を解く鍵が隠されているかもしれない。いや、きつと謎を解く鍵があるにちがいない、と彼はページを一枚いちまい捲っていく。

日本海に面したN市はG県を貫流するM川の河口に発達した港湾都市である。江戸期以前から、河口港N港は日本海における有数の米の積み出し港として全国に知れ渡るほど栄えた。明治維新後、時の政府が京都を内陸部に移したこともあって、時代に見放され次第に寂れていく。

それでも明治のはじめの混乱期にはまだ米の積み出し港として活気があった。だが、運悪く、度重なる大洪水に加えて大地震にも襲われ、港の機能が破壊された。河口港の宿命である洪水時の土砂の堆積や震災時の港湾施設の損傷に対する手当ても十分にできないまま、木造船から鉄船へ、帆船から蒸気船へと船舶の大型化時代を迎えるも、大型汽船の入港不能で、ついにN港は時代から取り残されてしまった。

昭和に入ってN港の重要性が再認識される。そして本格的な築港工事が始まったのがNに市制が施かれた昭和八年以降だった。

三千トン岸壁が竣工し、臨海工業地帯として整備される。シナ事変にはじまる昭和の戦争期を通して、N港は商業港から工業港へと変貌していった。

戦後の混乱期を経てようやく落ち着きを取り戻した昭和二十五年五月、港湾法が制定され、N港の管理が市から県に移る。四年後、県によつてはじめてN港一〇年計画が作成されたが、本格的な開発がおこなわれるようになるまでさらに十数年の歳月を要した。

日本海側は太平洋側とは対照的に、日本列島の裏側に位置するという理由だけで、経済の高度成長期においても陽が当たらず、長い間、なんらの恩恵を浴びることなく見放されてきた。だが太平洋ベルト地帯に人口が過度に集中し、工場地帯が連なり、過密状態からさまざまな公害が問題化しはじめると、俄然、公害処女地の日本海側に目が向けられるようになる。

しかし、N港は河口港として洪水などの影響を受けやすく、港湾としての条件が悪いこともあって、国の「新産都市」の選に洩れたものの、県は昭和三十九年頃からN港地区の拡張計画を考えていた。それは河口港のN港から三キロ離れたところの砂浜海岸に、新たに掘り込み式の港（N新港）を建設しようとするものであった。

昭和四十一年になって、掘り込み式港湾（N新港）の新設を中心とするN新港計画が運輸省港湾審議会で取り上げられる。同審議会は、四十一年、一万五千トン岸壁をもち、背後工業用地が二百五十九万平方メートルというN新港計画を決定した。これに基づき、県の開発公社（理事長 副知事）による用地買収が始まった。地元の協力も得られ、四十三年十月には後背

地となるT地区の工場用地の買収も完了した。これが第1次N新港プロジェクトである。

ところが、四十五年八月、高度成長を背景に、地元住民をつんばげ敷に置いたまま、岸壁が一万五千トンから五万トンへと三倍強に、背後工業用地は二百五十九万平方メートルから四倍の千二十七万平方メートルへと計画が拡大変更された。これがいまの第2次N新港プロジェクト（以下、単に「N新港プロジェクト」という）で、同月、現地で起工式が行われた。

「これが最初のボタンの掛け違いだった。この地元住民を無視した計画変更を期に、これまで順調に進んでいた用地買収がこじれにこじれるのだ」
立ったまま上からスクラップブックを覗いていた川田が憤るような口調で言う。

県は五万トン計画について説明会を開き、現地で住民との話し合いを進めるが、新たにN新港の後背地となるM地区の百二十四戸は、四十六年五月、地区総会で「住宅移転と農地売渡し反対」「五万トン計画の変更要求」を決議する。併せて、結束して反対運動を進めるために「M地区N新港対策協議会」を結成した。

「ここを読んでみる。木村のおっさんたち地元住民の声が出ている」
川田はスクラップブックの記事を指さしながら、彼の側に椅子を引き寄せる。

地方紙（四十六年十二月十日付Y新聞）の切り抜きだ。
「……われわれが一万五千トン岸壁の計画で先祖伝来の土地を手放したのは、地域開発の重要性を認識し、公害を発生するような企業を絶対呼ばないと県当局が約束したからだ。それがどうですか。調印が終わって二カ月もたたないうちに、こんどは五万トンの港をつくることになったから部落

ぐるみ引越してくれとは……。これで県を信用しろといったってムリだ（K地区北港対策委員会委員長）」

「……五万トンは時代の流れだというのが、この一、二カ月間に本当にそんなに激変したのか。田んぼを売ったと思ったら、今度は家も移転しろ？

こんなバカな開発がどこにある（M部落対策協議会役員）」

「……港の歴史を知っているか。千年だぞ、千年。五万トンか何か知らねえが、百姓をだまそうとしてもオラ、もう絶対にだまさんねえ（M部落会長）」

「……百姓は昔から一番だましやさいもの、だまされやすいものといわれてきたでしょう。でもまさか県からこんな仕打ちを受けるなんて考えてもみなかったですよ、ハイ。新聞に出たといっても、まさかわれわれに話もせずに決めることはないと思つてたんです。旧計画（第1次N新港プロジェクト）のとき、このままじゃしようがないし、港の開発にみんなで協力しようよと、買取には譲れるところまで譲つたんです。そして新しいスタートだと、家の新築をはじめたら引越せでは……。われわれはだまされたんです（M部落兼業農家）」

移転地区の地元住民が結束した猛烈な反対運動はますます勢いを強めていき、用地買収が難航する。

「これが今回の送電線問題にも尾を引いているわけですか」

彼は啞然として、呟く。

「そうだ。いまもこれが背景に残っている。それに、このとき、県庁がある内陸部の一部には『こうした地元の反対があるにも関わらず県はなお頭を下げて新港に巨大な投資をなぜやらなければならないのか、もしその十分の一でも内陸地方に投資したら素晴らしい工業地帯ができるではないか』

というような、まるで地元を逆なでするような議論があった。このような発言が出るのは、県庁がある内陸部とN市などの海岸部との間には格差があり、不幸な歴史があったからだ」

日本海有数の自由貿易都市であったN港地域（N市）は文化の中心でもあったが、戊辰戦争のときに幕府側につき官軍と戦い、敗れた。これが災いして、明治の初期、現在の都道府県の行政区画が設定され、G県が誕生したとき、県庁がN港地域（N市）から遠く離れた内陸部に置かれた。それ以来、N市は県政の中心から離れ、中央とも疎遠な存在となっていく。栄華を極めた先進の地であるN港地域にとって、辺鄙な内陸部に県庁をもっていかけたことは堪え難い屈辱であり、手痛いダメージとなった。

このような出来事を背景に、内陸部と海岸部の間に対立や対抗意識が芽生え、育つていった。両者間の対抗意識はいまでも、G県の政治や経済ばかりでなく、社会一般に広く見え隠れする。さきのN新港投資に対する内陸部の言分に「あれは海岸部のN市に対する嫉みだ」と言う反論が実際あった。

「地元住民との紛糾は、市が中に入って、知事との話し合いを進めた結果、地元部落が移転を受け入れるのですね」

「そうだ。しかし何年もの後にだ」

「すると、SアルミやN共火は住民が合意する前に立地を決め、そのあとで県が住民たちを無理やり移転させて買取した土地を県から譲り受けて、工場や火力発電所を建設したということなのですか」

「県がアルミ工業の誘致を決めたのはN新港プロジェクトの計画変更に対して住民が合意する前のことだ。N共火もまた、後背地の問題が解決しないうちで、N新港に隣接した埋め立て地に立地することが決定されたのだ。」

発電規模は一基三五万キロワットの二基で、計七〇万キロワットで、重油を燃料とする火力発電所だという。四日市ぜん息の判決が出、オイルショックが襲った直後のことだが……」

「え？ 四日市ぜん息の判決が出て、オイルショックにも襲われた直後ですか。それじゃ、N共火だけでなくSアルミも設立当初から問題をかかえていたことになりすね。電力コストのほかに、地元住民の不安や恨みも買っていたということになるんじゃないんですか。その恨みが送電線問題で再燃し、最高責任者である社長に向けられることも十分考えうることですね」

彼にはなにかが見えてきたように感じた。

日本のなかで後進県であるG県は、N新港計画（第1次）が決まると、高度成長に取り残されまいと直ちに背後地の買収を始め、闇雲に、時代遅れの旧来型のコンビナート方式の企業誘致に乗り出す。しかしこのときすでに、太平洋岸工業地帯を中心に、高度成長のひずみがあったところで噴出していったのだ。工業地帯の周囲を流れる川や海域はヘドロに埋まり、悪臭が漂い、太陽は煤じんにかすみ、大気は亜硫酸ガスなど人体をむしばむ有害ガスですつかり汚染されつくしていたのだ。

以前から燻り続けていた熊本県の水俣病につづいて、新潟県で第二の水俣病が見つかり、訴訟が提起され（四十二年）、翌年、政府は公害病に認定する。また三重県の四日市・石油コンビナートによる四日市ぜん息が訴訟に発展したのも四十二年のことであった。さらに、富山県・神通川流域のイタイイタイ病も工場からの排出されたカドミウムが原因らしいことが分かったのもこのころであった。

それにもかかわらず、公害は放置され、各地で一段と深刻化していく。

住民の公害反対運動が高まり、公害・環境問題に対する危機意識が全国レベルに広がり、社会問題化していった。

四十五年（一九七〇）になって、政府はようやく「公害は重大問題である」と認識し、十一月に招集された臨時国会で公害関係十四法案の成立をはかる。そして環境庁の新設を決める（十二月）。

「公害問題に対する社会の意識が高揚するなかで、県は四十五年の計画変更に基づき、強引に背後地の用地買収を進め、規模を拡大する。その一方で、企業誘致に拍車をかけていく。前に一度、地元住民の反対で製紙会社の誘致に失敗したことがあるので、今度は、公害のない企業で、地元雇用が多く、県経済への波及効果が大きいものという条件を掲げ、誘致企業を探す。だがこのような条件に合致する企業が見つからず、結局アルミ工業を誘致することになったのだ」

川田はつづける。

「それは問題だ」

彼は思わず叫ぶ。

「アルミ工業は電力を大量に消費するし、ボーキサイト（鉱石）からアルミナ（酸化アルミニウム）やアルミニウムをつくる段階で廃棄物である赤泥が大量に出る。そこで県はこの段階を除いた二次的加工以降である地金精練、圧延工程の工場のみを受け入れることで誘致を決定するが、精練過程で排出するフッ素ガスが後日問題となる……」

四十六年一月、背後地住民の移転問題が解決の目鼻さえ付かないさなか、大阪に本社のあるS金属がG県に対して、立地を申し入れる。同年十月、県はS金属と立地協定（四十八年二月、S金属が中心となって設立するSアルミニウム工業が引き継ぐ）を結ぶ。

S金属の計画によると、大量の電力が必要で、日に三五万キロワットを使用するという。そこで県はS金属との立地協定を踏まえ、T電力に具体的な火力計画案を提示し、立地の意向を打診する。T電力は同年十二月、新港地区に誘致企業用の電源として七〇万キロワットの火力発電所を建設することで、県との火力発電所建設に関する協定書に調印する。

「……このとき、T電力は県に対してこのための発電所用地ならびに送電など関連施設の用地の確保を県に要請するが、さらにこれとともに、S金属が要請したアルミ用電力のためのものとは別に、火電基地化構想と指摘された民生用の一般需要のための電源立地（六〇万キロワット×四基、合計二四〇万キロワット、プロパー電源）についても了解を取ってしまう。県はこれに承えて、N共火用の七〇万キロワット分（N共火三五万キロワット×二基）の用地のほかに、一般需要用の電源用地をも準備する。このことがプロパー電源による火電基地化問題としてあとと問題となるのだが……」

「そんなこともあるんですか」

T電力は新港地区開発に便乗し、誘致企業用のN共火のほかに、一般需要用の発電所建設用地の確保を計り、一挙に電源立地難による電力不足の状況の解消を目論む。だがこのことが将来いろいろな局面で火電（火力発電）基地化計画として問題にされ、送電線問題にも影響し、地元との交渉においてなにかと障害となった。

「……S金属の立地申し入れの一年半後の四十七年六月、S金属とT電力は共同火力構想を明らかにし、両者は翌月、共同火力（N共火）設立同意について覚書・申し合わせ書に調印する。S金属は土地売買予約契約に調印し、県、関係市町村（一市八町）と公害防止基本協定を締結するのだが、

その数日後、四日市訴訟の判決が下る」

四日市訴訟は四十二年九月、三重県の四日市・石油コンビナートによる四日市ぜん息患者が四日市コンビナート六社を相手に提起した大気汚染訴訟であるが、原告患者の発病は被告側企業が排出する亜硫酸ガスなど硫酸化物が原因とされ、C電力のY火力発電所を含む被告側企業の全面敗訴で終結した。ぜん息が亜硫酸ガスなど硫酸化物によるとされたことが硫酸黄分を含有する重油等を燃料とする火力発電所の立地に大きな影響をおよぼすことになったばかりでなく、コンビナート方式そのものが問い直される契機となった。

「共火の発電所は重油を焚くんでしたよね。S金属はそのときどう考えたんでしようか」

彼は尋ねる。

「そのときはまだ当地の公害意識は低いと判断していたかもしれない。未開の裏日本のN新港地区に立地するメリットを想定していたかもしれない。S金属が子会社を設立してN新港地区への工場立地を本格化するが、後になってそれが甘い判断だったことに気付くことになる」

四十八年二月、T電力はN共火分の火力発電所について県と用地売買の予約契約を締結するとともに、県、関係市町村（一市八町）と公害防止協定（基本協定）に調印する（後日N共火が引き継ぐ）。これと前後して、S金属がアルミ地金および圧延品の製造・販売を目的とするSアルミニウム工業（Sアルミ）を設立した。SアルミはS金属がこれまで行なってきた立地に関する業務を引き継ぎ、第一号工場をN新港地区に立地することになった。

「四日市訴訟の判決後、約一年後、N共火が設立されたのですね」

「社長は別にいるが、下藤常務が実質仕切った」

四十八年四月、SアルミとT電力が共同出資して、N共同火力株式会社（N共火）を設立する。N共火はT電力から関連の業務を引き継ぎ、T電力はN共火の社長として副社長だった神田を派遣する。N共火は大物社長のもとで発電所建設に向けて具体的な活動をはじめだが、初代の神田社長は飾りだった。すべてがT電力のバックアップのもとで、下藤常務が実務を取り仕切り、N共火を立ち上げていく。T電力の副社長だった神田にはもうひとつ別の会社の会長の仕事があり、N共火の立上げ業務は眼中になかったのだ。N共火の発電所立地諸手続きはT電力ベースでこなされていく。

「T電力がですか」

「そうだ。N共火といつても、T電力からの出向組が主力だからね。だが問題は関西系資本のSアルミとT電力との間には企業経営の考え方に基本的に異なる場所があったことだ。下藤常務はその辺で苦労したらしい」

「SアルミとT電力との板挟み？」

「うん、N共火設立後間もないころに、電力業界の団体である電気事業連合会社長会（T電力社長もメンバーのひとり）が五十二年度には全国的に燃料油の硫黄含有分を〇・二九パーセントにすると決定したんだ（四十八年六月）。下藤常務はN共火も右ならいしなれないと考えていたところ、Sアルミ側はN共火が電気事業連合会メンバーでないからそうする必要なしと言いつ張つたらしい」

「どうしてですか」

「重油の価格は硫黄含有分で決まっているんだよ。下げれば低いほど価格は高くなる。それに応じて発電コストが高くなるわけだ」

「それじゃ、そのあと襲ったオイルショックは……、アルミが電力エネルギーの塊だというなら、致命的だったんじゃないんですか、Sアルミにとつては……」

四十八年十月、産油国の集まりであるアラブ石油輸出機構（O A P E C）は、第四次中東戦争の最中、石油消費国に対する供給削減を含む禁輸戦略を実行し、第1次オイルショックが全世界を襲う。原油価格が四倍に急騰し、日本経済は不況へ突入する。

「そうだ。実際、Sアルミは計画の見直しをはじめ、撤退すら考えたらしい」

「なぜ、そのとき撤退しなかったんですかね。いまごろになって撤退を考えるくらいなら、どうしてそのとき……」

彼には腑に落ちないことだった。

「オイルショックで当然その話が出ると思っていたが、なぜか出なかったな。県が軌道に乗りかけたN新港プロジェクトの出鼻をくじかれるのをおそれて必死に消して回ったのかもしれない。それとも……」

「なんですか」

「T電力とS金属とが……、いや、N共火の下藤常務がSアルミの倉多常務と取引したのかもしれない」

「N共火の計画についての国の認可を控えていたからですか……」

「Sアルミが撤退することになれば、Sアルミへの電力供給を目的とするN共火は不必要になってしまう。T電力としてはN共火の発電所の建設が出来なくなれば、国の認可をうるところまで手続きを進めてきたこれまでの努力が無駄になってしまうし、つぎの立地も難しくなる。この際、Sアルミの撤退を先に延ばしてもらってもN共火の発電所だけは是が非でも建

設しておきたいだろうし、下藤常務としても出世のためにはここでひくことはできなかつたというところだろう」

火力発電所や原子力発電所などを立地するには、事前にいろいろな調査や手続きが必要である。まず、立地候補地点に対する文献や現地での踏査・社会環境調査などによって立地の適性をチェックすることが必要で、そのための事前調査を実施しなければならない。その間、立地についての県や市町村などの地元自治体、漁協などの関係団体や地元住民団体等との折衝・接触を行なう。たとえば、県や市町村等地元自治体当局へのアプローチからはじまって、広報活動の強化（電力・国・県による組織的継続的広報活動）、電力・県・地元自治体による発電所立地の醸成（電力側からの調査申し入れまたは地元自治体による誘致決議）、営業所など広報組織の強化（電力と地元自治体による広報活動の強化）、電力・県・地元自治体に対する地元要望への対応（総合開発計画と地元寄与策）等といったことが行われる。

ここまでが立地を決めるまえに行なういわば事前調査で、これらを終えてはじめて発電所建設のための立地地点の現地調査や自然環境調査などの本格調査に入るが、これは発電所の基本設計のために必要な自然条件の調査のほか、環境問題対応の環境調査、用地買収や補償関係の調査等である。

このような調査から諸手続きを経て、工事の着手・発電所の建設が実施され、運転開始に至るが、工事に入る前の最後の関門が電源開発調整審議会（電調審）による建設計画の承認で、これを経て国の計画に位置づけられなければならない。これが内閣総理大臣による基本計画の決定であり、これに基づき諸手続きをクリアして工事がはじまることになる。

ところで、公害や環境に対する社会や住民の関心が高まりを背景に、建設計画を電調審へ上程するに際して、環境アセスメントを行い、地元の同意（知事の同意）が要請されるようになった。

火力発電所から排出される汚染物質は硫黄酸化物にかぎらない。このほか、窒素酸化物やばいじんなど、さまざまな汚染物質が排出される。海や河川などの水域に排出される温排水も問題となる。N共火の発電所ではそれらのうち、さきの四日市裁判の影響もあつて、発電所から排出される亜硫酸ガスなど硫黄酸化物の濃度が争点の中心となった。

いよいよ電調審への上程を迎えた四十八年十二月、N共火とN市ほか周辺の関係八町との間で公害防止細目協定および着工に関する覚書について合意（硫黄含有分〇・七九パーセント）に達した、との県の発表があつた。これを踏まえてG県知事がN共火の立地に同意し、はじめてN共火建設計画が実現へと踏み出すための最後の関門（電調審）を通る条件が揃う。なお、この合意に先立ち、N市長はSアルミとの公害防止の合意がなければ共火の工事をさせないと声明する。

同年同月二十一日、N共火の建設計画が電調審に上程され、「今後のエネルギー情勢及びアルミ精錬に関する計画の具体化を見極めたのち、諸般の措置を進めるものとする」という条件付きで、石油を燃料とする火力発電所建設計画が承認された。オイルショックの影響をまともに受けたものの、N共火建設計画が国の電源立地計画に組み入れられることが決定された。

四十九年一月、県、N市、関係八町とN共火との間で、さきの合意に基づき、公害防止細目協定（硫黄含有分〇・七九パーセント）が締結される。

この結果、N共同火力はいよいよ着工準備に入り、ひたすら着工に向けて

走り出すことになる。

「それにしても硫黄含有分〇・七九パーセントとはどういうことですか。社長の〇・二九とはかなり開きがあるが……」

彼には理解できなかった。これはSアルミの撤退をどうしても阻止したいという県当局に意思の表示だったのだろうか。

「この公害防止細目協定は県や市町村の行政当局レベルとN共火との合意に基づく協定で、住民レベルの反対運動や公害審等の動きを無視して『ごり押し気味』に締結したものだ。このため、この公害防止細目協定が火種となって、反対運動が燎原の火ように広がり出し、いよいよ工事着手の段階になったN共火建設計画に対して着工阻止の集中砲火を浴びせる。また周辺農民はN共火用の送電用鉄塔建設反対を決める一方、N市で県労評主催の初の公害反対集会、デモが繰り広げられることになったのだ」

川田はこともなげに言う。

このようななかで、初代の神田社長は任期の一年目を終えたばかりであったが、N共火の社長が交代する。次期社長にT電力で企画部長などを歴任した常務取締役田村康平が選任された。これはいささか異色の人事だったが、発電所建設を控えての人選であった。

9

「いよいよ田村康平社長の登場ですか。N共火が『四日市公害裁判判決言渡し』と『オイルショック』の間に設立されたというのなものにか暗示的な感じがしますね」

和彦はスクラップブックのページを捲りながら、ハンカチでメガネのレンズを磨いている川田に言う。

「ここでT電力は予想外の人事を行なったのだ。次期社長の呼び声の高かった男をN共火へ出した」

「田村康平氏の社長就任が予想外だったというのですか」

「そうだ。N共火では次期社長の呼び声の高かった下藤常務が選に漏れて、T電力派遣の田代康平氏が社長になった。下藤常務はこれまで飾り物の神田社長に代わって県との交渉を一手に引き受けていた。電調審上程の要件ともいえる公害防止細目協定に関する合意を取り付けるために、県に熱心に働き掛けていた。なんでも、あの合意案は下藤常務自らつくったという噂さえあった。それにSアルミの受けもいい」

「……………」

「だがその公害防止細目協定が反対運動の火種となったんだ。着工直前になって突然手のひらを返すような大反対運動が地元で起きたんだ」

川田は相変らずメガネのレンズを磨いている。

「下藤常務を社長にしなくてよかったのじゃないんですか」

「それも言える。田村康平氏から見れば、こういうときに、藪から棒に突然社長にさせられたことになる」

彼は下藤のどことなく陰気な感じがする神経質そうな顔を思い浮かべながら、レンズを磨きつづける川田の目をじつと覗く。彼には下藤が選に漏れ、代わりに社長になった田村康平がまるで貧乏くじを引かされたように聞こえる。

「大反対運動が起こったといつても、すでに電調審を通過し、公害防止細目協定も調印されて、もう着工を待つばかりじゃないんですか」

彼にはN共火の火力発電所建設計画はすでにレールのうえに乗せられ、着工までそのまま進んでいくように思えたのだ。

電気事業者が発電所を建設するために必ずクリアしなければならぬのが、電調審であった。電調審での計画承認を得て、はじめて当該計画が国の電源計画に正式に位置づけられるのだ。これで行くやうく、電力の管轄官庁である通産省から工事計画についての認可を受けることができ、建設工事に着手することになる。

このように、電調審は電源立地においてどうしても通らなければならぬ関門であったが、これを通過すれば着工までほぼ一本道だったのだ。そしてN共火はすでにその関門を通過している。なんの不足があるというのだ。彼はむしろここで社長を引き受けた田村康平の幸運を思わずにおれなかった。

「いいか。ことはそう単純じゃないのだ。確かに、一月に公害防止細目協定が調印されたときには、着工も間近と思われた。ただ建設工事の着手は、市長が言明したように、留保条件として地元とSアルミとの公害防止細目協定締結後に開始することになっていたのだ。その締結を待たなければならなかった。このことが絡んで、事態はつねに流動的だったのだ。その間、公害反対運動が燃えに燃える。突然起きた反対運動の真相を読み解くためには、関係者間の支配関係のほかに、そのうらに隠された当事者間の複雑な対抗意識構造も忘れてはならない。反対派といつてもひとつのグループに統合されてとは限らないし、主体の違いによって反対にもさまざまなレベルがあつてね……」

頬を膨らませ不審そうな顔色を浮かべている彼を見て、川田は念を押すようにつづける。

「……とにかく、N新港プロジェクトは県のプロジェクトなんだ。それゆえ、プロジェクトを進めるのはN市ではなく、あくまで県が主導的に進めようとしていることだよ。田村氏が社長に就任する頃は、県がまだ全面的にプロジェクト全体を牛耳っていたのだ。N共火との公害防止細目協定の調印も、県が強引に地元の関係一市八町を説得して推し進めたものだった……」

県は市町村に指示し、市町村は県の指示に従う支配関係にある。だがG県とN市の関係には過去の複雑な事情が影響していた。たとえN市の市長が県の方針に従うと決めても、地元住民レベルでは別だ。経済重視でN新港プロジェクトを押し進める県の考えと生活重視の住民の要求とは次元が異なる。そのうえ、N市側には長年の県政に対する根強い不信感不満感がある。

「……とにかく、県はプロジェクトを成功させたい。だが高度経済成長に陰りがみえてきて一層焦りが出てきていた。プロジェクトが失敗するようなことになれば、これを推進してきたものの責任問題となる。ようやく、N新港地区に進出を決定した企業（Sアルミ）を逃がしてたまるか。公害防止に金がかかりすぎるとなると、企業はコスト高で競争力を失うことなるのではないかと懸念し、新規投資を手控え、一度決定した進出を撤回することになりかねない。この際、地元には多少のことは目を瞑ってもらって、進出企業のご機嫌を損ねるようなことは避けねばならない。このような発想で、時間と金（コスト）に追われた県はN市と周辺八町に圧力をかけることになったのだな」

「すると、神田氏から田村氏への社長交代は、逆に、非常に緊迫した状況でのバトンタッチだったということですかね……」

彼は別に川田の説明に納得したわけではなかった。

「まあ、そういうことだな。この問題ではとにかく、県とN市の関係や地元住民の意識構造をまず年頭に置いて考えることだ。T電力もSアルミも、N市や周辺八町とは無関係に、県との取り決めだけでN新港地区への進出（立地）を決めているのだ。それに突然のオイルショックが襲い、原油価額が四倍に跳ね上がったのだ。先行きが全く不明の状況下で、早くこのプロジェクトに片を付けるには、進出が決めた企業に一日の早く工場の建設工事に着手してもらうことだった。つぎの年の四十九年中に発電所建設工事に着手するとすれば、どうしても四十八年度中に電調審を通しておかなければならない。そのために県は強引に事を運んだ。だがそのツケが……」

公害や環境悪化に対する社会意識の高揚や反対運動に対応して、このころから電源立地に対する地元住民の意向を重要視するようになった。これを受け、電調審上程の要件のひとつとして、地元知事の同意の有無が取り扱われるようになっていたことが問題を一層複雑にしたというわけである。

「……県はごり押ししてまで一生懸命進めているのに、それを阻止しようと地元の反対運動がますます熱を帯びてくる。Sアルミとの公害防止細目協定も思わしくない（協定締結は四十九年七月末までずれ込む）。後背地の買収が思うようにいかないことも重なって、県は密かにN新港開発プロジェクトの再検討をはじめめる。一方、T電力は反対運動が強まろうとお構いなしで、火電基地化構想（T電力分のプロパー電源としての火力発電所建設計画）を押し進めようとしていた。というわけで、実は、田村氏は非常な重荷を背負ってのバトンタッチだった。だが一見、敷かれたレールを走ればよいように見えるだけに、傍から見ればうまくいって当たり前、といった感じだった。これが彼にとつて不運だったと言えよう」

川田はいつもと似合わない細い声で言う。彼はふたたびスクラップブックを開き、川田が言ったこと糺すように田村氏の記事を探した。

就任挨拶をする田村康平新社長の写真を見ると、厳しい風ぼうから見ても自殺するとは思えなかった。太枠の眼鏡からはみ出した意志の強そうな太い眉、あぐらをかいた大きな鼻が支配する大きな顔。実直そうな角張った顎。こんな顔の男が県と市の狭間でもがき、地元住民に疎外され、相性がいいとは言えないT電力とSアルミの両社の板挟みに合って、双方から押し潰され、尻を叩かれ、T電力を立てればSアルミが立たない状況下で八つ裂きにされ、ただ忍従しているだけだったとは想像することができなかつた。

確かに厳しい状況にちがいない。だが一体、この男はどんな軌跡を残して、この二年を過したのか。そしてその結果、とうとう矢尽き、刀折れて、討ち死にしたというのだろうか。もしそうだとすれば、どんな思いで、死ぬ気になったのか。

「結局、田村康平氏は首を吊るために二代目の社長を引き受けたのですかね」

彼は呟くように言う。

「神田社長は辞める時期を虎視眈々として探していたらしい。後任の候補も早々に決めていたんだ。彼はいまさら敵役を演じる気がしなかつたんだね。T電力の現社長とは同期だし、名目の社長とはいえ、はるか格下のN共火の社長に留まりたいとも思わなかつたんだろう」

「とはいっても、お膳立てが揃いすぎている感じがしますが……、田村康平氏は誰かに嵌められたんじゃないんでしょうかね。T電力の社長候補だつ

たんでしょ」

「後から見ればそのように見えるだけじゃないのかね。社長候補といつても呼び声だけだったかもしれないし……」

「そうでしょうか。それだけではないような気がしますが……」

「……………」

川田は黙ってふたたびハンカチで眼鏡を拭き出す。

「T電力の権力闘争か……」

彼は口の中で呟くように言いながら、鋭い目をしてスクラップブックをめくる。日付を追いながら、彼はN共火の着工を目の前にして繰り広げられた住民らの阻止闘争を思い浮かべた。

発端は、四十九年一月に、県、N市、周辺八町とN共火との間で締結された公害防止細目協定だった。

公害防止細目協定は前年の十二月、四十八年度の電調審に滑り込むために、その直前、県、地元関係市町村とN共火が交わした公害防止細目協定及び着工に関する覚書に基づき締結されたものである。この細目協定に定められたN共火力発電所から排出される主な汚染物質の目標値はつぎのようなものだった。

- ・燃料中の硫黄含有率は仕上がり〇・七九パーセント以下
- ・排ガス中のばいじん濃度は〇・〇四グラム／立方メートル以下
- ・煙突の高さは一八〇メートルで、二管集合式で、排ガス温度および排出速度は一三〇℃で毎秒三〇メートル
- ・排水中の水素イオンは六から八・四までの間
- ・化学的酸素要求量は四〇ミリグラム／リットル
- ・冷却用水の取水口と排水口における温度差は八℃以下

このうち、N市住民らがとくに問題にし、反対運動のターゲットにしたのは亜硫酸ガス濃度であった。

N共火は重油を燃焼して発電をおこなう火力発電所であるため、燃料となる重油に硫黄が含まれていると燃焼によって亜硫酸ガスなどの硫黄酸化物が生成される。重油は石油（原油）の精製過程でガソリンなどの軽質分を取ったあとに残る重質の石油で、これには残渣として硫黄分などが含まれているからだ。

地上の亜硫酸ガス濃度を低く抑える対策には、煙突から排出する煙を大気中で広く拡散して亜硫酸ガス濃度を薄める方法と、排煙に含まれている亜硫酸ガス濃度を低く抑える方法とがある。前の方法では高い煙突から高温の煙を勢いよく吹き出し、煙のなおかの亜硫酸ガスを上空高く広範囲に拡散してしまい、地上に下りてくる亜硫酸ガス濃度を薄めるようにするのもだ。後の方法には燃料中の含有硫黄分の低い燃料を使用する方法と、燃焼後排煙中から亜硫酸ガス（硫黄分）を取り除く方法（排煙脱硫）とがある。実際にはこれらを併用するのが一般である。公害防止細目協定でも併用することになっていた。

公害防止細目協定の目標値で「燃料中の硫黄含有率……以下」としているのは、使用する重油中の含有硫黄分を限定し、発生する亜硫酸ガスなどの硫黄酸化物の量と濃度を抑えようとすることである。また「仕上がり〇・七九パーセント」というのは、煙突から排出する亜硫酸ガスなどの硫黄酸化物の量（排出量）と濃度（排出濃度）を硫黄含有率〇・七九パーセントの重油を燃焼したときと同じにすることである。もし硫黄含有率が〇・七九パーセント以上の重油を使用するときは、排煙脱硫装置などで燃焼ガス中から過剰の亜硫酸ガスなどの硫黄酸化物を取り除き、煙突から排

出する亜硫酸ガスなどの硫黄酸化物の量と濃度を硫黄含有率〇・七九パーセントの重油を燃焼したときと同じようにしなければならぬということだ。

また、煙突の高さ、排ガス温度や排出速度を決めているのは、これらの条件によって地上に到達する亜硫酸ガスなどの硫黄酸化物の濃度が左右されるからである。煙突が高ければそれだけ拡散されて亜硫酸ガスなどの硫黄酸化物の濃度が薄まるし、煙突から出る排ガスの温度が高ければそれだけ空高く上昇する。また、排出速度が速ければ排ガスをさらに空高く押し上げていく。上空高く昇った亜硫酸ガスなどの硫黄酸化物はそれだけ広く拡散されて地上に到達する濃度は薄まることになる。煙突を高くしたり、排ガス温度や排出速度を高めることは大気中の亜硫酸ガスなどの硫黄酸化物の濃度を低め、人体や生物への影響を少なくするための対策というわけである。

もつとも、このような対策が有効なのは大気中に存在する時間が短い物質に限られる。大気中では亜硫酸ガスなどの硫黄酸化物は自然に分解していく。その寿命は約一週間と短い。このような物質であれば、大気中に排出しても蓄積することがないから煙突を高くして拡散する対策が有効であるが、これに対して、これまた火力発電所から大量に排出される二酸化炭素（炭酸ガス）はそうはいかない。

二酸化炭素（炭酸ガス）は地球温暖化をもたらす主要な原因物質のひとつである。このガスの大気中の寿命は二百年から五百年と長いのだ。このため、煙突を高くして大気中で拡散し希釈するする対策は役立たない。

N共火との公害防止細目協定のなかでとくに関心がもたれたのは、発電所で使用する燃料の硫黄含有分だった。県は個々の企業との公害防止協定

を締結する前提として、N新港の開発地域全体を対象に、包括的な「N新港地区公害防止基本計画」を策定していた。

この基本計画に基づき、県とN市はN共火を対象として公害防止細目協定自治体案（使用燃料重油の硫黄含有分〇・九五パーセント）をまとめ、この案をN市の公害審に諮り、答申を得た。公害防止細目協定はこの答申を踏まえてつくられた形になっている。だが答申は、公害審を延べ四八回にわたり開いたものの、賛成派と反対派の対立が激しく、十分な審議が行われないまま、時間切れで作成されたものだった。

N共火の着工直前に激しく燃え上がった反対運動において攻防の中心となったのが、使用燃料重油の硫黄含有分だった。亜硫酸ガスがとくに関心がもたれたのは、四日市裁判で亜硫酸ガスの健康影響が指摘されたこともよるが、県主導で決めた「燃料中の硫黄含有率は仕上がり〇・七九パーセント以下」という高い値についてだった。

これは原案の〇・九五パーセントよりも低く、N共火には厳しいものの、電力業界の社長会で五十二年度全火力使用燃料の平均硫黄含有分を〇・二九パーセントとする旨の決定（四十八年六月）に比べてあまりにも甘い目標値だった。いかにも住民をバカにし、かつ地元には犠牲を強いる値だった。

反対派は二月にT電力へ押し掛け、使用燃料油の硫黄含有分〇・三パーセント以下がN共火の立地条件だと要求した。なお、前年十二月、県と関係市町村がN共火との公害防止細目協定に合意した際に、地区労も「われわれの要求は〇・三パーセントである」と不満を表明していた。

三月に入ると、N共火用送電鉄塔建設反対の農民が期成同盟を結成して、送電線建設反対運動が表面化した。これと前後して、県は後背地の買収難からN新港プロジェクトの二期計画の見直しを発表する。

四月、N共火の着工と送電線問題の解決という課題を担わされて田村康平社長が登場する。田村新社長は就任挨拶で「公害防止には万全を図り、地域協調のもとにできるだけ早く着工できるよう努力していきたい」と言明し、排煙脱硫装置の導入など公害防止対策の検討を重ねる。

だがN共火の着工には亜硫酸ガスの問題のほかに、もうひとつクリアされなければならない条件があった。

N共火の電調審承認には「今後のエネルギー情勢及びアルミ精錬に関する計画の具体化を見極めたのち、諸般の措置を進めるものとす」とし、「エネルギー事情、多電力消費型アルミ産業の問題点を考慮しながら措置を講ずること」という条件が付せられていた。これに先立ち、資源エネルギー庁長官はオイルショック後の状況を踏まえ、石油不足のため資源多消費産業を抑制する方針であり、電力を多く消費するアルミ工業のためのN共火建設は慎重に扱うと言明していたのである。このため、N共火建設問題はSアルミの動向とセットで扱われ、Sアルミが地元と公害防止細目協定を交わさない限り、N共火の着工はありえない状況におかれていたのである。

N市公害審での審議難航、強行採決、市長のリコール請求など、擦つた揉んだした揚句、四十九年七月、ようやくN市案をもとに県が作成した「公害防止細目協定自治体案」が提示される。Sアルミはこれを受け入れ、同月末、公害防止細目協定と付帯覚書が締結された。N市の公害審で激しい争点となった排出口のガス状フツ化物濃度も、市の要求より厳しい〇・二五ミリグラムと目標値が定められたものの、地元の革新団体は行政レベルで一方的に決めたことに対して強く反発を示す。

まがりなりにも、Sアルミの公害防止細目協定締結によって、N共火に

は着工の条件が揃う。N共火は排ガスの全量排脱を受け入れ、建設整備体制の準備に着手し、着工に向けて歩み出す。

排ガスの全量を対象とする排脱装置導入により、着工を控えて最大の争点となっていた使用燃料油の硫黄含有分の仕上がりレベルがさらに低まることになった。だがどこまで低まるか定かでなく、紛争を解消するまでにはいかなかった。

N共火は反対派との合意をうることなく、着工のための手続きに入る。九月末に事業認可を受けると、十月初めに、工事計画の認可を受け、つづいて、建築確認申請許可を受けた。これを踏まえ、県に対して、電気事業法認可の計画と公害防止計画について説明を行なう。N共火側はこれで着工体制が整う。

「いよいよ着工ですな」

「ここで一悶着が生じた」

川田はレンズを拭き了え、メガネを掛け直す。

10

N共火着工直前の動きはつぎのようであった。

十月四日午後六時、公害防止の立場から使用燃料油の硫黄含有分〇・三パーセント以下を主張する地元地区労はN市の労働会館で単産代表者会議を開き、N共火、Sアルミの建設着工を事実で阻止する方針を決める。千五百人以上を動員して、座り込みやピケを主体とした阻止行動で臨む。

翌五日午後五時半、落日間際で薄暗く、猛烈な砂あらしが吹くなか、N

共火の職員四、五人がN新港地区の着工予定地に用地杭四本を急いで打ち込み、立ち入り禁止の看板六枚を立てる。監視している労組員はなく、作業は妨害なく終わる。職員のひとり「建設確認がおりたので、建設場所をはつきりさせるため杭を打った」と言った。

七日午後、田村社長が県知事を訪ね、「(排ガス中硫黄酸化物濃度は全量排煙脱硫装置などで低減し)燃料中の硫黄含有率は(実質)〇・四以下にし、また煙道中の窒素酸化物も二段燃焼排ガス再循環などによって一五〇PPM以下にすることで、工事計画が認可された」と報告する。

「当日、N共火では下藤常務(N共火建設所長)が現地で指揮を取り、午前七時ごろから建設作業員二百人を使って、主に建設事務所の資材、境界柵、工事標識、看板などを搬入する予定でいたのだ」

川田は当時を思い出したのか、遠くを見る目をした。
「……………」

和彦には反対派の動きが気になったが、じつと川田が口を開くのを待つ。

「N共火の着工を明朝に控えて地区労が動き出した。地区労では予定地に通じる国道二本を早朝午前五時ごろから千五百人の組合員を動員して封鎖する構えだ。前日の午後、地区労組員が予定地周辺にテントや立て看板を立てる。これに対して、N共火のほうでは地区労の阻止行動に備え、状況によっては機動隊に排除要請する場合もありうるとにおわせる。地区労では対抗して、代表が本署を訪れ、阻止行動に対して権力の不当な介入をしないしてほしい旨の申し入れを行なう。この事態を重視した県警本部が本署に公害闘争警備本部を設け、百五十人の機動隊員を待機させていたのだ」

着工行動一日目(同月八日)、午前七時半すぎ、仮境界に使う杭を積んだトラックと作業員、職員ら六十二人が現場入口に到着し、用地に入ろう

としたところ、午前五時ごろから道路に座り込んで待機していた労組員に阻止される。N共火下藤常務が「道を開けて下さい」と再三にわたってハンドマイクで呼びかけるが、ピケを張る労組員の「公害企業反対」「火電基地化粉砕、強行着工阻止」「N共火は帰れ」というシュプレヒコールに会い、立ち往生する。交渉にも話し合いにも入れず、機動隊が待機するなか、雨に濡れた狭い道路で双方が睨み合い、応酬を重ねる。同日午前中、着工できないまま、睨み合いが続く。N共火は雨が激しくなった午後二時四十分はこの日の作業を諦め、引き揚げる。N共火では明九日午前八時半から再び作業を開始する予定という。

同二日目(同月九日)、朝のうちは強い雨、午後からは冷たい潮風が吹く砂丘の道路で、N共火とピケ隊の睨み合いが夕方まで続く。地区労側はこの日も労組員、住民ら三百五十人を動員し、午前六時すぎ、N共火用地へ通じる路上にピケを張った。N共火側は前日の二倍の陣容の職員、作業員ら約百人とトラック二台で、午前九時前に現地に到着する。ポリウム一杯のマイクでの激しい応酬のなか、職員らは隊列を組み、ピケの解放を迫る。さらにマイクロバスに分乗してピケ隊への急接近を何度も繰り返し、強行突破を試みるが果たさず引き返す。

地元選出の革新派県会議員が現状打開のため、企業誘致の最大の責任者である県に対して具体策を表明するよう要望し、これに対する県の回答があるまで、双方に一時休戦を提案する。地区労側はピケを張ったままで様子を探り、N共火側は午後三時までの作業予定を日没まで延期して県からの連絡を待ったが、結局、なんらの連絡もないまま、双方、睨み合いを続ける。午後五時三十五分、日暮れとともに、N共火は資材搬入中止を決定して引き揚げ、十分後、ピケ隊も解散する。

同三日目（同月十日）、前日と打って変わったバカ陽気のなか、約二百五十人の労組員は前日同様現場入口の工事用道路に座り込んでピケを張る。N共火は作業員ら六十二人と資材を積んだトラックが午前九時と午後一時ごろの二回にわたって現場に来たが、ピケ隊と約一時間簡単な押し問答を繰り返しただけで引き揚げる。

同四日目（同月十一日）、ぬけるような秋空のもと、地区労側は前日と同じように早朝からピケを張る。午前九時前、N共火側の作業員ら六十二人と資材を積んだトラック二台が到着する。同様のやり取りが繰り返され、睨み合いに入る。進展はなく、膠着状態が続く。

一方、県庁で、午後一時から県に対して県労評、地区労が「N新港開発を白紙に戻せというのではない。着工の前に、解決しなければならぬ課題が多い。地元住民の開発にまつわる不安を解消したあとで、工事に入るのが筋なので、懸案事項が解決するまで、着工を延期して欲しい。われわれの要求が入れられれば、ピケも解除する」と申し入れ、「現在の睨み合いの状態を打開するため、開発主体である県が仲介すべきだ」として、話し合いに入る。

その結果、一時休戦して、明十二日午後二時から関係者による話し合いを開くことになった。県労評では「公害を出さない、地場産業を守る、地元雇用を努力するの『開発三原則』を取り上げ、当面は公害問題に重点を置く」ことにし、具体的には、燃料中の硫黄分を仕上がりで〇・三パーセントにすること、発電所建設に伴う騒音公害および地下水枯れの防止を事前に保証すること、ダンプやトラックなどの交通公害などに配慮することなどを求める。

同五日目（同月十二日）、午後一時から副知事室で、県のほか、N共火、

Sアルミ、県労評、地区労らが話し合いをはじめ。

同六日目（同月十三日）、「開発三原則遵守、全量排煙脱硫装置の設置、硫黄分〇・三パーセント以下とする」などの内容の確認書を取り交わす。地区労側は着工阻止行動を中止する。

同七日目（同月十四日）、N共火、着工する。

「これでようやく着工できたわけですか。それにしてもN共火側は途中でなぜ戦術を変えることにしたのですか」

「二日目まで下藤常務が指揮を取っていた。彼は機動隊を入れてでもピケを強行突破するつもりだったらしい」

川田は遠くを見るような目で彼を見る。

「雨のせいではできなかったんですかね」

彼は呟く。

「バカ言え。田村社長が機動隊を入れることを許さなかったのだ。三日目から田村社長本人が指揮をとったのだ」

「へー、そうでしたか。でも、田村康平新社長が指揮を取って進めた着工劇も終わってみれば、燃料油の硫黄分〇・一パーセントを巡る攻防だったということになりますね。一体、このことにどんな意味があったんですかね」

彼は近づいて来た川田に言った。

「うーん……、まあ、県労評や地区労ら革新派側は存在感を示すことができたというところだろう。市長選を控えていたから引くに引けなかったんだろうし……、まあ言分を通すことができたし……」

彼は隣の空いている机に腰をもたせている川田の目をじっと覗き込んだ。

川田は一瞬、目を反らした。彼は川田のなんとなく言い淀んだような感じの言い方になにかを隠しているような気がした。だがなにを隠そうとして

いるのか、彼には見当がつかない。

「地元住民や一般市民のなかには着工寸前という殆どすべてが決まってしまった段階での実力行使には疑問を持つものも多かったんじゃないんですか。なぜもつと早い段階に地区労が行動を起こさなかったのですかね」

「うむ……、下藤常務は最後まで強行突破を唱えていたらしい。T電力から動員された作業員のなかにはピケ隊と小突き合いをやったものもいた」

「進出企業が着工寸前となつてもう進出を取り止める気遣いがなくなつたところで、一暴れして条件をよくする。進出企業の足元を見て攻勢をかけるところなんか、県労評らがまるで県や市とグルになつて書いたようなシナリオといった感じがしますがね」

彼は分かつたような生意気な口調で言う。

「県労評や地区労はもとも条件闘争派だったからな。彼らは一番効果的な場面で実力行使を行なつたということだろう」

「田村社長には着工直前、県を訪れ、硫黄分を○・四パーセントにするといつたとき、これでスムーズに着工できると思っていたんですかね。そのとき、彼の頭のなかに○・三パーセントの線があつたんじゃないんですか。地区労のピケは予想されていたことだし、ことさら対峙する姿勢を取つたのも落としどころを考えての作戦だったようだし、あれは地区労の顔を立てるための儀式だったのでは……」

「……………」
川田は口を閉じたままに焦点のぼけた目を向け、意味不明の薄笑いを浮かべた。それは「まあなあ」と言っているふうにも見える。彼はますます図に乗る。

「それに、電力業界が社長会で○・二九の線を出しているのに、県労評と

地区労が依然として○・三に拘泥したのも解せないですね。それとも、県と市、県労評と地区労、N共火の三者が暗黙のうちにも前もって『三方一両損』のかたちで落としどころを決めていたのですかね」

「なるほど。そういう見方もできるか……」

「これによつて電調審上程のために下藤常務が無理して押し進めた県と一市八町の合意（公害防止細目協定及び着工に関する覚書の合意）は完全に否定されたことになりますね。彼にすればピケを強行突破してでも守りたかつたんでしょうね、きつと……。Sアルミとの関係でもそうしてかつたのじゃないんですか。いや、これは自分のためにもそうしたかつたにちがいないと思いますよ」

彼はスクラップブックをめくり、つづいてなされたSアルミ着工までの反対派とのやりとりを読みながら、N共火の着工を巡る動きにはなんとなく作爲の匂いがしてならなかつた。

とのかく、電調審に滑り込むために交わした県や地元関係市町村とN共火との公害防止基本協定の合意や着工に関する覚書、これに基づき締結した公害防止細目協定といったものは一体なんだったのか。あれはN新港プロジェクトをどうしても進めたい県当局とN共火（その裏で火電基地化構想実現を狙うT電力）との電調審を通すための単なる馴れ合いの猿芝居だったということか。とすれば協定で定めた燃料中硫黄含有率（排ガス濃度換算）○・七九パーセント以下という目標値はどういう意味だったか。Sアルミの関心を引くための単なるデモンストラーションだったとでもいうのか。

田村康平社長は就任後、着工までの一〇カ月の間に、下藤常務が奔走して獲得したこの目標値の数字をつぎつぎと書き換えていった。燃料中硫黄

含有率は着工寸前に〇・四まで低減していく。なぜこうなったのか。目標値の低減が可能ならなぜ協定時になぜそうしなかったのか。いかなる理由があれば、結果的に、協定に盛り込まれた数値が無視されたことになりがなかった。それにピケまで張った地区労らが〇・三と全国レベルと違う数値を上げていたことも不可解といえれば不可解なことだった。

N共着火工後に、待つていましたとばかりに、間髪を入れずに進められたSアルミをめぐる着工経緯は、おおよそつぎのようなものであった。

県労評などの要望に応え、県が斡旋していた事前の話し合いが不調に終わったと見るや、Sアルミは十一月二日に着工の行動を起こす。だが地区労を中心とする反対派に阻止され、着工できなかつた。

その後、Sアルミは夜間の着工も辞せずの構えで何度も着工を試みる。だが果たせず、市に斡旋を依頼する。

市の休戦提案を受け入れ、再度、県の斡旋で、八日(七日目)に両者の交渉が県庁で行われる。難航の末、九日の午後五時すぎ、ようやく確認書を取り交わし、行動開始九日目の十二月十日にようやく着工にこぎつける。

確認書の内容は厳しいものだった。排煙中のフッ化物は協定で合意した〇・二五ミリグラムが撤回されて完全回収となつたほか、地元雇用が期待される庄延部門の操業開始時期を当初計画通りとする、といったものであった。

「まあ、後から見ると作為があつたように見えるかもしれないが、成り行きでそんなふうになつたと見るほうが素直じゃないのか」

川田は当時のことを蒸し返されるのが耐えられないのか、気のない言い方をした。彼はそんな川田に氣遣うことなくつづける。

「それにしても、硫黄分〇・七九パーセントという内容の公害防止細目協

定で地元が合意したとして電調審を通しておきながら、今度は地元の反対で〇・三になりましたで済むんですかね。最初の知事の同意は単なる形式に過ぎないというんですか。とにかくもう一度電調審の審議をやり直す必要があるんじゃないんですか。これは単に公害が低減されたからいいって済む問題じゃないでしょう。県の斡旋とはいえ、当初の協定を破棄されることになってSアルミも騙されたような気になるんじゃないですか。こゝうなつたことに対して誰がどのように責任を取るんですか」

彼は自分でもかなりおかしいと思いつつ、突っ込んでいく。

「結局誰も責任を取らない。というより、誰も責任を取らなくてもいいように収めるのが日本流なんだな。曖昧さ、これが日本文化の特徴なんだ。まあ、地元住民の利益になることだからそれはそれでいいということだ」

川田がぼつんと言う。

「すると、着工に至るまでには、田村氏の失点となるようなところは見当たらないということになるんですか。これでは下藤氏だけがいい面の皮ですな」

彼はどうにも腑に落ちない。

「そうかね……」

「重油の価格は硫黄含有分で決まるそうですね。とすればたとえ〇・一パーセントといえども発電コストに響くんじゃないんですか。七〇万キロワットの火力発電では年間の重油消費量が約一一三万キロワットにもなるんですから。となると、〇・三で合意したことによって発電コストを高めた責任が田村氏にあるということになるはずじゃないんですか。本人だけではないふりをしてそうしたのであれば、そのためにT電力やSアルミから激しい追及や圧力をうけることは必至であり、それを苦にして、その結果、

首を吊ることになった……」

彼は「N共同火力発電所の新設工事計画の概要」という四つ折りのパンフレットを開いて、急に知ったかぶりして言う。

「なにを考えているんだ。そんな短兵急に結論を出そうとするな。もし、〇・四に固守して着工が出来なかつたら、いつまでも発電所が建設できない状況がつづくことになる。もしそうなつたら、こんなことで済まないだろう。着工が四十九年十月だ。田村康平社長が死んだのはそのつぎのつぎの年の五十一年三月だ。その間にまだまだいろいろなことがあつたと考える方が当然だろう」

新米の実習授業はこれまでというように、川田はふいと腰を上げると、彼の机から離れて自分の席に戻っていく。彼はふたたびスクラップブックに目を移した。

11

和彦はスクラップブックのページをめくりつつづける。だが彼はなにも見えていなかった。どうしても腑に落ちないのだ。頭のなかを〇・三という数字だけがぐるぐる回りつつづけていた。

なぜか彼には、田村社長が腹のなかで最初から地区労のいう〇・三でいこうと決めていたのではないかと思えてしかたがなかつた。たとえば田村社長本人がそのシナリオを書かなくても誰かが書いていたのだ。

社長就任の約一年前に四日市判決があり、その半年後にオイルショックを目の辺りにした男が、社長を引き受けるにあたって公害問題の重大性や

四倍にも急騰した原油価格についてなんらの考えもなかつたとは思えない。田村社長にとって、着工への一週間はN共火と地区労の茶番劇だったにすぎないのだ。

とにかく、なにがなんでも着工してN共火力発電所を建設する。これがシナリオの骨子だったのだ。

それにしても、なぜ一週間もかけたのか。下藤への配慮か、それともT電力の圧力に怯えたからか。それとも地区労への敬意とでもいうのか。

彼にはどうしても分からないのだ。落としどころが分かっているながら、たとえ合意のための儀式だとしても、なぜこれをつづけなければならぬのか。

これは一体どういうことだ。いくら文明が進んでも、人間にはそして人間社会には祖先返りの要素を払拭することができないともいうのだろうか。

彼は無駄に費やしたように見える一週間になにかが隠されているような気がした。

「もしかしたら、田村社長はこの計画自体に反対だったのでなかったのか。そしてさらに先のことを考えていたのではないのか……」

彼は口走る。

「おい、なんと言った……」

川田が聞きとがめるように口を挟む。

「なんでもありません。ちよつとそんな気がしたので……」

彼は即座に打ち消す。

「……………」

川田は無言で鋭い視線を向け、じつと彼を見ている。

彼は素知らぬ振りをして、ふたたびスクラップブックのページをめくり

はじめる。何枚かページをめくると、突然「送電線」という大きな活字の見出しが目に飛び込んできた。彼はここに謎を解く鍵が隠されているような気がした。

「いよいよ送電線問題の全面的浮上ですか……」

彼は川田の注意を背けるように大きな声を出し、横目で川田を盗み見する。

「……………」

川田は相変わらず口を動かさそうとしない。

問題となっている送電線はN共火発電所と近くを通るT電力の既設送電線とを結ぶもので、建設主体はN共火でなく、T電力であった。このことがこの問題を一層複雑にしているらしい。

「T電力の火電基地化構想はまだ生きているのか」

彼は口の中で呟く。

T電力はN共火発電所と結ぶ送電線の容量をN共火用より大きめにはじき出しているのだ。これはプロパー電源のための火電基地化構想を前提としているからにちがいない。

N新港プロジェクトの開発絶対反対派はN共火とSアルミに対して、四十九年七月十九日に環境権に基づき「N共同火力発電所建設差し止めの訴え」を提起していたが、着工問題が一段落したところで、同年十一月二十日、今度は「N共同火力送電用鉄塔の新設中止と埋蔵文化財群の特別遺跡指定」の陳情書を文化庁に出した。

現在建設中の発電所が計画通り運転を開始するには、その二カ月まえに公害防止施設などの各種機械の試運転をやり、点検を済ませておかなければならないが、これには約二万キロワットの電力が必要だった。

また、Sアルミの試運転にも、約二万キロワットの電力が必要なのだ。工場操業に際しては、百十五個ある電解炉に一つずつに通電し、何日もかけて全部の炉が運転できるようにしなければならないからだ。

ところがN新港地区には使用可能な電力は現在僅か三〇〇〇キロワット程度しかない。不足分補うためには、近くを通るR幹線から高圧電力を送電してもらおうほかなかった。だがそれには、T電力がR幹線までの送電線を新たに建設することが必要だったのだ。

このため、T電力はN共火の近くにN新港変電所を設置し、そこから背後地を通ってR幹線に連結する新送電ルートを計画した。さらにT電力は、地元になんらの説明もなく、将来N共火に隣接して建設を予定しているT電力の火電基地（プロパー電源火力発電所二四〇万キロワット）の送電分を考慮し、新設送電線の送電容量を大幅にアップして二七万五〇〇ボルトにするとともに、R幹線との連結とは別に、全国を縦断する大幹線に接続する送電線路建設計画を隠密裏に進めていた。

これに対して、地元住民や地区労はN新港の火電基地化に反対して、ここに建設する火力発電所はN共火分のみとし、T電力の新たな火力発電所建設を決して認めようとしなかった。だからそれを前提とする二七万五〇〇ボルトの送電線建設を地元が認めるはずがないのだ。

T電力としては将来予想される電力需要の増加傾向を考えれば、簡単に火電基地計画を放棄することは出来なかった。それにN共火のためだけの送電線を延々と引くことはあまりに非効率的であるというより無駄な投資ですらあった。そのため、T電力は送電線への先行投資を行い、将来の火力発電所立地の可能性を残してきたかった。

このような思惑のもとで、送電線を建設する主体であるT電力はR幹線

に連結する送電用鉄塔建設用地の買収を進めてきたが、N新港背後地区の地権者の反対に会い、用地買収の話し合いの交渉は難航する。

五十年二月十四日、T電力は背後地区の建設反対に対して、建設大臣に土地収用法に基づく事業認定を申請し、反対派に揺さぶりをかける。

同年三月七日、送電線建設に反対している予定地の地権者と市民三十二人の代表が通産大臣に建設認可に対する行政不服審査請求書を提出した。請求人らは「『T電力は最初、地元でSアルミの精錬所の試運転に使う電力を通さなくてはならないので、送電線を張らしてくれ』とやってきたが、それがいつの間にか大規模な火力発電所（二四〇万キロワット相当）を想定した送電線鉄塔を立てようとしている。今、同電力は土地収用法の事業認定の申請をしているので、できるだけ早く判決を出してほしい」と訴える。

同年三月十五日、T電力はN共火発電所とR幹線を結ぶ送電線鉄塔建設用の用地買収が終わった箇所から建設のための工事用道路をつくるなどの事前の準備工事に着手する。

同年三月十九日、反対派は送電線対策協議会総会で、送電線問題には火電基地、電波障害など地権者だけにとどまらない問題を含むとして、役員に住民代表を加え、反対運動を拡大する。反対派の送電線ルート変更とN共火相当分への設備容量縮小要求に対して、T電力は将来の電力事情の見通しを理由に応ぜず、両者睨み合いのまま膠着状態が続く。

同年十一月末、一時はT電力は送電線のルート変更と設備容量縮小を前提に、地元と同意書を交わすところまでいったが、翌五十一年一月、全国を縦断する大幹線に接続する二七万五〇〇〇ボルトのM幹線の建設が明るみに出て、火電基地化に反対する地元は同意書を白紙撤回する。

五十一年一月十九日、T電力は土地収用法の申請を取り下げ、用地の収用を止め、話し合いの姿勢を打ち出すも、設備容量の縮小に依らず、二七万五〇〇〇ボルト計画を固辞し続ける。

同年二月八日、送電線問題に関して、T電力、県、県議会の三者による協議会を設置する。この席で、T電力のR幹線およびM幹線の全体計画の全貌と用地買収がかなり進行していることが明らかにされる。

同年同月二十日、送電線対策協議会が地元主導で「共火の専用線（一五万四〇〇〇ボルト）とする」条件の新ルートを決め、同意書のまとめに動く。

同年三月三日、T電力がすでに送電線建設工事をはじめている工事現場で県指定の遺跡の遺品と見られる「埋もれ木」が見つかる。

同年三月四日、昨年七月から工事に着手していたN共火側の受送電設備（変電所までの引き込み線とSアルミの受電設備等）が竣工し、このほど官検を合格する。これでR幹線と連結するためのN共火側の準備はすべて完了する。

同年三月十八日、地元側が県議会の斡旋を受け入れ、ようやくR幹線と連結する送電線問題の解決が近づくが、交渉の席上、一部地権者が一度同意のうえ決定したルートをさらに変更した新ルートに難色を示し、再び、同意は白紙撤回となる。T電力もまた二七万五〇〇〇ボルト計画を変更する考えはなく、解決の見通しが立たないまま、ずるずると日を重ねる。

「結局、送電線問題が命取りになったんですか。それにしてもどうしてT電力は妥協しようとしなかったのですかね。なんとなく田村社長に執拗に嫌がらせをしているようにも見えますが……」

彼は椅子を回して、真つ正面から川田に目を向ける。

「N共火もSアルミも今秋の操業予定が狂いそうだな。Sアルミの方は景気も悪くなってきているから、この際、予定を大幅に先に延ばすことも視野に入れていただろうが、田村氏も送電線問題がここまでこじれるとは思っていなかっただろう。やはり、T電力の田村氏に対する嫌がらせと見えるかね」

「でもどうしてこんなにこじれてしまったんですかね。単なる嫌がらせとは思えないほどの嫌がらせじゃないですか。なにか恨みをあつたのですかね。それともこの際、いつそのこと田村社長を葬ろうとしたのですかね」

「T電力がかね。まさかそんなことはないと思うが、もとはといえば、T電力など企業側が時代の流れや国際社会の動きを見極めずに計画を進める一方で、地元住民を甘く見ていたからだな。それに……」

「それになんですか」

「なんとといっても企業側の関係が悪い。T電力とSアルミの間に大きな考え方の違いがあつた。というより、一方は地域独占にあぐらをかき面子を重んじるT電力、他方は面子を損ねても実利を取ろうとする関西資本のSアルミ、メンツとコストで主導権争いをやっているところがあつた」

川田はお茶をうまそうに飲んでいる。

「それでT電力はN共火を通してSアルミに嫌がらせをしているのですか。それで送電線の設備容量の縮小に応じようとしないうわけですか」

「そうかもしれないな。でもそうすればかえってSアルミに撤退の口実を与えかねない。だからT電力が意識してそうやっているかどうかは分からないが、大きな組織では一度決めたことを変えることは難しいのだろう。それに誰も責任を取りたくないだろうしな。大体、送電線建設がこんな大事になるとは誰も考えていなかったんだろう」

電力会社においては、発電所の立地地点が決まりさえすれば、送電線はどうにでも引けるといふ考えが支配的だった。電源立地計画においては発電所を立地する地点の選定が主で、送電線建設は従の関係なのだ。実際、送電線路用地は鉄塔建設用地を確保すればよく、ルート線の線引きが比較的自由である。そのうえ、どうしても用地買収に応じない地権者に対しては、土地収用法の事業認定を受け、強制的に土地を取得することも可能であった。公共性の高い送電線の場合、どちらかというところ、ルートのごく一部の用地が買収できないケースでは事業認定を受けやすかった。

「T電力は用地買収ができたところから送電鉄塔の建設をはじめ、最終的に、反対派の地区を通るルートが残れば、事業認定で強制的に取得することを考えていたんですかね。実際、T電力は五十年二月に反対地区を対象に事業認定の申請をしていますからね。N共火もそれに応ずる手はずを整えていた。ところが、T電力は今年の一月になって申請していた事業認定を取り下げしてしまう。なぜでしょうか」

「ここがひとつのポイントだね。用地を強制力で買収することを止めたというが、多分、反対派が絶対反対ではなく条件反対なので交渉の余地が残されているわけだし、それに二七万五〇〇〇ポルトでは申請が通らないことが分かったからではないのか」

「そうだったのですか。一五万四〇〇〇ポルトしか認められないなら、わざわざ収用法を持ち出すまでもないというわけですか。なるほど」

「T電力としてはすでに工事を終えた分は二七万五〇〇〇ポルトであるし、それが反対地区の目の前まで引いてきているとすれば、残りの部分もどうしても同じ二七万五〇〇〇で通したいわけだ。それが事業認定によって一

五万四〇〇〇ボルトに縮小されてはかなわないということだろう」

「T電力は二七万五〇〇〇に固執する一方、反対派は一五万四〇〇〇を譲らず、送電線問題の解決の見通しが立たない状況下で、Sアルミの操業予定のタイムリミットが刻々と迫ってくる。T電力のエゴのまえに、N共火は手も足も出せず刻一刻と窮地の追い込まれていく。そんななかで田村康平社長が首を吊る……。これは一見、社長として極めて無責任と見える行動ですが……。これをどう見たらいいのですかね」

彼はT電力と反対派に翻弄され、疲れ果てた田村社長がすべてが嫌になり、死神に誘われるまま、底の見えない死の深淵に自ら身を投じたような気がした。目の前に立ちふさがる巨大な壁に進むべき道を塞がれてしまった田村社長が哀れに思えて仕方がなかった。

第二章

12

田村康平の死後、一週間も経ずに、送電線問題は意外な展開を見せた。急速に解決に向けて動き出したのだ。

いままで頑なに拒否していた反対派とT電力が県や市の斡旋を受け入れる。反対派は送電線建設に合意し、新ルートを提案するとともに、T電力は送電線の設備容量の縮小を呑む意向を示したのだ。まるで田村康平を死に追いつめた責任を回避するかのような反対派の譲歩に、T電力も支えを失ったかのように歩み寄り、従来の主張を取り下げてしまったのだ。

五十一年四月六日午後、反対派の地区送電線対策協議会はN市長に用地買取に応じる同意書を手渡した。これを受けて、県と市はT電力に斡旋案を提示する。T電力は早速、斡旋受け入れを前提に、反対地区に残された三十基の送電鉄塔を建設する計画の一部変更申請を行うための現地測量に入った。反対地区を通る送電線の設備容量のみ十五万四千ボルトに縮小する認可を得れば、正式に斡旋案を受諾し、五月下旬にも工事に着工、突貫工事で十月ごろまでに完成する計画だった。

N共火もSアルミも計画通りの操業がムリだと諦めかけていた矢先の急変だった。これでN共火もSアルミも予定通り年内操業が可能となる。

一体これはどうしたわけか。和彦にはどうしても理解できなかつた。とくに、T電力の豹変振りはどうか。

「それにしても急激過ぎますね。これではまるで田村社長が死ぬのを待つ

ていたようではありませんか。田村社長はやはり……」

彼は「覚悟の自殺だったのでしょうか」とつづけようとしたり。だが川田を見て急に口を噤む。いままでのどことなく焦点のぼけたような雰囲気が消え、目の色まで変わって見えるのだ。

「……………」

川田はじつと考え込んでいる。

「どうかなさったのですか」

彼は川田をじつと見る。目にはこれまで感じられなかった闇の奥の底まで突き刺すような強い光があった。

「うむ……、だがよくでき過ぎている」

突然、川田が口を開く。

「なにがですか」

「もしかしたら……」

「どうしたんですか。こんなに早く問題が解決することがですか。でもこうなることを予測していたひとがいたんですかね」

「さあ、もしこうなることを予測していたやつがいるなら、その奴が田村氏の死に至る経過を知っているにちがいない。……ところで送電線問題が解決して一番利するものは誰かね」

「反対派の譲歩を引きだしたことを考えれば、T電力じゃないんですか」

「T電力も譲歩しているが……」

「すると操業を控えているSアルミとN共火……」

「さあ、どうかな……、怪しいやつは……」

「え？ 誰ですか、それは……」

彼は意気込む。だがそれつきり川田は口を開こうとせず、そっぽを向い

てしまった。

13

「一度、N共火の建設現場を見ておくか。きみはまだ見たことがないだろうからな」

川田にはひとつの企みがあった。新人記者の和彦をダシに使ってN共火を訪れ、田村康平の自殺現場を見た下藤所長に何気なく探りを入れておきたかったのだ。

これまで新人実習用の教材ぐらいに思い、田村康平の死因追及を和彦に委ねていたものの、送電線問題の急転直下の解決を目の辺りにして、彼は田村康平の突然死問題が自ら真剣に取り組むべき課題に変わったような気がした。記者としての長年の経験から、送電線問題の急変の裏になにか重大なことが隠されているにちがいないと感じたのだ。

だが彼には確信があるわけではなかった。たとえ自殺にしても、田村康平の死は不自然過ぎるのだ。これが彼の直感だった。

タクシーは市街地を通り抜けると、広い幹線道路に入る。彼は車窓越しに見覚えのある風景に目を向ける。

N新港は自然の河口に発達したN本港から海岸づたいに三キロほど北上したところにあった。日本海に面して造成された埋め立て地の内側に掘割のような形で造られた人工港である。

海岸沿いの走る国道に入ると、視界が一気に開ける。荒涼とした埋め立て地の奥に、赤白の段々模様に塗られたN共火の煙突が一段と高く聳えて

いる。

「国道の海寄り側の一带にSアルミの一貫工場ができる予定だ。当初は国道側に冷延仕上げ工場、その奥に熱延工場、その斜め奥に電解工場、その前方の埠頭寄りに電極工場や鋳造工場が計画されていた。いま埠頭寄り工事中なのが電解工場だ。N共火の発電所電解工場の横に並んで建設されている」

和彦は頷きながら、タクシーの窓越しに、彼が指さす向こうに聳えるN共火の煙突のほうに目を向ける。赤白に塗られたほぼ完成した一八〇メートルの巨大な煙突が威圧するように迫る。太い二本の煙突が形鋼を組んだ鉄のやぐらに支えられて寄り添うような形で天空に伸び、排煙口が先端でひとつになっている。異様な形をした集合型煙突だ。

「デッカイ煙突ですね。あの上には昇れるのですか」

「メンテナンス用のリフトがあるはずだから昇れないこともないだろう」

「そうですね。眺めがいいだろうなあ。ところで、田村社長は自殺すれば解決すると読んでいたんですかね」

和彦の頭には急転直下の送電線問題があるらしい。

「ああ、そこを左に曲がって共火の事務所につけてくれんかな」

彼は和彦の問いかけを無視して、運転手に言う。

「サービスピルの玄関に着ければいいんですね」

赤ら顔の運転手は前を見たまま心える。

「所長に会えば、なにか感触を掴むことができるかもしれん」

彼は呟くように言う。

送電線問題が急転直下解決の道を歩みだしたことは、不審とまでいなくてもなにか気になることであつた。この情報を耳にすると、彼はすぐさ

また藤のアポイントを取り、和彦を連れて局を出たのだ。そんな彼に和彦はしきりに探るような視線を向けるが、彼は意識しながら気付かないふうを装いつづけていた。

発電所はまだ建設中なのに、二階建てのコンクリートの立派なサービスビルがすでにできていた。玄關のガラス扉の奥に広々としたホールが広がり、受付カウンターで女子職員が笑顔で迎える。

「うちの森野くんだ。そしてこちらは……」

彼は和彦を指差す。

「まえにお会いしました。お通夜の日に……」

「そうだっけ」

彼はすつとぼけた声を出す。

「えーと、木村由紀さんでしたよね」

和彦はにこりとして、軽く頭を下げた。

「じゃ、いいや、ところで所長は……」

由紀は二人を二階の応接室に案内した。テーブルには発電所関係のパンフレット類を詰め込んだ二組の大きな封筒が置かれている。

運ばれてきたお茶を呑んでいると、眉間に二本の深いしわを寄せた神経質そうな男がノックと同時にドアを開け、あたふたと入ってきた。二人に愛想笑いを浮かべた顔を向け、立ち上がった和彦に名刺を差し出し、席を勧める。

「田村社長の葬儀の日取りが決まりました」

下藤は腰を下ろすと、なかなか口を開かない川田に用件の切り出しを求めようと言った。こんどの日曜日の十時から田村家の菩提寺で行なうと言う。菩提寺は本社のあるS市にあった。

「そうですか。じゃ、お焼香を上げに出掛けますか」

彼はタバコに火をつけながら、ちらりと下藤の顔を窺い、つづける。

「……ところで、あんなに難渋していた送電線問題がバタバタと決まったそうですね。これで田村康平社長もほっとしていることでしょうか」

「いや……」

下藤は一瞬、なぜか狼狽えたような目をした。

「送電線問題の急転直下の解決が田村社長の死と全然関係がないとは思えませんかね。田村氏は送電線問題が解決しないのでかなり悩んでいたんじゃないんですか」

和彦が口を挿む。

「そりあ悩んでいました。予定している操業が遅れることになるのではないかと、そのことに非常に責任を感じていました。あの日も送電線問題に対する対策について県との会議を予定されていたくらいですから。でも急にあんなふうになるとは……」

和彦を冷たく一瞥して、下藤はまるで他人事のように言う。

「急に……。そうですか」

和彦に対する応えに、彼は軽い腹立ちを覚えた。ふと、この男は自分がN共火の責任者の一人であることを忘れていたのかもしれないと思った。難渋していた送電線問題が一挙に解決しそうになったことに対してむしろ困惑しているようにも見える。この男は田村社長の突然の死をどう感じているのか。

「田村社長は非常に悩んでいたというんですね。すると、悩みのすえの自殺だったと思っっているのですか」

和彦は下藤をじつと見つめ、幾分声を大きくして言う。

「それもあつたかもしれません。ただわたしには自殺なされたということ
が重くのしかかって、社長が死を選んだ理由がなんであるか深く詮索する
ことがなんとなく憚れて……、それに幾分うつ病気味なところもあつたよ
うですし……」

下藤は若い男の鋭い目にたじろぎ、男と並んで腰を下ろしている川田に
ちらつと盗むような視線を走らせてから、テーブルのうえに置いた若い男
の名刺に目を落とす。

「ところで、日頃、田村社長は難航する送電線問題に対してどんなふう
に考えておられたんですか」

下藤は俯いたまま、口を開こうとしない。

「あの問題の解決策について、田村社長は会議なんかでどんな発言をなさつ
ておられましたかね。あの日も県と対策を話し合う予定だったんでしょ」
彼は下藤が和彦の質問の意味を理解できていないと思い、繰り返すよう
に同じことを言う。

「いったい、あなた方はなにを知りたいのですか。発電所建設現場の見学
ということではなかったのですか」

下藤は神経質そうな目を三角にして、詰問調で言う。

「いや、ただ急に送電線問題がまとまり出してみると、田村氏がなぜ死を
選んだのか、やはり気になり出しましたね」

彼は下からじつと下藤を見上げる。

「……………」

「突然、社長が死を選ぶなんて、一体、どんな理由が考えられますか。や
はり、責任を感じてということになるのかな……」

和彦が横から口を挟む。

「さあ……」

下藤は迷っているように見えたが、急に顔を突き出してつづける。

「……あなた方は送電線問題の解決と社長の自殺の間に関係があると思っ
ているかもしれないが、牽強付会も甚だしい。反対派としても、また、T
電力にしても、社長を自殺に追いやったことに対して多少は気がとがめる
ところがあるかもしれない。それで双方が譲歩しようと考えたのかもしれ
ない。でもそれが全部ということではないでしょう。送電線はあくまでも
T電力が建設するもので、N共火がどうしろこうしろということではできな
い。社長の死で問題が解決したというなら、まるで生贄による問題解決と
いうことになる。とにかく社長は非常に疲れていただけです。なにしろ、
ここのところ送電線問題で過労気味でしたからな」

こう言うと、下藤は社長の死を悼んでいるのか、頭を下げ、しばらく俯
いていた。

「田村康平社長は本当に自殺したんでしょうか」

和彦がさらに突っ込む。下藤は一瞬ビックリと身体を震わせた。

「なんだって……、それは……自殺に決まっているでしょう」

一瞬、下藤は声を高めた。その声が震えている。

「どうして、そう断定できるのですか」

「それりや、決まっているじゃないか。遺体を調べた警察がそう言ってい
る」

「そうですかね。県がこの機に積極的に送電線問題の斡旋に動く意図で、
そのためにたとえ『自殺』に不審な点があつても当然これ以上詮索しない
ようにと県が県警に要請したとかという噂があるようだが……」

とぼけた声が割って入る。下藤はぎよつとして彼を見ている。和彦も初

耳だった。

「……警察が田村康平社長の自殺に疑念を持っているとすればなおのことはつきりさせておくべきですね」

彼はとぼけた声つづけた。そして彼は同意を促すように下藤をじつと見ている。

「現場はどんな状況だったのですか。確か、下藤さんが第一発見者だったんじゃないんですか」

和彦だ。彼に代わって追及をつづける。

「違う。第一発見者はホテルの従業員だ」

「ご一緒じゃなかったのですか」

「従業員が鍵を開けて部屋に入った」

「あなたは彼のあとにつづいて部屋に入ったんでしょ」

「……………」

「鍵が中から掛かっていたんですね。鍵はどこに……………」

「テーブルのうえに置いてあった」

「誰が一一〇番したのですか。救急車も来ていましたよね」

「さあ……………」

「あなたが部屋に入ってからそのことを詳しくお話いただけませんか」

「それは……………」

下藤は一瞬顔をゆがめ、目をそらした。しばらく無言で考えごとをしているふうに見えたが、意を決したように話し出した。

「……従業員のあとを追って部屋に入っていくと、ワイシャツ姿の社長がカーテンボックスのところをぶら下がっているのが目に飛び込んできた。

それを見てすっかり動転してしまい、それからなにをどうしたか順序は覚

えていないのですが、社長の身体を触ると温もりを感じたので……、従業員の手を借り、二人で社長をベッドに下ろし、横にして心臓マッサージを試みたのです。いつの間にか従業員が呼びに行つたのか、そうこうしているところにホテルのマネージャーが駆けつけてきた。ほどなくして警察の方や救急隊員がやってきたのです」

「それで、社長はどうでしたか」

「やはり、駄目でした」

「従業員がマネージャーを呼びにいたんですかね」

「多分そうでしょう。フロントが一一〇番したようですから」

「それからどうなさいましたか」

「現場の様子ですか」

「第一発見者であるあなたは警察からいろいろ訊かれたのじゃないんですか」

「第一発見者はホテルの従業員ですね。彼はいろいろ訊かれたらしいが、わたしはまえにお話した程度のことを訊かれただけで済みました」

「その従業員はいまどこにいるかご存知ですか」

「なんでもホテルを辞めたそうですね。わたしが知っているのはそれだけです。入ったばかりで自殺の現場に立ち会わされて嫌気がさしたんでしょね。よそへ行って別の仕事を探しているんじゃないですか」

「なにか遺書のようなものが残されていなかったのですか。やはり、社長のようなそれ相応な立場のひとつではやりかけている仕事に対する責任や関係者への配慮や義理といったものがあるでしょうし、それに遺族へ残したものもあるんじゃないですか」

「うむ……、とくにこれといったものは……………」

下藤は新米記者に喋らせたままで、自分のはんびりとタバコを吸っている彼を呆れたような目で見た。

「あなたに対して、なにか今後のことをよろしく頼むとかといったメッセージはなかったんですか」

「大体そんな気配は全然なかったんですよ。なにしろ、社長は来期以降も続投することが決まっていたしね」

「え？ 続投することが決まっていたんですか。それでも自殺することがありうるんですか」

和彦は大仰に驚いた風を装い、彼を振り返る。

「いや、完全に確定していたというわけではないですよ。わたしの耳にそんな情報が入っていたという程度のもので……」

下藤は慌てて訂正した。

「……もつとも、送電線問題がまだ未解決の状態でしたから、一寸、微妙なところも残されていましたが……。まあ、とにかく、反対派やT電力からの圧力、それにSアルミの操業も迫ってくるし、県や市からも遅れを指摘されていたし……。Sアルミは操業開始が遅れば撤退も辞さないなんていつてましたから、社長は四面楚歌の状況にあったことは確かです」

下藤は目を伏せたまま、ときにはしきりに言訳するように言い、あるときは他人事のように言う。下藤の態度がなんとなく不自然だった。

「で、T電力からの圧力って、どんな圧力なんですか」

和彦には分からない。

「社長は反対派の人たちとよく話をしていましたからね」

「T電力に代わって反対派を説得していたのではありませんか」

「さあ、どうですかね」

下藤は口を濁した。

「T電力にはたとえSアルミが撤退してもなんの痛手もないのじゃないですか」

「とんでもない。N共火への八〇〇億もの投資がムダになる」

「そうですかね。T電力はN共火の隣に火力発電所をつくるつもりじゃないんですか。Sアルミが撤退してN共火の発電所が不要になったら、そっくりそのまま引き受ければいいのでしょうか」

「代金の未払い分が半分近くあるからそう簡単じゃない……」

細い声で下藤が呟く。

「そんなことは……、とにかく、田村康平社長は送電線問題でなんにも悩んでなんかいなかったんじゃないんですか。もし圧力があるとすれば、Sアルミからでしょう。それもT電力の出身者である社長はT電力に対して送電線建設促進をもつと強く要請すべきであるとか、といったものでしょう。でも、Sアルミは本当に操業開始を望んでいたのですかね、あんなに計画規模を縮小してしまつて……」

和彦は強く言う。

「……………」

下藤が急に黙りこくつた。

「ところで、つぎの社長は決まつたんでしょう」

ようやく顔を上げた下藤に待ちかまえていたように、彼が代わる。

「正式には、二十日の株主総会後の取締役会で決まる」

一瞬むつとした表情でぶつきらぼうに言つたが、下藤は不自然な自分の態度に気付いたのか、急いで笑顔をつくろうとした。

「第一候補は下藤所長でしょう」

彼はおべんちゃらを言う。

「……………」

下藤は返事をせず、口をゆがめたまま縁無しメガネを外すと、熱心にレンズを拭きだした。今回も選に洩れたのかと思いつながら、彼は黙つたまま、下藤の執拗なまでに何度も繰り返される手の動きを見ていた。

しばらくして和彦がそわそわし出す。彼は見学にきたことを思い出し、発電所建設工事の進捗状況や操業予定など、二、三の当たり障りのない質問をはじめた。

下藤はようやくメガネ拭きをやめ、担当者を呼んだ。

14

短く刈つた黒い頭髪を六四に分けた実直そうな広報担当次長は壁にかけてある発電所敷地全景のパネルのままで、「当社（N共火）は、SアルミがN新港進出に当り、T電力とSアルミが共同出資して、良質の電気を安定確保するために設立されたもので……」とパンフレットに書いていることを繰り返す。

和彦の目はパネルに向けられているものの、説明の内容が理解できなかつた。大体「良質な」電気とはどんな電気なんだ、それを「安定確保」するとは、これをどうすることなんだ。自分さえ分かればいいのか、全く、独りよがりもいいとこだ。「良質な」電気とは質のいい電気エネルギーのどこか、では電気エネルギーの質とはなにか。電気エネルギーには良い質と悪い質があるのか、単に規格に合う電気エネルギーを指して質が良いと

言っているのか、それがどうして良質といえるのか、こんな表現がまかり通っていること自体、彼には理解できないことだった。

「安定確保」も全く同様だった。自分たちに分かるようないい加減な言葉遣いをしていることにさえ全然気付かない組織や企業には地元住民のこころや痛みが分かるはずがない。というより、地元住民のこころを最初から分かつとうとさえしないにちがいない。

彼には発電所建設工事の着工が難航し、送電線用地買収交渉が難航したことの原因が分かるような気がした。ことばが通じない両者間にはコミュニケーションさえ成り立たないのだ。地元住民とT電力（N共火）・Sアルミ間にはコミュニケーションの場すらはじめからなかったのではないのか。

二人は見学者用に用意されているヘルメットを被り、作業用のジャンパーに真新しい軍手を着け、ゴム長靴に履き替えると、下藤と担当次長に促されて、事務所の玄関前で発電所の車に乗って建設現場に向かった。

ほぼ組み上がった十階建てのビルより高い一号機の発電機建屋の屋上に上る。目の前に一八〇メートルの煙突が遙か高く、聳えている。

「発電所敷地面積は……」

彼はそばにいる担当次長に尋ねる。

「約三〇万平米ありますよ」

「そんなにあるのですか……」

だが屋上の彼にはそんなに広いようには見えない。敷地のほぼ中央に聳える赤白に塗られた巨大な集合式煙突のせいかな、かなり小さく見れる。縦横に道路が切られた敷地のなかでは、クレーンなどの建設機器や鉄骨などの資材が一面に散在し、作業員や車が動き回り、方々で溶接の火花が散つ

ている。

煙突の向こうに、周囲に高い堤防が張り巡らされている空き地が広がっている。工業用に造成されたものだ。その前方に日本海が広がり、激しく波頭が砕け、海面が白く光っていた。右手の奥にはまだ山頂に白雪を残した山並みが連なり、その左手向こうに松林が連なるなだらかな砂丘が延びている。

「広いですね。どのぐらいの広さですか」

「全体で一〇〇〇ヘクタールほどあるようですが……」

「海岸べりには松林があつたんですか」

「ええ、堤防の辺りには防風や飛砂防止の保安林がありました、それに代えてコンクリートの堤防にしたのです」

「相当数の松の木を伐採したのですか」

「四〇万本とか。石油をかけて焼いたとか」

「え？ それを残すことができなかったのですか」

「……………」

「このなかには人家や農地などはなかったのですか」

「ありました。二〇〇戸ほどの人家があつたようですが、移転してもらつたそうです。送電線の計画予定地にまだ残っているものもあります」

「こんど引く送電線ですね。それはどのへんですか」

「ここから東の方向に延びる予定です」

「連結する送電線は近くにまでできているのですか」

「もうできています」

「二七万五〇〇〇ボルトですか」

「そのようです」

担当次長は相変らず気のない返事を繰り返す。

「こんど引く予定のは……」

「一五万四〇〇〇ということになったようです」

「すると、途中から鉄塔の大きさが違うようになるのですか」

「さあ、そのへんのところはどうなりますか。なにしろ、送電線の工事は」

「電力の仕事ですから、当方には詳しいことは分かりません」

担当次長はその問題に触れたくないというように一文字に口を閉ざし、遠くに目をやった。

彼はなぜ送電線問題が解決を目指して急激に動き出したのか、腑に落ちなかった。やはり、田村社長の自殺が関係者に衝撃を与えたにちがいない。それにしても、なぜ田村社長の死が衝撃となつたのか、そこになにか別の理由があるのだろうか。

川田に訊ねてみたかった。県が県警に要請したというのは本当だろうか。

だが川田はそんなことは忘れて、ただ下藤に案内されるままに発電所の建設現場を動き回っているふうに見えた。

ふたたび、車に乗って、工事現場を一巡してからサービスビルに戻った。

途中、担当次長の説明は途絶えがちであつたが、誰も口を開かなかつた。

下藤所長も前方を向いたまま始終無言だった。

15

下藤は所長室に戻ると、窓のブラインドのすき間から松の砂防林の向こうを走る国道七号線に目をやった。川田とのつぼの若い男を乗せた車がN

共火のゲートを出て、Sアルミの敷地の横を通り抜け、国道を南下してN市街へと向かうはずだ。彼はブラインドのすき間に目を寄せたまま、まるで銃を構えた狙撃兵がじつと敵を待つような目をして、ひたすら二人を乗せた車を待った。

見覚えある黒い車が視野のなかに入って通り過ぎた。彼はじつと目を凝らして車を追ったが、玩具のような小さな車は松林に邪魔されてすぐ視野から消えた。

下藤はそのまま、しばらく窓辺に佇んでいた。やがて意を決するように、執務机に近づき、直通電話の受話器を取り上げた。受話器を手にしたまま、彼はプッシュボタンを押そうか、迷った。

机のうえの名刺に目があった。

「森野和彦……」

低い声が彼の口から漏れた。焦点を強く結んだ森野和彦の鋭く尖った目がそこらの底まで突き刺さる。

彼はあの男の目をどこかで見たような気がしてならなかった。

突然、お通夜の翌日にアポイントメントも無しにやって来た記者を追い返したことを思い出した。あの日、彼は出掛けようとして一階の降りていったとき、受付のカウンターまえに突っ立っている細身の若い男と目が合った。その男が森和彦だった。

そのとき、彼は話し掛けながら近寄ってきた男を無視して、車に乗り込んだ。

彼はまた再びなぜ逃げるようにして質問をはぐらかしてしまったのか、なぜ堂々と受け応えしなかったのか、と悔いた。こんな態度を続けていれば、彼らに疑われても仕方がない。彼はもつと毅然としていなければと自

分に言い聞かせる。

しかし、胸の奥で不安がじわじわと湧いてくる。彼は矢もたまらず、プッシュボタンを押した。受話器の奥で呼び出し音が続く。

下藤はベルが十回を超したところで、諦めて受話器を置いた。

16

「おい、田村氏の葬儀に行つて、取材してくるといい」

「川田さんはいらつしやらないのですか」

「オレは留守するわけにいかない。それに一寸、調べておきたいことがある。葬儀の詳しいことは、一度、あの子に尋ねておくといい」

こんなやりとりがあつて、和彦はT電力やN共火の本社があるS市に出張することになった。彼には願ってもないことだった。関係者に会つて、取材するいい機会だと思つた。

田村社長のN共火での二年間を追つてみても、これといった自殺の理由が見当たらなかつた。かといつて過労やうつ病を覆す新たな理由が考えつかなかつた。下藤からも新しいことを聞き出せなかつたのだ。

田村社長の死を契機に、難航していた送電線問題が一気に解決へと進み出したことは、彼に新たな検討課題を提供することになった。問題が一層複雑になった。

送電線問題が解決へと進み出したことは、田村社長の死と無関係な単なる偶然か。単に自殺という死に方が関係者にインパクトを与え、結果的に解決を促すことになっただけなのか。

それとも、田村社長はこじれた問題の解決のために、意識的に生命を賭ける大博打を打ったのか。だが、社長の任にある人が問題の早期解決を意図して意識的に死を選ぶふというような行動を取る必要があるだろうか。

もし意図したとすれば、なぜ自分の生命まで賭けなければならなかったのか。またそのことを裏付けるものがなにか残されているのだろうか。

たとえ警察の見解だとしても、自殺の理由が過労やうつ病であるということは彼には容易に納得できるものではなかった。彼はスクラップブックで田村社長の最近の二年間を追ったものの、自殺に追いやる気配すら感じることができなかった。田村社長は親会社のT電力に対してもあまり気を使わず、それに深く悩むこともなく、何事も自分流に事を処理しているようにすら思えた。

しかしそのように思えたのは、人生の上っ面にしか目が届かないからなのだろうか。それでも自殺の線を手放さず切れないのは、頭のどこかに、あの朝のタクシー運転手が何気なく「殺されたんじゃないの」と言った声が残っていたせいだろうか。

彼はもう一度考え直す。

田村社長が送電線問題の早期解決を意図して死を賭けたとなると、話は別だ。彼はこんどの取材はその裏付けを取ることに重点を置いてみようと思つた。だがそれにしても手持ちの材料が少なすぎる。なぜそう意図したと思うのかと逆襲された場合、彼には根拠として示しうる材料を持ち合わせていなかった。いや、なぜそう考えるかということさえ整理できていなかった。ただ彼にはもし田村社長が自殺したのなら、積極的な理由や意図があるにちがいない。遺書がないのも不自然なことだ。とにかくあの時期に過労やうつ病で自殺するはずがないという確信に似た思いがあるだけだつ

た。

「おい、それにしても、よくでき過ぎている」

背後で川田の大きな声がした。

「なにがですか」

と言いながら、彼は立ち上がって、同じようなことを何度も繰り返している川田に近づく。

「おい、突っ立てないで腰を曲げて顔を寄せろ。いいか、連中は実に巧妙に田村氏の自殺を利用している。そう思わないか」

「連中？」

そのとき彼はふと、間近に見る川田の目に田村康平の自殺に対する疑念が浮いているように感じた。

「反対派までが、なぜ、田村氏の自殺によって急に矛先を鈍らせることになったのか。彼らはむしろ被害者だろう。それなのに、なにかを恐れるように、さつきと同意書に判を押した。なぜだ」

「田村社長は反対派に憎まれ、マークされていた人物だったんですか。スクラップを見たかぎりではそんな気配は全然感じられなかったんですがね」

「かつてはかなり強引に仕事をこなしていたらしい。だが、奥さんを亡くしてから穏やかになったという評判だ。発電所の工事着工のときにも、実力行使を訴える下藤常務らを抑え、最後まで話し合いで解決する道を選んだぐらいだからな。もつとも、そのとき彼の頭のなかにはこれからどう転ぶか分からない送電線問題のことがあつて、実力行使を避けたいという思いがあつたことだろうか……」

「でも反対派が田村氏を亡き者にしようとしたとは考えられますか。早々に判を付いたのは、最後まで反対していたひとが田村氏を死に追いやった

「と思い、何らかの後ろめたさを感じたからではないんですか……」

川田は彼をじっと見ている。その目にはなぜか逡巡の色が感じられた。

彼はまた言うべきでないことを言ってしまったような気がした。

だが彼はそんなことより、いま自分が言ったことが気になった。彼はむしろ田村氏が誰かに殺されたような気がしていたのに、なぜ逆にそれを否定するようなことを言ってしまったのだろうか。

実際、田村氏にはN共火の社長として送電線問題に対して直接の利害関係があったとしても、この問題の直接の交渉当事者ではない。もし川田が疑っているように他殺であるとすれば、田村氏を殺した犯人は一体なにを期待して犯行に及んだというのか。まさか送電線問題の早期解決を期待していたわけでもあるまい。そんな不確実なことを期待してひとを殺すことが考えられるだろうか。

といつても現実に難航していた送電線問題が急転直下し、解決をめざして進み出しているではないか。田村氏の死後、目を置かないで、反対派はT電力へに用地売買に同意し、これに応え、県や市は早速斡旋案を用意した。それにT電力は素早く反応した。

そこにはひとつのシナリオがあったように思える。そのシナリオに従い、それぞれがそれぞれの役割を演じているに過ぎないのだ。ではシナリオを書いたのは誰だ。

「ところで、県の県警への要請というのは本当ですか。そんなことがありうることなんですか」

「あれか。カマをかけてみただけだ」

「それで……どうでしたか」

「見てのとおりだ。おい、もう一度徹底的に洗ってみるか」

川田は短く言った。

17

「やあ、あなたもこんどの列車だったんですか」

和彦は駅の改札口で木村由紀の後ろ姿を見かけると、近づいて声をかけた。

「あ、森野さん」

由紀は一瞬目を大きくして彼を見て、それから急に顔を赤らめた。五十前後の肩幅の広い頑丈な体つきの男が近づいてくる。じろじろとうさん臭そうに彼を見ながら、男は彼女に切符を手渡した。

「父です」と言うと、彼女は「M新聞の森野さん、川田さんとの……」と小声で男に言った。

男は黙ったまま、まだうさん臭そうな目を変えない。

「森野和彦です。木村春治さんですね。川田から聞いています」

彼は笑顔を返した。それには応えず、春治はじろりと彼を一瞥して、娘の背を突くと、改札口に向かった。

彼は急いで切符を求め、後を追ってホームへの階段を上っていく。

S市は太平洋岸にあった。日本海に面したN市からS市へ出るには日本列島を横断して太平洋側に出る鉄道を利用するほかなかった。N駅始発列車で背骨のように日本列島を縦断する山脈を横切るルートで太平洋側に出て、そこで乗り換え、S駅に向かう。

ホームには発車を待つ列車が入っていた。すでに乗り込んだのか、ホー

ムには木村父娘の姿はなかった。彼は車両のなかを覗きながら、ホームを進んでいく。

由紀はボックス型座席に春治と向かい合わせで窓際に座っていた。

「田村社長のことで、ちょっと、お話を伺いしたいのですが……」

彼は腰を屈め、春治に向かって話しかけた。娘から彼のことを聞いたのか、春治は前より幾分和んだ顔つきだったが、目にはまだ険しい光が若干残っている。

一瞬、迷ったが、彼は「邪魔します」と言いつて、由紀の隣の席に腰を下ろそうとした。その瞬間、春治は素早く目で娘に合図して、由紀を自分の隣の席に移動させた。

「どうも、すみません」と言いながら、彼は春治の大きな体な前で小さくなる。

春治は一瞬迷惑そうな目をしたが、目はじろじろと若者を観察し始めている。

「実は、田村社長がなぜ死を選んだのか、本当のところを知りたくて調べているのですが……、なにかご存知でしたら教えていただけませんか」

彼は春治が話し出すのを待った。だが春治は顔を背け、動き出した列車の窓から移りゆく景色を眺めているだけで、いくら待っても話し出そうとしない。由紀は気が気でない面持ちで、春治と和彦に交互に目を移す。

「わたしには田村社長が自殺するとは思えない。もしかしたら……」

春治が顔の向きを変えた。

「……そんなことを詮索してどうなる？ 新聞に書き立てるつもりか」

「死んでしまった人は生き返ってこない。一体、なにを考えているんだ」

「事実を知りたいだけです」

「事実？ 事実つて、いったい何だ」

「事実とは、……本当に起こったこと」

「さあ、分かりません。でも、田村社長が亡くなったら、これまで難航していた送電線問題が急に解決しだすなんて、変じゃありませんか」

「それは送電線問題が田村社長をそこまで悩ませていたことを初めて知って、みんながもう一度考え直した結果だろう。自分たちの反対が田村社長の死を招いたことに対する後ろめたさといったら言い過ぎかもしれないが……、とにかく、日本人には死者をいたわるような気持ちがある」

「すると、田村社長の死は自殺だと、みんなは受け取っているということになるんですかね」

彼は呟くように言う。

「……」

春治は応えず、黙って窓の外に目をやった。そしてそのまま、しばらくじっとして動かなかった。

列車は大きな川に沿って走っている。やがて鉄橋を渡り、川から離れて山間部を縫い、トンネルをいくつも潜って日本列島を横断して太平洋岸を目指す。

彼は腑に落ちなかった。送電線問題の急転直下の解決といい、誰もが田村社長の死を自殺と受け取っているらしいことといい、どうしても納得することができないのだ。

皆が田村社長の死を自殺だと決めつけて責任逃れしているように見えて仕方がなかった。もし田村社長が誰かに殺されたとしたらどうするのだ。皆の責任逃れのように見えて、実は皆で殺人犯を庇立てしているのかもしれない。

「もし田村社長が誰かに殺されたのならどうですか。それでも反対していただんたちは用地買収に応じ、判を付きますか」

「……殺された？ 田村社長が……、誰が殺したというか」

春治はじつと睨むような目をした。だが目の奥にはなにやら逡巡に似た迷いの色があった。

「もし、田村社長の死が自殺ではなくて、誰かに殺されたとすれば、送電線問題はどのようになったでしょうか。やはり、同様に、急転直下、解決への道を辿ることになりますか。どう考えますか」

彼は送電線問題で反対派地元住民とT電力の担当者との激しいやり取りを交わす交渉の場にいる田村社長を思い浮かべながら、追い打ちを掛けるように、急ぎ込んで言う。

「誰かって、誰だ」

「それは分かりませんが……」

「……………」

春治はじつと考え込んで、口を開こうとしない。

「ちよつと、変なことが……」

いままで熱心に二人の話を聞いていた由紀が春治のほうに顔を向け、突然、口を挟む。

春治は「なんだ」という顔つきで、彼女を一瞥した。彼女は一瞬ひるんだように体をすくめる。

「変なの」

由紀は二人の顔を交互に見比べていたが、やがて彼のほうに顔を向ける。

「あの前日、土曜日だったわ。本社のほうからホテル予約の依頼があったんですが、その日に限って、下藤所長から、社長が何時ごろにチェックインするか確かめておくように言われたの」

「どこが変か」

春治がむすつとして言う。

「だって、チェックインするのが日曜の夜だったのよ。所長には社長に特別の用事でもあったのかしら」

彼は黙って頷く。下藤所長はそのとき、日曜の夜にホテルに入った社長に電話するか、それとも部屋を訪ねるか、どちらかするつもりだったのだろうか。だがもし電話で済む用事であれば、土曜の午前中に、自分で直接本社にいる社長に電話することができたはずだ。とすると、日曜の夜、社長がチェックインしたところを見計らって泊まっている部屋を訪ねるつもりだったのではあるまいか。

警察の発表では下藤所長がホテルを訪ねたかどうかについてはなにもふれていない。ホテルの従業員に聞いたときにも訪問者があったとは言わなかった。とすると、下藤所長は結局ホテルに社長を訪ねることを止めたのかもしれない。

「なにかそのことで所長から言われたことありませんか」

「とくにありません。ただ……」

「ただ、なんですか」

「由紀、憶測でものを言っはいけない」

春治が嗜める。彼女は口を閉ざしてしまった。

列車は山間に入った。三人はなにかを待っているかのようには、無言で身動きせず座っていた。いくつものトンネルをくぐり抜け、三人を乗せた列車は日本列島を横断していく。トンネルを通り抜けるたびに、暗い窓ガラスに三人の顔が浮かんで消える。

「田村社長はどんな人だったんですか」

彼は窓ガラスに写る二人に向かって、呟くように言う。由紀の目がちらりと窓ガラスの彼を盗み見するように動いた。彼はすかさず、微笑みかける。

「由紀さんが勤めてからどのくらいになりますか」

彼は話のきっかけを必死に探す。

「田村社長は決してウソをつかなかった。気の進まない由紀に共火に就職するように勧める気になったのも、あの社長なら間違いがないと思ったからだ」

由紀に代わって、春治が堅く結んでいた口を開く。

「ウソを言わなかったんですか」

反対派だった男が娘を反対闘争の相手であるN共火にどんな気持ちで勤めさせたのか、なぜ、田村社長がウソを付かなかったと言いつけるのか、彼には気になることだった。それに葬儀にわざわざS市まで出掛けるのはなぜか。

「着工のとき、実力行使をしないという約束を守ったし、それに、T電力の反対を押し切ってS分を○・三パーセントまでに下げた」

「実力行使しなかったのは送電線のことを考えてのことではありませんか。S分を○・三パーセントまでに下げたといつても、まだ電力の全国目標レベルに達していないではないですか」

「そうかもしれない。だが子会社の社長が親会社の方針に抗して行動することは勇気のいることだ。それを敢えてするところが気に入った。だから、今日も焼香をあげにいく気になったのだ」

春治はばつの悪そうな顔をトンネルから出て急に明るくなった窓に向けた。

18

Nホテルのフロントは一階の奥まったところにある。川田はエントランスの回転ドアを押してホールに入ると、真直ぐカウンターに向かった。係員の姿はなかった。

カウンターの呼び鈴を叩くと、奥から顔見知りのフロント係が笑顔を向けた。

「マネジャーは……」

声を聞きつけたのか、白髪が混じりはじめている中背の男が奥から顔のぞかせた。

「あ、川田さん、そつちに行きます」

彼はエトランスホールの左側にあるフロントから近いロビーに移り、椅子で待った。

「金村さん、どうですか、景気は」

急ぎ足で近づいてきたマネジャーに声をかけた。

「川田さんが来てくれないから景気は悪いですよ。それにあんなことがあつて……、いいはずがありません」

「電話で言ってたこと本当？」

「なんのことです？」

「開かずの間のことさ」

「そうなんですよ。早いとこ、改装してしまいたいのですがね」

「どうして改装をはじめないのかね」

「いま本社と相談しているんですがね」

「で、一寸、見せてもらえるかな」

「いいですよ」

金村は鍵を取つてくると、彼をエレベーターに誘う。

エレベーターはエントランスの回転ドアから直線距離で一〇数メートルの右手の壁際にある。エントランスホールを横切つて反対の奥にもレストランや喫茶室とバアがあるが、評判のいいフランス料理のレストランが二階と三階を占めている。四階から六階までが結婚式の披露宴などを行なう大小の宴会場となつており、そのうえが宿泊用の客室となつている。

「ここですよ」

現場となつたデラックススイートルームは最上階一二階の奥まつたところにあつた。

ドアから覗くと、奥の壁を頭に二つのベッドが並んでおり、ドアに近いスペースに丸テーブルと布張りの安楽椅子二脚のセットが置いてある。その横の壁際に整理タンスとガラス張りの机をセットしたサイドボードが据え付けられ、そのうえにテレビや傘の大きい陶器の電気スタンドがあつた。

「あのときのままですかね」

二つのベッドともカバーが掛かつており、殆ど使用した形跡がない。多少使用した形跡が見られるのは応接セットで、椅子がテーブルから離れて

不揃いの位置にあつた。

「あの当時のままのはずですよ。テーブルにウイスキーの大瓶とコップがあつたのですが、鑑識係が持つていったようです。上着と外套が左のベッドの上に脱ぎ捨てられていましたね。大きめの黒い鞆が一つ、大きく口を開けたままサイドボードの上に置いてあつたように思います」

「それだけですか」

「腕時計のほかには、財布や小銭入れなどの小物類がサイドテーブルの上にあつたようです。上着を脱ぐときポケットから出したのでしよう、多分」

「ところで、最初にこの部屋の鍵を開けた従業員はどうなりましたか。まだここにいますか」

「すぐ辞めてしまいました」

「いま、どこにいるのか分かりますか」

「それが分からないのですよ。このまえ刑事が訊ねてきましたが、実家のほうにも連絡すらないとか……」

「刑事が……」

彼は素頓狂な声を出して金村をじつと見る。

「ええ……」

「刑事がねえ……」

とするとまだ警察は田村康平の死を自殺だと決めかねているのだろうか、それともなにか新しい事実を見つけたのだろうか。

「今頃また刑事が来るなんて、営業妨害ですよ。早く決着つけて欲しいですよ。この部屋も早く改装してしまいたいのですが、なにがあるのか、本社の方にもなにか連絡があるのか、決済も遅れているんですよ」

「で、どこに……」

「ここからは見難いですが……、そのカーテンボックスの梁の中央辺で
すか、そこらしいですよ。わたしは延びきった針金のハンガーがぶら下がっ
ているのを見ただけですわね……」

「で、田村康平氏は？」

「すでにベッドに横たわっていました。まだ心臓が動いていると思つたら
しく、共火の所長が従業員を手伝わせて、二人がかりで下ろしたと言つて
いましたが……」

「誰が言っていたのですか」

彼は下藤のことを思い浮かべていた。

「共火の所長ですよ。うちの従業員がそばで領いていたから確かでしょう」

「どうして下藤所長が現場に居合わせたのですかね。そのとき所長はなに
か言っていないかったですか」

「迎えに来たんだそうですよ。本人が何度も説明していました」

「そうですか。でも一寸変ですね。日曜の早朝でしょう。ところで、あの
夜、訪問客や怪しい人影を見た人はいなかったのですかね」

「さあ、誰も気付かなかつたらしいですよ」

「フロントには……」

「夜遅くになると、奥にいることが多いですね」

「カウンターのなかには誰もいない……、すると、日曜の朝、下藤氏が迎
えにいたときも誰もいなかったのですかね」

金村は口ごもっていたが、彼は軽く挨拶を交わすと、さつさと現場を離
れ、一人でエレベーターに乗って、一階に下りた。そして正面のエントラ
ンスから外に出る。ホテルのフロント係は彼に気付かずに帳簿に目を落と
したままだった。

彼はその足で警察署に向つた。

「いま、Nホテルに寄つてきたところですね」

彼はいつものように、ぶらりと署長室に入つていくと、何気ないふうを
装い、挨拶代わりに軽く言つた。一瞬、短い首に丸まるに太つて丸い顔に
なつた署長の目が光る。

署長とはとくに長い付き合いがあつたわけではなかつたが、気心の知れ
た仲であつた。何度も行き違いがあつて喧嘩別れしたこともあつたが、そ
の都度いつの間にか元の鞘に収まるのだった。サツとブイヤの關係にはど
こか馴れ合いがあつて、これが彼と太つちよ署長との暗黙の了解事項となつ
ていたのかもしれない。田村康平が自殺したときにも、取材の電話に署長
がよく応じた。

「今更、披露宴でもあるまいが……」

「うん、デラックススイートルームを予約しようかと思つてね」

「へえ、物好きもいるもんだね」

「ところで、なにかまだあるのかね、あの件には……」

「さあ……、なにを嗅ぎつけたんだ」

「あのとき、どんな状況判断で自殺と断定したのかね」

「内から施錠された室内で、首を吊つていたということかな。これに対し
て、鑑識ほうにも異論がなかつた」

「遺書の類は？」

「ない。テーブルの上には鍵があつたが、遺書はなかつた」

「じゃ、また刑事が動き回りだしたのは……、共火の送電線問題が片づく
のを待つていたわけか、それとも、なにか新しい情報でもあつてのことか
ね」

「なんの話だ」

「刑事があのかのときのホテル従業員を探しているそうだね。第一発見者としての調書は取ってあるんだろう。それなのに、今頃になってなぜ探す。なにを疑っているのかね。あれは自殺ということでは処理済みじゃなかったのかね」

「偶然だな。別に……」

「偶然とは思えないな。前々から意図していたことか。それとも……、そうか、従業員は目撃者でもあるわけだな」

「ブンヤの嗅覚は鋭いね。それにしても一寸間延びしてないか。いままでなにをしていたのかね」

「まだ二週間も経っていないぞ。いいよ、こちらでも例の元従業員を探してみることにするか」

「元従業員？ 元とはなんだ、それは……」

「なんでもない。じゃ」

彼は署長に笑顔を向け、入ってきたと同じように、ぶらりと署長室を出ていく。そしてふと思いついたように、ドアのところで立ち止まると、彼は「死亡推定時間は四時から六時というのは間違いないですな」と振り向きざまに、署長に尋ねる。

署長が反射的に頷くのを見て、彼は静かにドアを閉めた。

19

和彦は本社の職員に混じって受付の後片づけをする由紀を待つて、お茶

に誘う。

「実は、社長のお嬢様に呼ばれているの」

「田村康平氏の……」

「ええ、どんな用事かしら」

「一緒に連れていってくれないかな。ちょっと確かめておきたいことがあるんだが……」

田村邸はS市の中心から離れた西端の閑静な住宅街にあった。

奥まったところにあるせいか、屋敷全体が静まり返っていた。門が開いている。彼は由紀のあとに付いて門からなかに入っていく。玄関のテラスに上がると、由紀は離れてテラスの上がり口に佇んでいる彼を一度振り返ってから、インターホンを押した。

返事がないまま、しばらくしてドアは小さく開いて、喪服を着た小柄で華奢な身体の女が青白い顔をのぞかせた。田村康平の娘美紗か。

「木村由紀さんですね。わざわざいらしていただいて……」

見知らぬ若い男を連れていくことに気付き、由紀に向けた弱々しい笑顔が崩れた。

「すみません。こちらはM新聞の森野さんです」

由紀が彼を振り返って告げる。

「森野和彦といいます。突然お邪魔して申し訳ありません。田村康平社長の件で、一寸お尋ねしたいことがあります。木村由紀さんがお伺いするというので、無理やり同行させてもらいました」

彼はテラスの下から、会釈しながら言った。

美紗の目に迷いが走った。

「わたしはここで待たせて頂きますから、由紀さん、どうぞ」

若い男が木村由紀と親しい関係にあるらしいことを感知したのか、美紗の目から迷いが消えていった。

「折角、いらしていただいたのに、こんなところに立たせたままでごめんなさいね。なかにお入りくださいませんか。よろしかったら、森野さんもどうぞ」

美紗はドアを押して大きく開けた。由紀のあとに付いて彼も玄関のなかに入っていく。

玄関ホール横の応接間は十二、三畳ほどの広さで、中央にこじんまりとした白木の応接セットが置いてあった。奥のコーナーが出窓ふうに突き出ている、その二面には一枚ものの大きなガラスが交叉する二面に嵌め込まれている。そのせいか室内は明るく、まるでサンルームのような趣があった。観葉植物の小鉢が並べてある。そのコーナーにはおり、

彼は由紀がソファに座るのを待って、端に腰を下ろす。

明るすぎるせいか、なんとなく落ち着かなかった。彼は意表をつかれた思いだった。サンルームのような応接間を造った田村康平に自殺するような匂いを全然感じ取ることができなかったのだ。

ポットから紅茶を注ぐ美紗の動作がもどかしかった。彼は我慢して、白磁のカップが二人の前に並べられるのをじっと待った。

「あのう……、不躰ですか、田村康平社長が本当に自殺なされたとお思いですか」

彼の口が滑った。美紗はじつと彼を見た。それから由紀に目を移す。

「木村さん、由紀さんといわれましたね。こんな手帳を見かけませんかでしたか、父の部屋かどこかで……」

美紗は黒表紙の小さなメモ帳風の手帳を取り出した。

「はあ、それは……、特別のものでしょうか」

由紀は要領を得ないらしく、しどろもどろに応える。

美紗は幾分頭を傾げ、しばらく考え込んでいるふうだった。写真で見る田村康平とはにても似つかない面長の顔が細く長い首の先で一瞬大きく揺れた。

「あるメーカーが年末年始の挨拶に毎年送ってくるありきたりの手帳ですが、父はこれを日記帳に利用していたのです……」

美紗が低い声で話したところによると、田村康平の日記がいつころはじまったのか分からないが、病床の妻に手帳を見ながら、一日の出来事を話しているのを見かけたことがあるという。書齋の本棚の片隅に残されていた十数冊もの手帳の数からすると、そのとき以来康平は毎日日記をつけていたらしい。

「……ところが、最近の分が見当たらないのです。書齋をいくら探しても見つかりません。それでお願いしたいのです。探して戴けませんか」

美紗は哀願するように由紀に顔を傾けた。

「そうですか。日記を書いておられたのですか」

彼は思わず口を挟んだ。

「……………」

美紗は口を噤んだまま、悲しそうな目をした。

「すみません。率直に申します。もし、お父上の死に疑念を抱いていらつしやるなら、是非協力していただけませんか。ぼくにはどうしても納得できないのです。これまで調べた範囲では、田村康平社長には自ら死を選ぶような理由が見当たらないのです」

美紗は目を伏せ、身動きもせずじつと一点を見つめている。彼は息を

殺して、彼女が話し出すのを待った。彼は次第に息苦しくなつて、大きく息を吐いた。と同時に、自分がとんでもない感違いをしているんじゃないかと思つた。

美紗にしてみれば、一人静かに父の日記からそのときの心情を推し量りたかつたのかもしれない。それなのに、彼は彼女のころのなかに土足で入り込むようなことを仕出かしてしまつていたのだ。恥ずかしかつた。彼は激しく自分を責めた。まだ新米の癖に、古顔の記者のように厚顔無恥に振舞い、ひとのころを踏みにじつてまで取材しようとする魂胆が許せなかつた。

「撤回します。ご遺族の心情もかえりみずに勝手なことを申しました。本当に申し訳ございません」

彼はテーブルに両手をついて、深々と頭を下げた。性急に事を運ぼうとしたせつちちな自分を恥じた。

「……一寸、お待ちいただけますか、すぐ戻ります」

顔を上げた彼に軽く会釈して、美紗がドアから出ていった。

「一体、どうしたの」

ドアが閉まるのを待つて、由紀が呆れた顔で叱責の声を発した。

「ごめん。ところで、あの日記帳のことだけど、見たことある？」

「有るような無いような……、とにかく探してみるわ。でも社長がいつも持つて歩いていたのじゃないかしら。とすると、あの日もホテルに持つていったはずよ、きつと。そういえば、あの日、ホテルに残された社長の持ち物はどこにいったのかしら」

「そうだね……」

彼は大きく頷く。確かに由紀の言う通りだ、日記帳を探しだせばすべ

てが歴然とするにちがいない、と彼は思つた。

軽いノックがして、美紗が戻つてきた。三十代半ばの痩せぎすの細身の男が彼女に従うような格好で入つてきた。

美紗は「夫です」といつて、二人に紹介した。男は「三木陽一です。この度はなにかとお世話になりました」と言つて、丁寧に頭を下げた。

陽一はそのまましばらく佇んでいた。美紗に促されると、色白の面長の顔にはかむような笑いを浮かべ、妻の隣の椅子に腰を下ろした。

彼は美紗がなぜ夫を同席させる気になつたのか、あれこれ考えたものこれといった考えが思いつかなかつた。彼は考えあぐね、陽一の横顔をぼんやりと見ていた。いきさか気が弱そうに見えるが優しさのなかに強じんさを秘めて強い光を放つ目をしている。

「実は、この人も父の死に疑いを持つて居るのです」

陽一の頬が一瞬引きつった。

「え？ どんなふう……、疑つておられるのですか。自殺なされたのでは

はないといわれるのですね」

彼はわれに返つて間髪を入れずに言う。

「別に確固たる証拠があるわけではありませんが、わたしには義父に自殺する理由があつたとは思えないのです。遺書はなかつたし……」

「そうですか。でも……」

「義父は必ず遺書を書くタイプの人です。ですから、わたしたちは遺書がどこかに残されているはずだと散々探したのですが……」

陽一は低い声で、ぼそぼそとつづける。

「……そして日記帳がないのに気付いたのです。もし義父が自ら死を選んだのであれば、遺書に近いことが日記帳に書かれているにちがひありませ

ん。少なくともそのことを暗示するなにかが……」

陽一は同意を求めるように美紗に目を向ける。

「父はいつも小さな黒い手帳を手元に置いておりました。実は、父は亡くなった母との会話のつもりで、毎日欠かさず、暇を見てはその日の出来事を書いていたらしいのです。あの日も日記をつけていたはずですよ。由紀さんも父の黒い手帳をご覧なつたことがあるでしょう？」

「は、はい」

「遺品として返ってきたもののなかにはその黒い手帳が見当たらなかったのです。家中を探してみましたが、やはりありませんでした」

「日記をつけていた黒い手帳が見つければ、きつとはつきりすると思うのですが……、わたしには義父が自殺したとは信じられません」

「ふーっとそんな気になることってありませんかね。社長として方々からかなりの圧力を受けていたようですよ……」

あまのじやく精神が頭をもたげきて、彼はなんとなく反対のことを言うてみたい気がした。

一瞬、陽一の目が光った。美紗の目にも不信の色が浮かんだ。

「義父にしても生身の人間ですから、そうなることも大いにありうるでしょう。ことに伴侶に先立たれており、人生も余生の部類に入っていましたから……。でも、そんな気になれば、義父はきつと日記にそう書いたことでしょうか。あの日の夕方、一緒に食事をしてから出掛けたのですが、いつもと同じで、別に変わつたこともありませんでしたし……」

陽一はきつとした調子で言った。

「いつも日曜の夕方に出られるのですか」

「いや、別に決まっています。会議や打ち合わせがあるときはそれに合

わせていましたから……。予定がないときには月曜の朝に出ることもありますが、あの日は誰かと会うとかと言っていたようでした。そのことも手帳には多分書いてあるはずですよ」

彼は口を閉じたまま、美紗の目を見て大きく頷く。

「もし義父が日記に遺書めいたことやなにか危険が身に迫っているようなことが書いていれば、真つ先に遺族に知らされることでしょう。ところが遺品にはその手帳すらなかった。義父の日記を読まれると困る人がいて、持ち去つたのか、それともどさくれに紛れて廃棄されたのか……」

「もし日記を読まれると困る人がいて、その人が持ち去つたとなると……」

彼はその先を促すように陽一に顔を向けた。だが陽一はもはや口を開こうとしなかった。ふと第一発見者のホテル従業員の顔が浮かんだ。

「とにかく、その手帳を探し出すことですね」

彼は美紗に向かって念を押すように言いながら、腰を持ち上げた。由紀が急いで見習つて立ち上がった。

「ところで、N共火のことでなにかこぼされていますか。最近送電線問題でT電力との厳しいやり取りもあつたようですが……」

彼は立つたまま、まだ椅子に腰を下ろしている美紗に訊ねる。

「とくに気が付きませんが……、父は日頃から会社のことはあまり話さないほうでしたから……」

「こちらへお帰りいられたときに、T電力の人びとと話し合うようなことはなかつたのですか」

「それはあると思います。社長に挨拶に行ったり、前の同僚や部下ともたびたび会っていたようですよ……」

「そうですね。もしそのなかに田村社長の死に疑問を感じておられる方が

いらつしやいませんか……」

彼は勢い込んで言った。

20

「森野さんに、木村さんですね……」

アポイントの時間から三十分も遅れてゴルフ焼けした顔に白い歯を見せながら一人の男が応接室に現れた。田村康平の後任として企画部長となつた村川だった。そして「……えーと、田村康平社長のお嬢さんの紹介でしたね、どんなご関係？」と言いながら、二人のまえの椅子にどかかと腰を下ろした。

村川は二人の顔を見比べながら、いま受け取つた和彦の名刺にいま一度目を通し、テーブルに置く。

「特別、関係というほどのことはありませんが、わたしたちは共通の認識をもつて問題解決のために努力しようとしている間柄というところですか。早速ですが、田村康平氏の死のことですが、やはり……」

彼は村川の天真爛漫というか底抜けに明るい笑顔に度肝を抜かれ、しどろもどろに応える。

「一寸待った。わたしは田村康平社長の死についてコメントする立場になり。美紗さんがどういうつもりでわたしを紹介したのか知らないが……」

美紗から大方のことは聞いていらしい。あまり深追いしても逆効果だろう。彼は戦術を変えるほかないと悟つた。

「田村康平氏とは最近お会いになりましたか」

「ときどき会っていたが、最後はあの一週前のゴルフのコンペのときかな」

「そのとき、どこか変なことはありませんでしたか」

「別に、変わったことはなかったな」

「送電線問題のことで困っているようなところは感じられなかったですか」

「大体、きみね。田村康平社長はあんなことを問題にしていなかったよ、全然。そのうち経済成長が大幅に減速して、T電力はN共火さえ将来持て余すようになるによく言っておられたくらいだからな」

「でもあれはSアルミとの共同で……」

「そうだ。だが田村社長に言わせれば、あの会社ほど当てにならないものはないと言うんだな。大体、操業まえから計画規模を縮小してしまつてい。最初はアルミ地金の精練から圧延まで一貫の生産工場を建設する計画だったのに、途中で一方的にそれを縮小してしまつた……」

村川は一方的に話しつづける。

「……アルミはエネルギーの塊といわれるほどエネルギーを多く消費する。だから石油などエネルギー資源の大半を輸入している日本のような国で、それもオイルショック後四倍も値上がりした石油を燃やす火力でつくつたコストの高い電力で地金からアルミ製品までつくるなんて土台無理な話なんだな。国際競争力を考えれば計画自体無謀な話だった。大体、オイルショックに襲われてはじめて気付くなんて、コスイ関西資本のくせに甘すぎる。かといつて、一方的に計画縮小というのも仁義に反する。だが資本には仁義はないからな……」

彼は軽く頷く。

「……田村康平社長はそれを見抜いていて、Sアルミはいずれ撤退するに違いないと読んでいた。その証拠に、存続を考えての計画縮小なら電力使

用量の多い精錬部門をやめて圧延部門だけにすべきなのにそうしなかった。圧延部門では雇用者が多くなるので、将来動きが取れなくなるのをそれたのだろう……。そんなわけで、田村社長は別に急いでN共火を操業するまでもないし、隣接してそれ以上の規模の火力発電所を建設することを考えることは問題外と踏んでいた。T電力もSアルミのこんな態度へのしつぺ返しに送電線問題を利用していたふしがあった。これはオレの思い過ぎかもしれないがね」

Sアルミの当初全体計画では最終目標が精錬部門年産十八万トン、圧延部門年間加工量三十五万トンだった。当面操業予定しているのは精錬部門の年産九万トンのみで、残りの精錬九万トンと圧延部門についてはいつ工場を建設するかのスケジュールさえ立っていないのだ。

「そうだったのですか。それじゃ、田村康平社長は共火のことで悩んでいることは何もなかったんですね」

「さあ、全然悩みがなかったのか、本人でないともいえないが、わたしには深刻な悩みがあったとは思えないな。よく分からないが、そんな気がする」

「すると……」

「おいおい、これ以上のことは言えないよ。大体、こんな詮索は警察が考えることじゃないのかね。それとも警察が頼りないというのかね」

村川はもういいだろうと言わんばかりに、椅子のアームを押えて大きく踏ん返り返った。

「ところで、送配電部長には会わんのかね」

村川が思いがけないことを言う。

「どうしてですか」

彼は浮かしかけた腰を下し、怪訝そうに村川の顔を見た。

「このまえ、彼に会ったとき、変なことを言っていた。二七万五〇〇で纏まりそうだという情報があったのに、そうじゃなかったよ、と言うんだ。そんなでたらめな情報を誰が出したのだと聞いたが、返事はなかったがね」

「結局、一五万七〇〇〇で収まったんだね」

彼は田村康平が描いていた送電線問題の解決策を思い浮かべた。T電力が二七万五〇〇〇に固執したのは誰かが流したミス情報が原因だったというのか。

「そのミス情報が本当にミスったものか、それとも作為のものだったのか、いまのところ分からないが、もしそれが故意になされたものであれば、送電線問題の解決を妨害しようとして意図的に流したと見ていいだろう」

「そうですか。誰がそんなことしたか是非知りたいものです。送配電部長は教えてくれますか」

「無理だろうな、よほどのことがあれば別だが……」

「よほどのことがないといかんですか。田村康平氏の死因に関することもダメでしょうか。誰に義理立てしているのですか」

「彼はその情報提供者を通して自分たちの行動がサポートされていると感じているのかもしれない。というより、反対派の存在や主張で動揺させられるいると、真偽のほどのあやふやな情報でさえも、自分たちのところを支えるひとつのよりどころとなるときがあるんだ。それで情報提供者を大事にしておきたいと思っているんだろう。われわれもあそこで火電立地反対にあっているのです、そういうものをなんとか大切にしておきたいという彼の気持ちがよく分かるんだ」

「そんなもんですか」

「自分の行動によって作り上げたものや成し遂げたものには事の善悪を超えた愛着があるもんでね。だから無意識のうちにそれを守ろうとしてしまう。これは如何ともしがたいことだな」

彼は村川のしんみりした口調に驚き、じつと目のなかを覗き込んだ。

「おいおい、そんな目で覗き込んでおなにもないよ。まあ、田村社長の死によつて懸案の問題が一挙に解決したからと言って不審に思うことはなにもない。反対派にしても、またうちにしても、田村社長がどうにかしてくれると甘えていたんだな。言ってみれば、社長の突然の死で両者の支え棒がはずれただけさ。どちらがどうということもないんじゃないの。まあ、社長の死が解決の潮時となったということだろう。その死が意図したものか、どうかは分からないがね。でもこれは別問題ではないのかね」

「でも、自分が成し遂げたことに愛着を持つなら、田村康平氏が事の半ばで自ら死を選ぶというのは不自然なことじゃありませんか」

彼には田村社長が死んでしまったからといって、問題が解決すればそれでいいと割り切ることはできなかった。その死が自殺なのか、それとも殺人だったのかは、彼にとって大問題だった。

「蒸し返すなよ。それにはコメントできないんだ。つぎの会議が……、もう時間がないが、田村社長はもともとこの計画には反対だったそうさ。だから愛着といったほどのものはとくになかったかもしれない。それに対して、逆に反感を抱く向きがいたかもしれない。ただし、これはオフレコだよ。じゃ、美紗さんよろしく言っておいてください」

村川は片手を上げ、二人を残してそそくさと応接室を出ていった。

21

退社時間にはまだ間があるというのに、歩道にはサラリーマン風の男女が溢れていた。和彦と由紀は声を交わすこともなく、無言のまま、人の群れに紛れ込む。

T電力本社ビル前の広い幹線道路を横断すると、目の前に駅前に通じる広いアーケード街があった。大きな門構えの入口から人の群れが吸い込まれる。二人も人の流れに身を任せ、アーケード街のなかに入ってしまった。

アーケードは三階ぐらいの高さで、石畳の広い通路全面を覆っている。屋根は透過性のある材料でつくられているものの、内部はすでに薄暗く、遅い午後の大きく傾いたあかね色の陽光が大きく開いた入口から直接アーケード街の道路の奥まで差し込んでいた。

彼は長く延びた自分の影を踏みしめながら、頭の中で村川の話の反芻していた。

陽光が途絶え、影が消えたとき、由紀が無言で彼の後ろを付いてくることに気付いて、振り返った。

「疲れた？ お茶でも飲んでいかない？」

「時間、大丈夫かしら」

帰りの列車のことを心配しているらしい。彼は二、三日S市に留まって取材する許しをえていた。だが彼女は当然日帰りの予定だった。

「今日は一端帰ることにするか。美紗さんへの報告は後日出直すことにしよう。由紀さんともいろいろ相談しておきたいことがあるからな。でも、まだお茶を飲む時間ぐらいあるだろう」

彼は腕時計を見ながら、喫茶店を探す。アーケード街には一階が商店で、

二階に喫茶店やレストランなど飲食店が入っている建物が多い。

「駅まで遠いのかしら」

由紀は心配そうな声を出した。

「じゃ、駅まで行って、時間があたらにしようか」

由紀は彼を見上げるような格好で笑顔で頷く。彼はふたたび人込みを縫って歩き出した。由紀は相変わらず、彼の後ろを付いてくる。

アーケード街を通り抜けると、幅広い道路の向こうに横に長く伸びた三階建ての駅舎ビルが見えた。

N市への最終列車までにはまだ一時間ほどの余裕があった。彼はコーヒーでも飲みたいと思った。だが、乗り換えが二度あることを考えると、最終まで待たずに早めに出たほうが安心だ、と由紀が言う。

二人は発車間際の本線の下りに飛び乗った。

S駅で大勢の乗客が降りたのか、列車は空いていた。前の座席の向きを変え、ボックス型にして、二人は向かいあつて席を取った。

「どう思う？ 日記帳のことだけ……」

「社長はいつも鞆に入れて持って歩いていたのかしら。社長が日記をつけているところを見たことないし、それらしい黒い手帳を一度も見なかったことないわ」

「建設事務所には社長室があるんですか」

「所長室に社長用の机とロッカーを用意しています。所長の机と隣り合わせに並べて置いてあるだけです……」

「社長の机やロッカーのなかを一度調べてくれないかな、念のために」

「いいわ。どうせ、新しい社長が使う前にきれいに掃除する予定だから」

「早いほうがいいな、頼むよ」

「明日、一番にするわ。所長が出勤するまえに所長室の掃除をするから、そのとき見てみるわ」

彼は期待してなかった。そんなところに大事な手帳を置きっぱなしにしているとは考えられないと頭から思っていた。

「今日の話を聞いてどう思う？」

「自殺じゃなかったのかしら。わたしには社長がひとから殺されるような悪い人とは思えないけど……」

由紀は車窓越しにしばらく外に目を向けてから、言った

「じゃ、自殺したと思ってるわけ？」

「……………」

無言のまま、彼女はまた、車窓に目を向ける。

「やはり、自殺じゃなかったのかな」

「分からないわ。でももし社長が殺されたとなると、どんな人がそんな酷いことをしたのかしら」

彼は由紀が極めて冷静であることに驚いた。美紗や陽一が自殺でないというなら、あの二人は誰が殺したと思っているのだろうか。村川も本当に田村康平が自殺したのではないと思っているのなら、犯人の心当たりがあつたにちがいない。もちろん、なんの証拠もなく誰彼が怪しいということはできないだろう。だが自殺じゃないと思うなら、誰かに殺されたということだし、それならそれなりの犯人像ぐらいはおぼろげにも描いていたにちがいないではないか。

「このころのなかにどんな犯人像を描いているのかな、あのお二人は……」

「え？」

「なんでもない。田村康平氏が自殺したのではないと思っっているなら、田

村康平氏は誰かから殺されたということになるよね。それじゃ、どんなひとを犯人と考えているんだろうか。それとも、誰が犯人か分からないけれども、とにかく自殺したとは考えられないということなのか、あの二人は」

彼はあらためて振り出しに戻ったことを実感した。あの死が自殺でないとすれば、殺したのは誰か。犯人の可能性のあるは誰か。

ところで、殺されたのは個人としての田村康平なのか、それともN共火社長なのか。田村康平には個人として恨みを買うようなことがあったのだろうか。これまでのところでは個人として殺されたとは考え難い。やはり、殺されたのはN共火社長としての田村康平だとまず考えるべきだろう。

とすれば、田村康平N共火社長の死によって一番利益を得るには誰か。

当面、田村康平N共火社長が抱えていた最優先課題は地元住民の反対にあっている送電線問題の解決だった。もし田村康平N共火社長が死ねばこの問題の解決が遠のくことだろう。では送電線問題の解決が遅れることによつて一番利益を得る者は誰か。

反対派は送電線問題の解決を遅らせ、計画の撤回を勝ち取ろうとしている。とすれば、反対派のなかには田村康平N共火社長の死にできれば闘いに勝てると思つていた者がいたかもしれない。

彼はふと思いついた考えをもう一度反芻してみる。

地元住民の送電線問題に対する反対運動は送電容量の条件闘争に変わつていたし、田村康平を亡き者にしたところで終わるものでもなかった。反対運動は田村康平個人に向けられたものではなく、N共火を相手にしたものだからだ。

彼は考え倦ね、車窓に目を向ける。夕闇が迫っていた。ふと、窓ガラス

に映る彼をじつと見ている由紀の目に気付いた。

「反対派のなかには過激な人もいるんだろうなあ、だがN共火はともかく、田村社長だけを目の敵とするようなことは考えられないよね」

彼は由紀に同意を求める。

「え？」

由紀は理解できないのか、目を丸くする。

「田村社長が自殺したのでなければ、誰かに殺されたことになる。それは誰か。そしてその動機はなにか」

彼には送電線問題の急転直下の解決がふしぎでならなかった。激しく対立していたT電力と地元反対住民の両当事者がなぜ急に妥協する気になったのか。それは田村社長の突然の死によるものか。そうではなくてその死が自殺によるものだったからなのだろうか。

これももし田村社長が誰かに殺されたのであれば、送電線問題は急転直下に解決することになっただろうか。彼には田村社長の死が自殺じゃなくて、他殺によるものだったら、送電線問題が今回のような急転直下の解決を見ることがないような気がしてならないのだ。対立している両当事者側は端から田村社長の死は自殺だと思いついていて、ということだろうか。

両当事者側には田村社長の死を自殺だとすることによつてなにか得ることがあるのだろうか。今回の解決は双方の譲歩によるものだった。双方に得るものはなにもないのだ。むしろ双方とも損しているのだ。とすれば、やはり、両当事者側とも田村社長の死を自殺によるものと決めつけているということか。

両当事者側とも他殺とは思っていない。ではなぜそう思いついていて、

彼には分からないことだらけだった。考えれば考えるほど分からなくなっていくのだ。

「あのお、行くときの汽車のなかで言っていたことだけど、所長が社長のチェックインの時間を確かめていたということは本当なのよ」

じつと彼の目を覗き込んでいた由紀が突然思いがけないことを口にした。

「え？ そうか。すると……」

あの夜、田村康平が会うといっていた相手は下藤だったということか。

あやしいのは下藤だと由紀も思っているということか。

「でも所長が社長と会っていたかは分からないわ。所長はあの夜、Sアルミの倉多常務とマージャンしていたらしいのよ」

「え？ そんなこと、どうして知っているの」

由紀も田村社長の死は他殺によるものと考えていると思ったが、必ずしもそうでもないらしい。彼はさらに追及していく。

「父から聞いたのよ。だから、あのとき父が注意したわけ」

由紀が父から聞いた話はこうだった。下藤や倉多が懇意にしている小料理屋の板前が春治の幼なじみだった。板前は仕事の後よく下藤らにマージャンに誘われるという。

あの夜、倉多は珍しく一人で八時ごろやって来て、店仕舞い頃までひとりで板前相手にカウンターで呑んでいた。そこに下藤が現れ、二人で呑みだしたが、早めに店を閉じると、二人に女将と板前といたいつものメンバーでマージャンを始め、四人で明け方までやっていたそうだ。板前は倉多の車に乗って帰ったが、下藤は一人後に残ったのでいつ帰った分らないという。

二度目の乗り換えを済ませるときには、晩春の日はすっかり暮れていた。

由紀はN市への列車に乗り込むと、ようやく今日一日の緊張から解放されたのか、すぐ両眼を閉じてしまった。彼は車窓のガラスに映る自分の疲れた顔を見据えながら、何度も自問自答を繰り返した。

自殺した理由を探していたのに、その死は自殺ではなく、他殺らしいのだ。するとあの首吊りは田村康平を殺した犯人の偽装だというのか。一体、田村康平を殺した犯人は誰なのだ。

第三章

22

「首吊りが偽装だと……」

川田は恐い顔をして和彦を睨んだ。

「……なぜそう思うんだ。証拠はあるのか」

彼は口を二文字に閉じたまま、いま話した取材の結果がなよりの証拠だと言わんばかりに、川田の目を強く見返す。

「いくら確信があっても、状況証拠だけじゃ話にならん。取材した話でもむやみやたらと信じてはならんのだ。ウラを取って確かめるんだな」

いつもと違い、川田はなぜか苛立っている。

「このようなケースではどうやってウラを取るんですか」

彼はあえて突っ掛ける。川田は黙ったまま、彼をじつと見返すが、その目から苛立ちが消えていた。川田がなぜ急に苛立ったのか、そのわけを知りたかった。彼はじつと川田が口を開くのを待つ。

「現場となったあのホテルのデラックススイートルームを見てきたが……」

しばらくして口を開くと、突然、川田は話題を変えた。そしてNホテルと警察で取材して内容について詳しく説明し出した。

「やはり、自殺じゃなかったんですね」

「分かん」

川田は不機嫌そうに言う。彼はその顔を見ながら、つい勝ち誇ったように言ったことを後悔した。

彼には思い付いたことをすぐ口にしてしまうところがあった。率直といえど聞こえがいいが、一人っ子で甘やかされて育ったせいも、彼はひとこのころのなかを読むことが苦手だった。

「一度自殺と断定しておきながら、刑事がまた嗅ぎ回っているというのが本当であれば、警察も以前から田村康平氏の自殺を疑問視していたということですか。それともなにか新しいことでも出てきたんですかね」

「疑問視していた？ それはなんだ」

「自殺という死因に対して疑いを持つていたということでしょうか。でも一寸おかしいですよ。警察はとにかく一度田村康平氏の死を自殺によるものと断定したんですから。それなのにいまごろになって覆すなんて、そんなことありですかね。それともその刑事の単なる独断的行動ですか」

「それも分からん」

「それともなにかあったんですかね。やはりあのとき県当局から捜査の一時ストップの要請があったんでしょうか」

「さあ、だがふたたび捜査をはじめているとなるとままと事情が変わったとしか考えられないな。ままと変わったことといえば……」

「送電線問題が突然解決したことです。それにしても、なぜ対立していた両当事者が急に手の平を返すように譲歩したのでしょうか」

「田村康平社長の死はこのことと関係があるということか」

「もし関係があるとすれば、犯人は送電線問題を早く解決したかったので田村康平社長を殺したということなるのですか」

「うむ、そうなるか」

「じゃ、送電線問題を早く解決したがっていたのは、誰ですか」

「うむ、それは……」

川田は黙ってしまおう。

「送電線問題の早期解決を一番願っていたのは……、開発を主導してきた県当局ですか。そういえば、あのときも田村康平社長には県の担当者との打ち合わせの予定があったんじゃないんですか」

「県の誰かが田村康平社長を殺したというのか。今どきそんなことまでして責任を果たそうと思うような官僚はいないよ。もし担当者にそんな人物がおればこのような事態に陥るようなことはない」

川田はむっとした声で言う。

「県当局者でないとすれば、一体、誰ですかね。他に誰かいますか、送電線問題の早期解決を願っているようなひとは」

「田村康平氏はそう願っていたらうな」

「N共火の社長としてか」

「うん……」

「それじゃ、やはり田村康平社長は自殺だったということですか」

「ふーむ……」

川田はなにか考えているのか、彼の話に乗ってこない。

「N共火が送電線問題の早期解決を願っているなら、Sアルミはどうですか。Sアルミにしても思えば同じじゃないんですか」

彼はかまわず突っ込む。

「うむ……」

「田村康平社長だけが責任を感じて自殺したんですか。親会社のT電力が妥協しないために送電線問題が解決しないので、T電力から派遣されている田村康平社長が窮地に陥り、死を選んだということですか」

「……………」

川田は口を開かない。

「田村康平社長を死に追いやるほど、どうしてT電力は送電容量二七万五〇〇〇にこだわったのですかね」

彼は自分でもだんだん分からなくなっていく。だが田村康平社長が自ら死を選ぶとは思えないのだ。

「T電力は火電基地化構想を捨てきれなかったらしいが……」

「でも高度成長にかけりが出て、火電基地化構想の破綻も目に見えていたではありませんか。それなのに送電容量二七万五〇〇〇にこだわりつづけているなんて、田村康平社長への嫌がらせとしか思えない」

「そうかね。T電力の現社長との権力抗争でもあればそう考えることもできるが、逆に、二人が手を組んで、戦略的にSアルミの追い落としを計っていたとも考えることができるではないか。だがこんなことで田村康平氏が死を選ぶとは思えない。いや自殺するようなことは決してない。深く考えても切りがない」

「あまり考え過ぎるなということですか」

「……………」

「やはり、自殺じゃなかったのですね。でも、田村康平氏が誰かに殺されたとなると、その理由はなんでしょう。犯人の動機として考えられることは……」

「田村康平氏の死によって送電線問題が急転直下に解決したが、交渉が難渋しているように見えても、送電線問題は早晩解決するはずだったのだ」

「送電線問題が急転直下に解決したことに惑わされて、いままでほかのことが見えなかったというのですか」

「いいか。犯人は逆に、送電線問題の解決を遅らせたかったにちがいない。」

田村康平氏は送電線問題の解決のために県と打ち合わせを予定していたな。そこで県にT電力と地元反対派に対して問題解決の斡旋を依頼しようとしていたのだろう。犯人はそれを阻止したかったのだ」

川田は言ったことを自分で確認でもするように何度も頷いている。

「なるほど、そういうことだったのですか。そうすると犯人の動機は……」

彼はふとS市からの帰りの列車のなかで由紀が下藤所長のあの夜の行動について話していたことを思い浮かべた。

23

「デラックススイートルームは鍵の掛かっていたし、その鍵は室内のテーブルの上にあった。もし偽装殺人だとすると、田村康平氏を殺し、自殺したように見せ掛ける偽装をした犯人がどうやってそこから抜け出たのか」

川田は和彦に問い掛ける。

「べつに難しいことはありませんよ。犯人はなかに潜んでいて、発見者がドアを開けたあとで誰にも気付かれずに逃げ出したのかもしれない。あるいは犯人が発見者と一緒に部屋に入ってどさくさに紛れて鍵をテーブルに置くこともできますからね」

彼は言ってしまうから、しまったと思った。確か、あの朝、下藤所長が田村康平社長を迎えにホテルに出むき、返事がないので、予備の鍵を持った若い従業員にルームのドアを開けてもらったという。だとすれば、彼が言ったことは下藤所長が犯人か、あるいは犯人と意思疎通があったらしいということになるからだ。だが川田は彼の言った内容を別に吟味しようとし

しないし、全く気にしてないふうだった。

「犯人が室内に潜んでいたとは考えにくいな、あの部屋では……。でない」とすると……」

川田は別のことを考えているらしい。

「そうですね、発見者が犯人の可能性もあるということじゃないですか。とにかく、あのときの状況を下藤所長にもう一度訊ねて見てはどうですか」彼はホテルの若い従業員のことを思い浮かべ、一気にそのとき一緒にいた下藤所長に焦点を合わせていった。

「きみはまさか彼を疑っているわけではないだろうな」

川田はじつと彼の目を覗いている。

「第一発見者が一番怪しいんじゃないんですか。なんといつても第一発見者が犯人の最有力候補ですよ、推理物では」

彼は調子に乗ってつづける。川田は呆然とした表情をあらわにして新米記者を見ている。その目はまるで「この男の論理には飛躍がありすぎる。これを直さなければジャーナリストとしての大成は覚束ない」と言っているふうにも見える。

「なにを証拠にそう言い切れるんだ」

川田は目を大きくして彼を見た。

「決定的な証拠はまだ見つからないですけど、一〇〇パーセントデタラメだとは言い切れないでしょう、状況から見てそう言えるところがあるので……」

「おい、じゃ、下藤所長にはどんな動機があるというのか」

川田は大きな声を出した。自分でも気付かないうちに、いささか興奮しているらしい。

「自分が次期社長候補だったのに、田村康平氏が社長に留任することになったし、N共火の着工を巡って意見の対立があった。それに折角下藤所長が県との打ち合わせで決めた『燃料中の硫黄含有率は仕上がり〇・七九パーセント以下』という数字を、田村新社長がいとも簡単に『仕上がり〇・三パーセント』にまで下げてしまったではありませんか」

「だがそれらは大分前のことだ」

「下藤所長が神田社長に代わり県との交渉によって纏めたもろもろの合意や取り決めが田村社長につきつぎに書き換えられ、折角の努力がすべて無駄になってしまった。下藤所長には田村康平社長に対する恨みがつもりに積もっていた」

「だがそれらは着工するために止むを得なかった」

「としても、全力を尽くし、折角苦労して成し遂げた成果を全面的に否定されたのです。これは下藤所長にとって全人格を否定されたようなものです。誰でもそう感じるのではないんですか」

「オーバーな……」

「下藤所長は社長となるチャンスを奪われ、自分の存在そのものを否定されたと思っただんじやないんですか」

「……………」

川田は彼の目をじつと窺うような目で見た。原稿をポツにしたことを思いだしたらしい。

「それで田村社長をなぎものにする機会を狙っていた……」

「ストーリーとしては考えられる。だが着工騒動から一年半近く経っている。時間が離れすぎている」

「でも丁度、社長交代目前の時期ですよ」

「なるほど。かといって、送電線問題の解決を遅らせることもあるまい。もしかしたら、もつと深い根があるかもしれないな」

「え？ それはなんですか」

「あの男も結局誰かに踊らされたに過ぎないのかも……」

川田はしばらく黙ってじつと彼の顔を見ている。

「だがひとつ問題がある。さっきの話のとおり、彼らが明け方までマージャーンをしていたとなると、下藤所長にはアリバイあることになるぞ」

「あ……、死亡推定時間のことですか……。犯行時刻と合致しないのですね。でも推定時間というのはそんなに当てになるものですかね。かなりの誤差があるというんじゃないんですか」

「勝手なことを言っちゃいかん。だからそれを見込んで幅で示している」

「でもたとえ所長が犯人でなくとも、あの男はなにかを知っているはずですよ」

「うむ……、あの男ね。まあいいか、ひとつ徹底的にやってみるか」

川田は受話器に手を伸ばす。

「やあ、おやじさんは元気かね。そう。ところで、所長はおられるかな。じゃ、これからそちらに向向く。所長には黙っておいてくれ」

24

「時間はあまりありませんが……、突然何事ですか」

案内した由紀の後から顔を出した川田に下藤所長はあからさまに不愉快そうな声を出した。そしておもむろに執務机から立ち上がると、ドアに近

いコーナーに置いてあるソファをすすめる。

由紀と入れ違いに、和彦が所長室に入る。下藤所長はさらに渋い顔をして「なにしろ、新聞記者は気まぐれだから、かなわんよ」と低い声で呟く。

「前もってお電話を頂けば、川田さんのためにたっぷり時間を取っておけたのですが、生憎……」

皮肉な響きがあった。

「いや、早いとお耳に入れたいことがありましたのでね」

まともにアポイントを取ろうとしても下藤所長は居留守を使い、今日中には会うことができないだろうと思いい、彼は奇襲作戦に出たのだった。

「ところで、自殺した田村康平氏はあなたをととも高く買っていたというではないですか」

「まさか」

下藤は一瞬彼を睨らみ、吐き捨てるように言うと、そんなことを言うためにやってきたのかというような目をして、顔を背けた。

「でなかったら、重要な時期に、あなたを本社へ戻すようなことを考えなかったんじゃないんですか。それも取締役に推挙していたというではありませんか」

和彦は川田の顔を見た。彼は一体、いつこんな情報を仕入れたのだろうか。下藤も一度背けた顔を戻し、半信半疑といった目を彼に向けた。

彼の作戦はこうだった。たしかに和彦の言う通り、下藤には疑わしいところがあるが、かといって、これといった決定的証拠がない。だからなんとかして下藤本人の口から真相を語らせたかった。それが無理でも、本人に自分の行動を自分でチェックさせ、下藤のところに動揺を呼び込み、これによつてなんとか活路を見いだそうと思つたのだった。

「それが新しい情報だったのでですか。わたしはもつと素晴らしい情報かと思つて心待ちしていたのですが……。これから会議がはじまりますので、そろそろ失礼させていただきますが……」

下藤は椅子から腰を上げかけた。

「お忙しいのなら決してお引き止めはいたしません、実は、最近、また警察が動き出しておりましてね」

下藤はおおむろに腰を下ろした。彼は下藤の目に一瞬不安そうなかげが過つたのを見逃さなかつた。

「刑事があのかのときのホテル従業員を探してしまつてね……」

彼はふたたび下藤の目を覗く。

「……あ、そうですか、でもなんのためですかね」
声が擦れている。

「さあ、田村康平氏の死因について新しい情報でも掴んだのじゃないんですかね。警察が一度判定したことを覆してふたたび捜査を開始したとなると、やはりそれなりの理由なり新たな事態の発生があつたんでしょう……」

彼は下藤の目を覗いたまま、話をつづける。

「……実はわたしは田村康平氏が社長に就任したとき、なんて幸運な男かと思ひましたよ。なにしろ懸案のすべてが解決して、前任者の敷いたルールを走りさえすればよいよう見えましたね。ルールを敷くのには前任者がどんなに苦労したか知っていましたからね。その中心となつたのがほかならぬ下藤さんでしたよ。だから、下藤さんとしてはいささか複雑な気持ちじゃなかつたんじゃないですか」

彼は下藤を一瞥し、一呼吸を置いてつづけた。

「……下藤さんとしてはまるでトンビに油揚げを攫われたといった感じだったんじゃないかかと……。ところが、田村康平氏はそのルールを走らず、つぎつぎと新しいものと置き換えていった。結果的に、下藤さんの折角の努力が水泡に帰ってしまったようなわけですよね」

「まあ、そういう見方もできるかもしれないが、N共火の電源計画が電調審の承認を受けたあとのことですから、わたしの努力のすべてが水泡に帰したわけでもないと思いますよ」

「でも折角『燃料中の硫黄含有率は仕上がり〇・七九パーセント以下』という数字で締結した公害防止細目協定を無視して、最終的に、田村新社長は『同仕上がり〇・三。パーセント』にまで下げてしまった」

彼は突き放す。

「うむ……。あれには本当に参いた。Sアルミの倉多常務からは『バナナの叩き売りはよしてくれ、命が縮む思いがする』『T電力出身者は性質が悪い、ひとを散々利用するだけで厚かましい』などとさんざん嫌みや苦情を言われましたよ。しまいには彼はわたしを『裏切り者』呼ばわりまでしましたね。あのときは本当に参りましたよ」

「といつても、あの合意事項は地元住民の意向を無視して決めたようなところがありますよね」

彼は意地悪そうな目をして言う。

「公害防止細目協定は地元のN市と周辺の関係八町のそれぞれの長が締結するものです。市町村長は地元の代表者です。ですから、地元を無視するという評価はあたりませんよ」

下藤はムキになった。

「そうですかね。行政の長の同意があれば、その協定に地元住民の意思が

反映されているといわれるのですか」

「もちろんですよ、市町村長は住民による選挙で選ばれているのじゃないのですか」

下藤は自分の行為の正当性を主張して憚らない。どうしても自分がお膳立てして締結した協定の妥当性を認めて欲しいのだ。

「とはいつても、発電所の周りの直に煙を被る住民にとっては、煙突から吐き出される亜硫酸ガス濃度は低ければ低いほうがいい。できたら、ゼロにして欲しいのじゃないんですかね。それを勝手に〇・七八パーセントなんて決められてはかなわないと思うのは当然でしょう」

「市町村長はそのような住民をも含めて彼らを代表している」

「かといつて、現に反対を表明している住民の意思を無視してもいいということはないでしょう」

「電調審を通すためには、N共火計画に対する知事の同意が必要ですが、これはこのような公害防止協定の締結が前提になるのです。電調審の直前にようやく知事の同意をうる事ができたのですが、この同意をうるためにわたしが心血を注いでようやく締結にこぎ着けた協定が目の前で次々と書き換えられていくのを見ているのは辛いものですよ。たとえ地元住民にとってプラスとなる変更だとしても、わが社にとってはマイナスにちがいないし……」

「まあ、地元住民にとってプラスというよりマイナスを減じたというべきものでしょうが、それも田村康平氏が着工するために止むを得ずそうしたということでしょう」

その途端、下藤の目が異様な光を放った。

「折角心血を注いでなしとげた自分の仕事をこころも簡単に否定されるよう

なことは決して気持ちのいいことではない……、それがどんなことか、当事者でなければ分かりませんよ。それは全く屈辱以外のなものでもない」

「かといつて……」

彼は危うく「殺すまでもないだろう」と言いそうになった。彼はじつと下藤の目を見た。その目は動揺を必死に隠そうとしているように見えた。

「ところで、以前、こんな噂を耳にしたことがあるんですよ。県当局の陰謀説というものがね……」

彼はじつと下藤の目を覗き、反応を窺った。だがその目には取り立ててなんの変化も見られなかった。

「県としてはなんとしてもあのプロジェクトを成功させたがっていたわけですが、オイルショックを機に景気が低迷し、高度成長経済が怪しくなりだした。折角誘致した企業も新規投資を手控えはじめた。そこで計画縮小を言いだす誘致企業に好条件を示し、一日も早く工場や発電所の建設を促す作戦を取るようになった。このため、県は関係筋と計って、公害などの規制は当初甘い条件を示すことにしたというのです」

「そんなことは考えられない」

「そうですね。それじゃ、N共火の着工のときのことをどう説明しますかね。それまであまり表立って大掛かりな反対運動をしていなかった県評や地区労が寸前になって労組員に大動員をかけて着工阻止のピケを張った。その結果、硫黄分含有率仕上がり〇・三パーセントを勝ち取ったが、そのときの県の態度はどうでしたか。あなたと交渉したときと県の態度に変化がありませんでしたか」

「……………」

「県はいままで果たしてきた当事者としての立場を放棄して、当然のよう

に仲介者の立場に立ったじゃありませんか」

「それは県として……」

「残念ながら、県と県評や地区労の間になれ合いがあったという確固たる証拠が掴めなかったので記事にはできませんでしたがね」

「……………」

下藤は口を固く結んだままだ。

「まあ、別に田村康平氏を擁護するつもりはないが、県はN新港プロジェクトが思うように進まないことになんかの苛立ちと焦りを感じていたことは確かだ。だから、誘致企業の言分を可能なかぎり呑んで協定を結び、用地の売渡しを進めていった。例の公害防止協定も同様だ。だがこのような県の態度を地元のN市がすんなりと受け入れることができなかった。田村康平氏は県の意向に沿って敷かれたレールを走りたくとも、地元の反撃にあつて走れなかった。地元の反撃を県が容認しているというより、陰で支えているのだから。とにかく、先に進むには一度敷かれたレールを張り変えざるをえなかったというわけで、決して下藤さんらが成し遂げたことを無視しようとしたものではなかった。むしろ、涙を吞んでそうせざるを得なかったということでしょう」

下藤は彼の話を聞いていないふうを装いつづけているものの、頑なに目をあらぬほうに向けたまま口を固く結んでいる。彼も黙って下藤をじつと見守っている。

「誰かがT電力の送配電部長あてに『地元が二七万五〇〇〇ボルト送電線の受け入れに傾く』というニセ情報を流していたそうですが、これも県の策略的な行動と関係があるんですかね……」

怖い顔でにらめっこしている二人の態度にうんざりして、誰とは言うこ

となしに、和彦が口を挿む。一瞬、下藤の目が動いた。

「所長さんはこのことをご存知だったんですか」

和彦は目ざとく反応する。

「そんなこと、誰が知るもんか」

「送配電部長をご存じないのですか、T電力の……」

「首藤くんのこと？ 知っていますよ、もちろん。ニセ情報のことを知らないということだ。誰がそんなことをいつているんですか。首藤くんですか」

「それは明らかにできませんが、うそだと思つたら、直にご本人に確かめられたらいいでしょう。わたしはてつきり……」

「わたしがそうしたと……」

下藤は目を剥いた。

「まさか。わたしは作り話だと思つていたので、確かめてみたかっただけですよ。もつとも、送配電部長に聞けばいいことですが……」

「じゃ、森野くん、そろそろ失礼しようか」

彼は腰を浮かしながら、和彦を促す。それからぼそぼそと「そんな情報を流す奴がいるとすれば、警察が動き出したのも誰かからの通報かな」と独り言のように言う。

「……………」

下藤がちらりと目を動かした。

「ところで、あの日は明け方近くまでマージャンをやっていたそうですが、本当ですかね」

ソファから立った彼はまだ椅子に腰を下ろしている下藤を上から見下ろすような格好で言う。

「……………」

下藤は口を開こうとしない。

「美人女将に確かめればいいのだが……、まあ、ついだから……、所長は誰と何時頃までやっていたのでしたかね」

「……………」

急に所長と呼ばれたのが気になったのか、下藤は嫌な顔をした。だが相変わらず、口を開かない。

「何時ころまで……」

彼は繰り返し返す。

「もういいだろう。四時ごろまでだ。倉多常務と一緒に」

下藤は腰を上げようともがく。だが思うように身体が動かないのか、ふたたび腰を下ろす。

「四時までね……。でも、あの日は朝一番の特急で田村社長と県庁に出掛ける予定じゃなかったんですかね」

彼はたたみかける。

「倉多が沈みに沈んでなかなかやめさせてくれなかったんだ」

下藤の口が動き出す。

「ほう、勝負に狡い倉多常務がね。沈んだのはあなたのほうじゃなかったのですか。それで止めることができなかったのじゃないの。で、そのあとは……」

「それつきりですよ。倉多が帰り、わたしはしばらく休んでから社長を迎えにホテルに出むいた」

「倉多常務が帰ったのは何時頃ですかね」

「四時半過ぎ頃か」

「それからあなたが帰ったんですか、それともホテルへ行くまでそこにいたんですか」

「……………」

下藤はしきりに口をもぐもぐさせるが、声にならない。

「答えにくけりや、女将に聞きましよう」

彼は下藤に近づき、目を覗く。

「関係ないことでしょう」

下藤は絞り出しように言う。

「まあ、いいでしょう。森野くん帰るか」

彼はじつとソファに腰を掛けたままでいる和彦を一瞥すると、くるりと踵を返す。

25

下藤は川田と和彦が出ていったあと、しばらくの間、椅子から立つことができなかつた。二人の顔が交互に浮かび、彼を追及しつづけるのだ。

ふと、田村康平の死顔が浮かんだ。何度消し去ろうともがいても、網膜に焼き付いたように離れようとしない。それから逃れるように必死で立ち上がると、執務機の電話器に受手を伸ばしてダイヤルをまわす。

「下藤だけど……………」

「いま忙しいんや」

「ブンヤが嗅ぎつけたらしい、それに警察が……………」

「なんのことや」

「例のことだ」

「なんや？」

「田村社長の……………」

「ん…………、奴等は商売やからな」

「誰かが通報したらしい」

「…………どこから聞いた？」

「さる筋からだ」

「……………」

「一度話をしたい」

「どうぞ、話してや」

「会ったとき話す」

「いま話してや」

「一度こつちに来て欲しい。打合せしておきたいことがある」

「分かつた」

受話器を乱暴に置く音がした。彼は目の前でドアをピシャリと閉められたように感じた。倉多が自分を避けたがっていると思つた。だがなぜ倉多が急に自分を避けようとするのか。いくら考えても彼には思い当たることになかつた。

彼は次第に深みに落ち込んでいく自分を感じた。倉多が避けたがつてい理由を探り出したかつた。その理由が分かれば、気持ちも軽くなるかもしれない。彼はいろいろと思いを巡らすと思ひ当たるものはなく、もがけばもがくほど深みにはまっていくような気がした。

川田が言うように、高度成長のバスに乗り遅れまいとする県の思惑から誘致企業への優遇策が講じられていたとしても、自分の苦勞を無視するよ

うな田村康平の行為は許せなかった。かといってそれを行動に移すことを考えたことはなかった。彼は自分が成しとげた事柄が田村康平によってつぎつぎに覆られていくのを黙って見守っていた。前任の神田社長とは違い、田村康平は常務である彼に任せ切りにすることはなく、最終的には自分の責任で事を処していた。ことに地元との交渉や住民と関係深い環境問題については率先して対応に当たった。それだけ時代の流れに敏感だったのかも知れない。

このような田村康平のやり方に彼は羨望と反感を感じながら、自分の仕事の成果が覆されていくたびに屈辱を味わい、こころに深い傷を受けた。彼には耐えるほか術はなかった。耐えるたびに彼のこころは屈折し、深く落ち込んだ。彼は倉多を相手に酒を飲み、マージャンに嵌まっていた。確かに、田村康平に対して良い印象を持っていなかった。社長の座を横取りされたように感じることもあった。死んでしまえばいいとすら思った。

とはいっても、倉多のあの一言がなければ、決してあんな行動を取ることとはなかったはずだ。彼は自分の行為を何度も思い返し、そのたびに自分でも理解できない行動を取ってしまったことを悔いた。だがいくら悔いたところでどうにもならなかった。そのことに気付くと、彼は自分の行為の正当化を企てるようになっていったのだ。

田村康平は公害防止細目協定の硫黄含有分パーセントをより厳しくすることによってN共火に莫大な損害を与えた。これによってSアルミばかりでなくT電力も甚大な不利益を被るのだ。このような行為は会社に対する反逆ともいうべきもので、決して許されるものではない。だから、自分が天に代わって誅罰をくわえたのだ。あれは天誅だったのだ。

こう自分に思い込ませることで幾分落ち着きを取り戻したところに、川田が森野和彦という若造を連れてやってきたのだった。

県陰謀説というのは本当だろうか。田村康平が自分を買っていたというのは作り話じゃないのか。

あれが県の陰謀というのであれば、電調審に間に合わせるために寝る間も惜しんで纏めた公害防止協定はなんだったのか。会社のためを思つて一字一句も疎かにせずに、心血を注いで締結にこぎ着けた協定内容が県にとつて企業を誘致するための一時しのぎに過ぎの見せ掛けの優遇策にすぎないどうでもいいことだったというのか。そのことには全然気付かず、田村康平によって燃料油の硫黄含有量が見直され、亜硫酸ガスの排出濃度がより低い厳しい数値へと覆られていくたびに、激しい屈辱と田村康平に対する憎しみを増幅させていったというのか。その揚句の果てに……。

彼はとんでもないことをやってしまったことをなんども悔いた。でもその都度、一方では止むを得なかったことだったと自分に言い聞かせていた。こうすることによってこころの平静さを維持しようとしていたのかもしれない。

だがそれも怪しくなった。田村康平が意識して彼の仕事の結果を排除しようとしたのではなく、県の陰謀に抗して、彼の努力で勝ち取った電調審の承認（認可）をなんとか早期に形あるものにするために精一杯の努力を傾注していたらしいのだ。

思い違いをしていたのだろうか。彼は川田が指摘したことが本当か、もう一度田村康平が社長に就任した前後の出来事を振り返る。彼は丹念にチェックを繰り返した。

論議の中心となったのは煙突から排出される亜硫酸ガス濃度であった。

当初「燃料中の硫黄含有率は仕上がり〇・七九パーセント以下」で関係市町村と合意していた。これは電調審通過後、田村康平社長就任のまえに、覚書に基づき締結された公害防止細目協定で定められた内容であった。仕上がりというのは煙突から排出されるまでの途中で行われるさまざまな脱硫対策によつて排煙から取り除く亜硫酸ガス分をも含めて計算するということである。

彼にとつて我慢できなかったことは、「硫黄含有率〇・七九パーセント以下」という当初協定値が交渉を重ねるごとに低下していき、それがとうとう着工時に「〇・三以下」まで下がってしまったことだった。

だが当初協定値が県の陰謀によるものだとすると、田村康平が「バナナの叩き売り」のように下げていったのは、県の描いたシナリオだったということになるのか。とすれば、川田の言う通り、田村康平の行為も止むを得ないことになるのではないか。

彼は大きなため息を吐く。

四十七年の四日市喘息に対する判決に対応して、翌年の六月、九電力会社の社長会が五十二年度以降燃料油の硫黄含有量を「〇・二九」に下げると言明した。さらに、同年十月、オイルショックが襲い、石油価格が一挙に四倍も跳ね上がった。

Sアルミは目の色を変えた。アルミ地金精錬への新規投資の見直しが検討された。

これらはN共火の電調審承認直前の出来事だった。彼は倉多に頼み込んで、電調審が終わるまで、新規投資の手控え検討を伏せておいてもらった。また公害防止協定の覚書で〇・七九で合意することの意味を深く考えることがなかった。電調審の承認を得るために必要な知事の同意を手に入れ

たことで、すっかり有頂天になった。いや、これで電調審の承認を得れば、神田社長の後継者となることが間違えないとわくわくしていたのだ。

あの合意も、あの数値も、すべて高度成長のバスに乗り遅れまいとしていた後進県G県の焦りに過ぎなかったのに、彼にはそれを読み取ることができなかった。彼は田村康平によつて「〇・七九」の数値が大幅に下げられていくのを見て、もしかしたら折角電調審の承認を受けた火力発電所が

日の目を見ないのではないかとさえ思われ、内心焦りを感じていたのだ。なにも彼は焦ることはなかった。すでに新社長が決まって、新社長のもてことが運ばれていたのだ。それに「〇・七九」という数値にしろ、社長会の「〇・二九」に比べれば、何倍か高い値だし、オイルショックの影響が日本経済にボディブローのようにじわじわと効きだしてきている状況のもとで、石油を燃料とする火力発電所の建設が難しいことも、一寸冷静に考えれば気付かないことではなかった。

彼にはなにも見えなかったのだ。時代の変化が分からず、地元住民の企業や行政に対する不安、不満、不信も目に入らず、ただひたすら目先のこのみを追い続けていた。目先で動いているものを追い続けければ、そのまま素晴らしい未来につながっていくものと思っていたのだ。

いや彼はそれを邪魔立てするものは敵だときえ思った。彼にとつて田村康平は自分の進む道に立ちはだかる敵だった。敵はなにがなんでも排除しなければならなかった。

彼は田村康平がむしろ県の陰謀の犠牲者であることに気付かず、逆に、地元住民におもねり、彼に協力して覚書や協定締結を進めた県に刃向かうものとしか感じなかった。よもや県に自分が嵌められていたとはいまのまままで気付くことがなかった。

まだ半信半疑だった。だが彼には思い当たる節があった。当初、県は彼の言分を鵜呑みして、彼の主張通りにことを運んでくれた。そのとき彼は当然のことと受け取っていたが、県はキャンセルを恐れて、誘致企業の言分をそのまま聞いて、早く引き返すことのできないところまで追い込んでおきたかっただけだったのだ。

忌忌しかった。彼は自分と同じサイドでことを進めていくくれるとばかり思っていた県が最初の段階から彼を裏切っていたのだ。「〇・七九以下」はオイルショックによる石油価格急騰で動揺しているSアルミら誘致企業の歓心を引くための見せかけの数値だったのに、彼はそのことに気付こうとしなかった。この数値はむしろ、出向元のT電力に対しても誇りたい手柄とさえ思っていたのだった。

彼は着工をめぐる住民側の地区労らとの対立の最終段階に県が仲介者として現れたときでさえ、そこに問題解決に努力する県の真摯な姿を見ていたのだ。

ようやく彼は自分がいかに救いようのない馬鹿だったかを思い知ったのだった。

彼は気を取り直して、受話器を取ってダイヤルを回した。

首藤の声がした。冷たいまでに冷静な彼の面立ちが浮かんだ。

「二セ情報があったそうだね」

「うん、誰から聞いた？」

「誰がそんなはずらをしたんだ？」

彼はかまをかける。

「……きみじゃないとすると、きみの名を借ったということか。……だがもつともらしい情報だったかな」

首藤は一瞬口籠ってから、つぶけた。

「電話じゃなかったのか」

「ファックスだった」

「誰か全然見当つかないのか」

「……………」

返事がない。

「教えてくれないか」

彼は首藤の尊大そうな顔を思い浮かべる。

「実はイニシアルが書いてあった」

「それで……なんて……」

「K・Sだ」

「なんだって」

「そうだ。きみと同じだ」

「うむ……。すると……」

「てつきりきみからと思っていたよ。このことはいままで伏せていたけどね。これは一体どういうことかね。きみには全然心当たりがないのか。当初は真に受けて、田村社長の要請を断っていたんだ。もしそうしなければあんな死に方をしなかったんじゃないかと思うと申し訳ないかぎりだ。本当にきみじゃないんだね。ファックスを受け取ったとき、一度確かめればよかつたんだが、それまでの田村社長の状況報告とは全然違っていたし、それに当方の言い分が通るならそれに越したことがないから、しばらく静観することにしたんだ。ところがあんな結果になって……。本当にきみじゃなかつたんだね。ああ、頭が痛いよ」

彼は全身に震えを覚え、受話器を置いた。これ以上首藤の話聞いてい

る余裕はなかった。しばらく震えが止まらなかった。それにしても一体誰がそんな情報を極めてタイミングよく送り付けたのか。よほど内情に通じているものか、それとも単なる偶然だったのか。

彼はふと、川田が帰りしなに呟くように口にしたことを思い出した。もしかしたら、首藤にニセ情報を送り付けた者と警察に通報した者が同一人物ではないのかと思った。その瞬間、彼の脳裏にひとりの人物が浮かんだ。

26

「どうしても追いつめなかったのですか」

和彦は口を尖らせた。川田は返事もせずに、車窓から外に目を向けている。

「あ、いけねい、すっかり忘れていた。彼女を見かけなかったですよ。どこに雲隠れしたのかな」

彼は川田が相手してくれないので、独り言のように言う。川田は相変わらず、外に目を向けたままだ。

タクシーは市街に入った。小道に入ってM新聞N通信局の前で止まった。

「オレはこれから警察署に行く。留守番しててくれ」

彼を降ろすと、川田はそのまま行ってしまう。彼はしばらく道端に佇み、遠ざかっていくタクシーを見送ってから通信局のドアを押しした。

机の上の電話が鳴っている。急いで靴を脱いだ。だが靴を脱ぎ終わったとき、ベルが鳴り止んでしまった。

彼は未練がましく電話器に手を伸ばし、受話器を取った。回線が通じていることを知らせる信号音を聞きながら、彼は川田を所長室に案内するとき由紀がなにか話した気な目付きをしていたことを思い出した。

彼はN共火の番号を回した。だがなんとなく自分からN共火には電話してはならないような気がして、呼び出しのベルが鳴る寸前に受話器を戻してしまう。

由紀がまだ田村康平の黒い手帳を見つけていることができずにいるのだと思った。そのことを伝えたくて電話してきたにちがいない。N共火の社長執務室に見当たらないとすると、やはり田村康平は携帯していてホテルに持ち込んでいたのだろうか。

彼は迷路を辿るように、手帳の行方を想像し、追っていく。

当日は日曜だった。田村康平はN共火の本社にも建設事務所にも寄らずに、自宅から直接N市のホテルに入ったはずだ。日記のように日ごろの出来事や思い付きを書き留めている手帳なら、いつも携帯しているのが普通だ。とすると、田村康平が死んだとき、自分で破棄しないかぎり、ホテルの部屋に残されていたと考えられる。だが美紗は届けられた遺品のなかに黒い手帳だけが見当たらなかったと言う。となると、誰かがホテルの部屋から持ち出したということか。それは誰か。なんのために手帳だけを持ち去ったのか。

手帳だけを持ち去ったということは、その手帳が日記帳として利用されていることを知っていたものの仕業にちがいない。

そうなることややはり、手帳を持ち去ったのは下藤所長か。隣の机で田村康平が手帳にその日の出来事を書き込んでいるのを目撃していただろうし、あの日もホテル従業員と一緒に部屋に入っているではないか。下藤には少

なくともそのとき手帳を持ち去るチャンスがあった。

だがもしそうだととしても、なんのために手帳を持ち去ったのだろうか。下藤にはそれを持ち去るどんな動機があるのだろうか。

なぜ、この点を追及しなかったのか。彼はN共火に引き返して、もう一度下藤に問い質したいと思った。

そのとき、ふと、田村康平が評価していたと川田が言ったとき、下藤が浮かべた奇妙な表情を思い出した。疑念が残る目をした困惑したようなゆがんだ表情だった。

下藤は田村康平が自分をどう評価しているか知りたかったのか。日記を書いている田村康平を見て、一度手帳を覗いてみたい衝動に駆られたにちがいない。それ以来、手帳のことが頭に焼き付いていたからこそ、ホテルの部屋で手帳を見た拍子に持ち去る行動に出たのだろうか。

だが期待に反して手帳には彼の評価に関するような記載は一切なかったにちがいない。だから川田の指摘によって、田村康平の行為が県のシナリオに導かれた止むを得ないものであったことを知らされたとき、疑惑と困惑に襲われていたのだろうか。それが疑念と困惑の表情をもたらしたのではないか。

下藤が手帳をホテルから持ち出したとしてもいつ持ち出したのか。あのときテーブルのうえには鍵のほかになにもなかったようだったが、下藤が室内に入った瞬間に手帳に気付き、従業員の目を盗んでポケットにねじ込んだのだろうか。もしそのとき手帳がすでに室内から消えていればそのままに室内に入って手帳を取った者がいるということになる。

彼はやはり下藤が田村康平の殺害にかかわっていたにちがいないと思っただがなぜ下藤がそこまで決意したか、どうしても腑に落ちなかった。

自分が努力して折角締結にこぎ着けた協定がいとも簡単に書き換えられていったことが自分の人格まで否定されたような気がしたというが、それだけでN共火の常務で建設所長の地位にあるものがひとを殺すとはどうしても思えなかった。まして社長である田村康平を殺そうとするものだろうか。

もしかしたら、二人の間にはもつと深いわけがあったのだろうか。かといって、彼にはほかに二人の間にどんなことが隠されているか見当がつかなかった。

それゆえ、彼には川田が追及を途中で放棄したことが分からなかった。一体どんな理由があるのだろうか。あのとき、もう少し追及をつづければ、下藤はあの日のことを話しただしたのではなかったか。それなのになぜ川田は突然追及を止める気になったのか。追及を途中で止めたほうがいいと考えたのはなぜか。なにか重要なことに気付いたのか。やはり下藤のアリバイが気になるのか。あるいはなにか警察の取り調べと関係のあることなのだろうか。

彼は川田が椅子から腰を上げながらなにかぶつぶつと呟いていたことを思い出した。不意に口をついて出た感じじゃなかった。かといって、わざわざ自分自身に言い聞かせるために言ったのではあるまい。あれは誰に聞かせるために言ったのだろうか。彼に対してならあんなところで言う必要はないはずだ。下藤に向けたものなら、なぜはつきり言わなかったのか。

彼には川田の意図が読めなかった。だが川田がなにかを掴んでいると思っただ。彼はあれこれ思いを巡らす。そしてひとつのシナリオが浮かんだ。

それはこうだ。

下藤所長はあの夜、田村社長がホテルに入ったことを確かめてから、ウ

イスキートを一瓶抱えて、田村を訪ねる。そのホテルは社長がN市を訪れるときの常宿にしているところで、部屋は広いツインと決まっていた。突然の来訪に驚いたが、田村は明日の会議の打ち合わせでもあるのかと思いい、下藤所長を迎え入れる。

二人は背広の上着を脱ぎ、ネクタイを緩めて、下藤所長が持参したウイスキーを呑みだす。やがて下藤所長は酔いつぶれた振りをして、寝込んでしまう。田村は単身赴任の下藤所長をそのままベッドに寝かし、田村ももうひとつのベッドに横になる。やがて寝込む。

下藤所長は田村が眠ったのを確かめてから枕を顔に押しつけ、動かなくなつたところで、首に巻き付いているネクタイでさらに絞める。部屋にあつた針金のハンガーを壊して長く延ばし、換気口の金具に掛ける。社長を抱えて立たせ、換気口から延びた針金をネクタイの輪に通し、首を吊つて自殺したように見せかける。ウイスキー瓶やコップをそのまま、乱れたベッドのみ片づけてから部屋を出ると、ドアの鍵を掛けて、非常用の階段で外に出る。

翌朝、ホテルのエントランスからなかへ入り、ホテルのフロントで従業員に「迎えに来た」と部屋に電話させる。返事がないので、下藤所長は従業員とともに、社長の部屋を訪れ、合鍵でなかに入つて、首を吊つている社長を発見する。下藤所長は従業員に手伝わして社長を下ろしてベッドに横たえる。持ち出した鍵は従業員に気付かれないようにサイドテーブルの上に返す。

だが動機は判然としない。やはり下藤所長の田村社長に対する恨みだろうか。かといって、公害防止細目協定の亜硫酸ガス濃度を変えられたからといって殺人といった行為に出るだろうか。

彼には二人の間にもっと深い事情が隠されているような気がしてならなかった。

27

「通報者は誰です？」

川田は署長の執務机のまえに椅子を寄せると、単刀直入に尋ねる。その瞬間、署長の丸い顔が一瞬ゆがんだように感じた。警察が通報者の名前を教えるはずがないことは百も承知だった。彼は署長がどんな反応を示すか、チェックしたかっただけだった。

「通報者？ なんのことかね」

署長は机に広げた書類に目を落としたまま、とぼけている。

「田村康平殺人事件の通報者ですよ」

「おいおい、いくらなんでも殺人事件をでっち上げてはいかんよ」

署長はようやく目を上げ、机のまえの椅子の彼に目を向けた。その目はすでになんの動揺の色も浮いてなかった。だが額にうっすらと汗をかいている。

「N共火の下藤所長に会ってきたところだが、警察が第一発見者であるホテルの若い従業員を探していることを知らなかったが……、なにかわけがあるんですかね」

「……………」

「下藤所長も第一発見者でしょう。まさか、室内へ従業員の一步あとに入つて行つたから、下藤所長を第一発見者ではないと思つていられるわけでもない

んでしよう」

「そんなことはないだろうな」

「じゃ、なぜ、目の前にいる第一発見者にまずあたらないんですかね。捜査を再開するならば、下藤所長にも現場の状況を確かめるのが当然だと思うのですが……、なにか特別の事情でもあるんですか」

彼は署長の目を覗き込む。その目は静止したまま、彼をじっと見ている。彼はその瞬間すべてを悟った。警察は従業員の証言を得てから、それをもとに下藤を追い詰めようと考えているにちがいないのだ。

「やはりそうだったんですか」

「あまり捜査の邪魔をしないでくれ。いずれすべてが明らかになる」

「もうひとつ分からないことがあるんだが……」

彼は一瞬言い淀んだ。署長を怒らせては元も子もなくなる。通報があった捜査を再開したのか、それとも送電線問題が解決したから再開したのか、そのどちらかを糺したかった。だがどちらにしても警察にとって名誉なことではない。どちらにしても初動捜査が不十分だったことを意味するからだ。とにかく、彼には当初警察は捜査を手控えていたように思えてならないのだ。それはなぜか。やはり、県の陰謀だという噂と関わりがあるのだろうか。

「田村康平氏の死因に多少は疑念を持っていたんでしょね、当初から」

署長はぎょろりと目を大きく動かして、彼をじろりと見た。彼はそろそろ引き上げる潮時だと感じた。椅子を後ろに押して腰を浮かしかける。

「首吊り自殺の偽装を一人の力でできるものかね。死んだ人間はかなり重いものだ。並の人間に死体を持ち上げて、首吊りしたように偽装するそんなに力があるとは思えんのだが……、それに……」

署長は幾分弁解気味に曖昧に言う。彼には署長が初動捜査のミスを気にしているらしいことは分かったが、浮かしかけた腰を下ろし、わざと大きく頷く。

「でも田村康平氏は首を吊っていたんでしょ。目撃者がいるんじゃないですか」

「ホテルの見習い従業員と……」

「N共火の下藤所長とでしたよね」

「……そうだ」

「二人の調書も取ってあるんでしょ、発見したときの詳細な状況のついで……」

「二人とも田村康平氏が首を吊ってぶら下がっているところを見ているが、蘇生術を試みるために二人で下ろしてしまった。われわれが行ったときには遺体がベッドに寝かされていた」

「検死の結果は……」

「まあ……、とくに問題が見つからなかったが、ただ死亡時間が曖昧で、確定に手間取ったというわけだ……。それが……」

なにか隠しているような口ぶりだ。やはり当初は県の要請に反応していたのか。そしていまは下藤のアリバイが気になっているのか。だが彼は気付かないふりをしつつける。

「それで自殺と断定して、早々に発表した」

「……」

「ところで、まだ例のホテル従業員は見つからないのですかね」

この際とことん聞き出そうと、彼は用心深くつつける。

「見習い期間中にあんな目にあつたうえに、そのときの様子を何度も根掘

り葉掘り訊かれたので、もう二度と警察の取り調べはいやだと雲隠れしたらしい。でももうすぐ見つかるだろうが……」

「もう一度取り調べようというわけですか。ところで……」

彼はふとニセ情報の件を思い出したのだ。

「……………」

署長は目を大きくした。

「実は、T電力のほうに送電線に関するニセ情報が寄せられていたそうですよ。あの事件の直前のことらしいが……」

「なに？」

署長は丸い顔を向けて彼を見た。警察はまだこの情報は掴んでいないらしい。

「双方が争っている最中に、地元が二七万五〇〇〇をのむらしいという情報を誰かが流した……」

「それで……」

「T電力のほうではしばらく様子を見ることになったらしい。そうこうしているときにあの事件が起こった」

「その情報がなければ、T電力は二七万五〇〇〇を諦め、それで送電線問題が解決していたということかね。田村康平氏も死ぬことがなかった……」

……

「そういうことも考えられる」

「その情報の出所は分かったのか」

「さあ、なにしろ、T電力の送配電部長の口が堅い」

「ふむ……」

「もしかしたら……」

彼は躊躇った。だが自分でその先を調べることは難しい。この際すべてを曝け出して協力し、その見返りに警察の情報を得ようと、彼はつづける。

「……ニセ情報を送った男と今回警察に通報してきた男とは同一人物かもしれない。これらに共通することは、N共火の仕事を妨害したいらしいということだね。最初のニセ情報は明らかに送電線工事の遅延を意図したといえるし、二番目の警察への通報にしても、田村康平の死によって送電線問題が急転直下に解決したのを知って慌てて動き出している。N共火に反感を抱いているのか、その辺は分からないが、とにかく、その人物はなんとかしてN共火の仕事を遅らせたいと考えているらしい」

「だから、通報者を探れということかね」

「それは警察が考えることだ」

「M新聞は手を引くということかね」

「いや、まだまだそんなふうには思っていませんよ」

情報を与えられて、警察がどう動くか。と同時に、餌を投げられた下藤所長がどう動くか、彼は当分の間両者の動きをじつと見ていればよかった。

28

待っていた電話が掛かってきたのは、三時間後だった。由紀は人目のつかないところで会って話したいことがあると言う。

和彦は由紀の指定する公園に出向むこうとしているとき、再び電話が鳴った。

「残業で行けなくなつたわ。それから所長のところに倉多常務が訪ねてく

るらしいの、Sアルミの……」

由紀はこう言うと、彼が問いを発するまえに電話を切った。

彼はしばらく受話器をもったままでいた。ダイヤルを回そうとしたが、途中で思いとどまった。急に残業を命じられ、外に出る暇なく自席から電話をしたのにちがいないからだ。彼はゆっくり受話器を戻す。

由紀が突然会って話したいと言いだしたのはなぜか。なにを話したいのか。彼は落ち着いて机に座っていることができなかった。

壁の時計を見た。針は五時を示していた。川田がまだ戻って来ないのも気になる。なにかが起きようとしている。そんな予感がした。

一体なにか。彼は必死に探る。だが時間だけが過ぎた。彼は冷静になろうと深呼吸を試みるが、得体の知れない力が彼を急き立てるのだ。

彼は次第に混乱していった。突然、川田がなかなか警察から戻ってこないことと人目のつかないところで話したいという由紀の電話とが関係があるような気がした。

彼は由紀に電話しなかった。そしてなにを話したいのか質しなかった。彼は受話器を取ろうか迷う。もう一度大きく息を吐いた。

「おい、どうした」

川田の不審そうな目があった。

「あ、川田さん、お帰りなさい。一体、いつ帰られたのですか……、全然、気がつかなかった」

彼は慌てて立ち上がる。

「なにかあったのか」

近づいてきた川田はまだ探るような目で彼を見つめている。

「いや、べつに……。ところで警察になんの取材に行かれたのですか。な

にか特別の情報でもあったのですか。随分長かったですか……」

彼は由紀から電話があったことを告げなかった。あれはプライベートの電話かもしれないし、たとえそうでなくとも川田に話すのはもう一度電話があつてからでも遅くない。

「もう探偵まがいのことは止めようかと思ってね」

しばらく間を置いて、川田が藪から棒に言う。

「え？ 下藤所長が怪しいというのに、みすみす見逃すのですか」

「警察がふたたび動き出した以上、もう警察の仕事だ。われわれは十分役割を果たしたということだ。そうそう、こちらの情報も提供してきた。警察がじっくり調査してくれるだろう。それに下藤所長にはアリバイがあるようだし……」

「アリバイ……」

彼は川田の目を覗き込んだ。なぜ急にこんなことを言いだすのか、どうしても理解できなかった。彼には川田がなにかを企んでいるようにしか思えない。それはなにか。なぜそれを隠そうとするのか。

「とにかく……」

川田は彼の鋭い視線に目を伏せ、ぼそぼそとつづける。

「……送電線の二セ情報の発信人は誰か。警察へ通報したのは誰か。両者は同一人か。もし同一人だとすると、それは誰だ。あの事件に関わっているのが下藤所長だけだったら簡単だが、ほかに誰かが関わっているとなるとややこしいことになる。もし地元の反対派が関与しておれば、なおさら問題だ。もうこの辺で警察にバトンタッチしたほうが無難だ。なにが起るか分からない」

「本当にそう考えておられるのですか」

「なんだ……、なにを疑っているんだ」

「川田さんは警察に任せると言われるが、それは嘘でしょう。むしろ、なんとか利用しようとしているんじゃないんですか。たしかに田村康平氏の死亡推定時間に下藤所長は小料理屋でマージャンをしていた。だから単純に考えれば彼のアリバイが成立するとも言えるかも知れませんが、状況から見ると、下藤所長はこの事件に大きく関わっているキーパーソンにちがいないと思いますよ。それに死亡推定時間にはかなりに幅があるし、マージャンをしていた連中の言っていることが正確かどうか……」

「……………」

川田は黙ったまま、目を剥く。

「われわれの力の及ばないところがあることは認めます。でも最後までやり抜く主義じゃないんですか」

「できればそうしたいところだが……、ここでヘタに動く『大山鳴動ネズミ一匹』になりかねない。確かに、下藤所長が事件に一枚噛んでいることは間違いないだろう。だが背後になにかが隠されているようだ。それを明らかにせずに、下藤所長一人を追い詰めると、彼の行為だけが浮き彫りにされて、背後に隠れているものを逃してしまうおそれがある。はっきり言うと、下藤所長の背後にいるもつと悪いやつが生き残ることになりかねないのだ。だから、これ以上下藤所長を追い詰めずに、当分彼を泳がせて様子を見ることにしたい。そのうち、きつと動く」

「うむ……」

彼はあの日強引に連れ出した若い見習従業員が「人影を見た」と言っていたことを思い浮かべた。いままで下藤所長の追及に気を奪われ、忘れかけていたのだ。下藤所長は単なる実行犯に過ぎないのかもしれない。

「それに警察が二人いる第一発見者のうち、一方のホテル従業員のみを追跡しながら、もう一方の下藤所長にタッチしようとするのは警察が彼を疑っているということだろう。この点を確かめるために取材に行ってきたのだが、確答はえられなかった。だが、彼がホシだという通報があったらしいことは確かだな」

川田はつぶつて、警察において、送電線の二セ情報の件を話し、密告してきた通報者が怪しいことを指摘してきた、という。そして当方にこれといった証拠がない以上、しばらく様子を見ることにしたほうがいいのだと加えた。

「はつきり言って下さい。川田さん、やはり県の陰謀ということですか。これを暴くのが目的ですか」

彼はなんとなく、川田の関心が田村康平殺しの下手人探しよりも、その背後で動いている大きな力に移っていることを感じた。それはなにか。彼はもう一度N新港プロジェクトを振り返る。

G県がN新港開発構想を打ち出した同じ年に国会で数多くの公害立法がなされ、全国的に公害規制が強化された。だが県はこのような状況を省みることなく、問題の多い従来型の旧いコンビナート方式の開発を指向し、重厚長大タイプの企業誘致をはかる。これは工場からの公害規制の強化傾向に逆らい、地元住民の健康を無視した無謀な計画だった。

高度成長期が終わりを迎えた四十六年、T電力とS金属の誘致が決まる。四十八年、S金属は二月にSアルミ（S金属のダミー会社）を、T電力は四月にN共火（T電力とSアルミのダミー会社）をそれぞれ設立し、N新港地区にアルミ工場と火力発電所の建設準備がはじまる。

半年後、突如オイルショック（第一次石油危機）が世界を襲い、石油価

格が四倍に急騰する。日本経済はパニックに陥り、景気が一挙に後退する。

Sアルミは景気後退と電力コストの急騰を理由に計画変更を計り、当面は四万五千トン規模の電解工場のみ建設となる。しかるにN共火は計画どおりの規模で発電所の建設を進める。

「そうか、Sアルミは早々に撤退したいと思いはじめていたのだ。オイルショック以来その機を虎視眈々と狙っていたにちがいない。それならどうしてオイルショックのときに撤退しなかったのか」

彼は川田の視線を意識しながら、誰ということなく呟く。彼にはN新港プロジェクトがまるでなんの見通しもなく荒海に乗り出した小舟のように見えた。小舟は突如襲ってきた大波に舵を奪い取られ、水浸しになって荒波に揉まれる泥舟だったのだ。

それにしてもオイルショックで石油価格が四倍に跳ね上がったとき、Sアルミはなぜ計画を取り止めようとしなかったのだろうか。石油価格の急騰によって石油を燃料とする火力発電の発電コストが高騰すれば、アルミニウムの生産コストも上がり、国際競争力を失うことは目に見えていたはずだ。それにもかかわらず、なぜN共火は燃料を変えることなく石油を燃料とする火力発電所建設計画を推し進めていた。なぜSアルミはそれを傍観し、SアルミとN共火が共に着工へと進んでいったのか。

それにしてもN新港開発とはなんだったのか。白砂青松の砂浜を削って巨大な港湾を造り、何十万本もの松を根こそぎにし、漁師から海を取り上げ、農地から農民を追い出して造った工場用地にようやく誘致した企業が早々と撤退しようとしているのだ。

そのとき、突然脳裏にあることが閃いた。同時に、由紀が電話で話していたことを思い出した。

「川田さん、今夜、倉多常務がN共火に下藤所長を訪ねてくることになっているそうですよ」

彼は大声で言った。

第四章

29

退社時間が迫って、由紀はそろそろ帰り支度を始めようとしたときだった。課長の机の直通電話が鳴った。

「木村くん、一寸残業して欲しいんだ。直ぐ帰るから待っていてくれ」

課長は一方的に短く言っただけだった。返事する間もなかった。

和彦と会う約束をしたところだったので、今日だけは残業をしたくなかった。できたら明朝にしてほしかった。だが出先の課長とは連絡が取れそうになかった。もし取れてもどう言いだしていいのか迷ってしまう。彼女は窓を背にして一番奥まったところにある課長の机を目をやり、早く戻ってくることを祈った。だが三十分過ぎても戻らなかった。

彼女は諦めて、和彦に電話を入れた。そのまま机で仕事をするふりをして同僚が帰っていくのを見送った。

退社時間が過ぎると、事務所内は急に静まり返った。風が通る音がして、遠くから海鳴りが響く。

彼女は廊下に出た。課長が戻って来ないかと階段を覗く。

背の低いひとりの男が急ぎ足で階段を上って所長室に入っていくところだった。

手持ちぶたさの彼女は呼ばれる前にいつもの客用のお茶を用意し、軽くノックして所長室に入っていく。

所長の執務机のまえの応接セットで、所長ともうひとりの男が驚いた顔

をして彼女を振り返る。倉多常務だった。

お茶を出すと、彼女は所長の執務机にまわり、空の湯飲み茶わんを片づける。机の上の書類が崩れ、インターホンのスイッチに触れた。スイッチが入ったようだったが、背後から二人の強い視線を感じて、彼女は急いで机を離れ、所長室を出た。

彼女が所属している総務課の部屋は所長室と壁を隔てた隣にあるが、廊下に面したそれぞれのドアは数メートル離れている。彼女は廊下を急ぎ足で部屋に戻る。

課長はまだ戻っていなかった。課長の机から少し離してスチール机が四つ向かい合わせて田の字に置いてある。人影はなかった。誰もいない部屋はがらんとしていつもよりも大きく見えた。

部屋の片隅にカーテンで仕切って設けられた小さな流しの洗い桶に茶わんを入れると、彼女はドアに近い自分の席で動悸が静まるのを待った。それから課長の机に近づき、卓上インターホンのスイッチを押した。

小さなスピーカーから押し殺した男の声が洩れてくる。

「一体どういうつもりなんだ」

所長の声だ。低いが怒気の含んでいる。

「なんのことだ」

聞きなれない声だ。倉多常務か。

やはり、お茶を出したときインターホンのスイッチが入っていたのだ。

彼女は下藤所長と向かい合って座っている男の顔を思い浮かべた。ボリュームを大きくして耳をスピーカーに寄せ、辺りを見回す。

課長の袖機の引きだしからテープレコーダーを取り出した。そして手早く録音をセットする。

そのとき、ドアが少し開いた。彼女はテープレコーダーを持って、机の下に潜った。隙間から覗くと、ズボンの裾と黒い靴が見えた。ドアのところで中を窺っている様子だ。

「送電線の二セ情報は貴様が送り付けたんだろ」

スピーカーから洩れてくる所長の声だ。彼女は手を伸ばし、テープレコーダーをスピーカーに近付ける。

「送電線？ なんのことだ」

「しらつぱくれるな、全部分かっているんだ」

「……………」

しばらく沈黙がつづいた。黒い靴が部屋のなかに入った。もうひとつの別の靴がつづく。四つの靴が近付いてくる。

彼女はテープレコーダーをスピーカーの近くに残したまま机の下で身を細める。二人はスピーカーからもれる声に耳を澄ましているのか、課長の机の前にしばらく佇んでいる。

「警察に密告したのも貴様の仕業だろ」

「なんのことだ。アホか」

「よくもおれを陥れたな」

「なにを言ってるんだ。お前こそ俺を騙しつづけていたんだ。電調審以来、寄ってたかって俺を騙していたんや、お前らが。鈍間のお前らに騙されたんや、俺は。全くどうかしている」

「なに、俺たちが騙したと…………。一体なにを騙したというんだ」

「お前らはT電力と県とグルになつて調子のいいことをほぎきやがって…………。それを信じて付いて行ったのに、それをつぎつぎに反故にしていた」「なにを言っている。こつちも同じことだ。時代が急に変わってしまった

んだ。これを全然予想できなかったほうこそバカだ」

「時代が変わったと？ 鈍間だと安心していたのが間違いのもどだった。ここで上手いことやれると思っていたのに…………」

「二セ情報を送り付けておきながら、なぜ俺にあんなことをけしかけたんだ」

「なにをけしかけたと言うんだ。言いがかりは止せ」

「『今がチャンスだ。続投が決まっていたいま、田村康平を亡きものにすれば、お前が次期社長になれる』と言ったじゃないか」

「そんなこと、知るか」

「……………」

「よしんばそんなことを俺が言ったとしてもだな、一人前の大人がそんなことを真に受けるか、アホ」

「なんだと…………」

「いい年をして冗談も分からなのか」

「誤魔化すな。なぜ警察に密告したんだ」

「さあね、きつと正義感の旺盛な奴のちがうか、そいつは」

「正義感が旺盛？ 密告するような卑劣漢がなんで正義漢なんだ」

「お前は本当にアホだ。俺たちはまんまとT電力と県に一杯喰わされたんだ。このN新港プロジェクトをなになんでも進めたい県の奴等は、俺たちを騙すことなんぞなんとも思っていない。俺たちを後戻りできないところまで調子よく追い込んでしまうと、誘致条件を一方的に厳しいものに置き換えてくる。これでは煽り立てて二階に上げておきながら、梯を取るようなもんだ。全く始末が悪い。鈍重で頓馬の癖に遣ることが狡い。T電力にしても発電所をつくることができればそれでよかつたんだ。俺たちを

追い出せば、N共火の発電所がまるまる自分のものにできるということだ。だが簡単に筋書き通りにさせるわけにはいかないのだ。T電力にはN共火の発電所をできるだけ高く売り付けるのだ。手段を選ばずにな」

「……………」
「オイルショックのときに手を引こうと思っていたら、お前に泣き付かれるし、県は公害防止規制を甘くするといって気を引き、その気になると、今度は住民側の言いなりになって規制を強化して憚らない。これも時勢上いたしかねないかもしれないが、人殺しを抑え込んでまでプロジェクトを押し進めようとは言語道断だ」

「どういうことだ」
「俺は確かにニセ情報を送ったさ。ここでの投資はオイルショックできさぎの見通しが真つ暗になってしまったから、わが社はすぐにも撤退したかったんだ。だがここで一方的に撤退して身勝手な企業と烙印を押されては今後の立地に影響をおよぼす。だから次善の選択肢として、可能なかぎり計画規模を縮小して、そのうえ、操業開始をできるだけさきに延ばしたかったのだ。そしていずれ完全撤退する。ニセ情報はそれを意図したものだ……」

「俺にけしかけたこともそれと同じ目的だな」
「投資した分を高く回収するためにな。ところが、県は県警に働き掛け、これを逆に利用して懸案の送電線問題をさつさと片づけてしまった。予期に反してとはこのことだ。全くやるのが狡い」

「それで今度は密告したというわけか。裏切者め……」
「なにが裏切者だ。そんなことは俺と一切関係ないことだ。懸案がすべて解決しているんだぞ。いまさら蒸し返したところでこのプロジェクトを中

止することも、見直すことにもならないではないか」

「じゃ、なぜ警察が動き出したのか」
「県警がころ合いだと判断して本署に合図を送ったのだろう。俺がブンヤだったら、警察の動きを追うよりもこんな県や県警の動きを暴きたてるがね」

「俺はどうなるんだ……」

「自分で考えるんだな。俺を巻き込むのは止せ」

「こうなったのは貴様のせいだ。貴様があんなことを言っつけてしかけたからだ」

「よしてくれ、まだ子供みたいなことを言う。あれは……」

「逃げる気か。あれは貴様が指示したようなものだ」

「おいおい、全く、子供じゃあるまいし……」

「無責任なことを言うんじゃない」

「黙っていれば分からないことだ」

「警察と……」

「なにも心配することはない。決め手となる証拠はないんだから、おたおたするな。俺はもう帰る……」

そのとき、微かにものが落ちたような音がした。

「おい、いまの音はなんだ……」

「……………」

「インターホーンのスイッチが入っているじゃないか……」

「え？」

廊下のほうから走る足音が近づいてくる。机の前から黒い靴が消えた。彼女は急いで床に落ちたテープレコーダーを手に取ると、課長の机の下

から這い出て、隣の机の下に潜り込む。

開いたままのドアのところで足音が止まった。

彼女は机の下からドアのほうを覗く。二人連れの黒い靴は消え、グレイのズボン裾と赤茶色の革靴が見えた。だがドアのところで立ち止まったまま、部屋のなかに足を踏み入れようとしなない。

そのとき、別の足音がした。

「所長、なにかご用ですか」

課長の声だった。

「ああ、きみは……」

「いま市役所から戻ったところですが……」

「席にはいなかったの」

「はい、午後から出掛けておりましたので……、なにか……」

「なんでもない。ほかの連中は……」

「もう帰ったでしょう。今日はとくに用事がなかったので……」

「そうか、じゃ」

「失礼します」

隙間から覗くと、ドアのところまで所長を見送っている課長の後ろ姿が見えた。彼女は四つ這いになって素早く机の陰を移動し、流しのカーテンのなかに身を隠した。

課長は部屋のほうに向きを変え、机に向かって動き出す。机の上に書類の入った封筒を放り出したような音がした。それから椅子が動いて腰を下ろすような音がづく。

彼女は身を固くしてじつと息を殺した。

しばらくすると、課長は足早に部屋を出ていった。課長の足音が遠のい

ていく。

彼女は自席に戻り、テープレコーダーからカセットテープを取りだしてバッグに隠す。それから課長の机に走り寄り、テープレコーダーをもとに戻した。

そのとき奥の机の陰から二人の男が顔を出した。

「あつ、森野さん……」

「そのテープを警察の署長に……、早く」

足音が近づいてきた。二人の男は素早く身を伏せた。

「課長さん、お帰りなさい」

彼女はよれよれのハンケチで手を拭きながら戻ってきた課長に笑顔を向ける。

「なんだ、まだ居たのか」

「残業があると電話で……」

「あ、いけない、ごめん、ごめん。もっと早く帰るつもりだったが……、今日はもういいよ、遅いから」

「いいんですか」

いつもなら遅くなってもいいと言うところだが、今日は早く部屋から出たかった。

「明日、一番でやってくれば間に合うだろう。十時からの定例会議用に資料をセットして欲しいんだ。資料の原本を机の上に置いとくから、コピーを二十五部用意しておいてくれ。誰かに手伝ってもらえば、一時間もあればできるだろう」

「早めに来てやりますから」

彼女は所長室に出したままになっている茶わんが気になった。一瞬、片

づけて帰ろうと想ったが、思い直してそのまま帰り支度を始めた。バッグをうえから触ってテープが入っていることを確かめ、廊下に出た。

まだ所長室に明かりが点いている。彼女は急ぎ足で通り抜けようとした。走り出したとき、ドアが開いて、男が顔を出した。倉多常務だった。避けようと身体をねじった拍子に足がもつれて勢いよく転んだ。

バッグから裸のカセットテープが飛びだした。

「おう、危ない、ケガはないかね」

倉多はバッグを拾い、それから床のカセットテープに手を伸ばしす。しばらく倉多は怪訝な顔をして手にしたカセットテープを見ている。

彼女は急いで立ち上がると、礼を言つてバッグを受け取った。カセットテープも倉多の手から奪うように取り戻す。

「どうした」

所長が廊下に出てきて声を掛けた。

「すみません、ありがとうございます」

彼女はバッグにテープを放り込むと「最終が出ますので」と言つて、痛めた足を引きずりながら走り出した。

駅と建設事務所間に従業員用の連絡バスが就業時間に合わせ、出勤時と終業時に何便か用意されていた。最終便は七時丁度に出る。

玄関横の通用口の扉を押したとき、バスが動きだした。彼女は手を上げ、運転手に合図する。バスは少し行きかけて止まった。彼女は小走りで開いた乗車ドアから車内にもぐり込んだ。

顔見知りの中年の運転手が振り返つて「残業かね」と言った。彼女は曖昧な笑いを浮かべて挨拶を交わす。

バスには数人しか乗っていなかった。彼女は空いている席に目もくれず

に、一番奥の座席に向かった。誰かが追ってくるような気がした。席に着くと彼女は身を隠すように窓際に寄り、後ろを振り返った。

通用口の灯のした黒い人影が現れ、バスを追いかけて走り出すのが小さく見えた。

30

「村山くん、あの子はなぜ居残っていたのかね」

下藤所長は騒ぎを聞きつけて廊下に飛び出してきた総務課長に尋ねた。彼の声は上擦り、詰問調だった。

「わたしが残業を命じたので……」

村山は大柄な身体を小さくし、不安げな目で所長を見上げている。

「きみは市役所から帰ってきたばかりじゃなかったのかね」

「そうですが、彼女には電話で連絡していたのです。明日の会議用資料を……」

「ふむ……」

所長室から小柄だが肩幅の張った男が顔を出した。

「ああ、倉多常務さんでしたか。うちの事務のものが失礼したようで……、お怪我はございませんか」

「あの子連れ戻して来てきてくれないか、さあ、早く」

「はあ？」

「いいから早く連れ戻すのだ」

村山は背を丸めて走り出す。

「一体どうしたんだ」

彼は棒立ちになって後姿を見送っている倉多に目を向ける。なにが起きたのか。彼には見当がつかなかった。

「テープを持っていた……」

「テープ？　なんだ、それは……」

「われわれの話が録音されていたらしい」

「え？」

彼はなにが起きたのか、まだ十分飲み込めなかった。

「お前がやらせたんじゃないだろうな」

倉多は鋭い目をしている。

「なんだって？」

「俺を巻き込みたがっているお前ならやりそうなことだからな」

「なにを言うか」

「じゃ、どうしてインターホンのスイッチが入っていたんだ。お前が入っていたんだろう」

「馬鹿言うな」

彼はようやくよくことの重大さに気付く。彼は金縛りに遭ったように全身が硬く凍りついていくのを感じた。あの小娘が話を盗み聞きしていたとは、そのうえテープに録っていたとは……。

「それ、本当か」

「あの子がくれば分かる。テープを持っていたからな」

階段を上る足音がした。総務課長だった。

「おい、どうだった」

彼は所長室のまえの廊下に突っ立ったままだった。

「バスが出た後でした。なにか木村にご用でしたか」

村山は禿げ上がった額の汗を手の甲で拭いた。

「追いかけて行って、バスから降りるまえに捕まえて連れてくることのできないかな……」

倉多が横から口を出した。

「それはとても無理です。彼女の家は駅の途中ですから追いつくことは……」

……

「村山くん、車で追いかけてみてくれないか」

「はあ……」

「さあ、早く追いかけてみてくれ」

彼の声には有無を言わさない響きがあった。

村山は門を出ると、急いでハンドルを右に切った。Sアルミの敷地の横を走る直線の道路にはバスのテールランプもバスが走った痕跡もなにひとつなかった。交差点で彼は車を徐行させた。新道を行って先回りするか、バスの正規のルートである旧道を行って追いかけるか、一瞬迷う。彼はハンドルを右に切って新道に入った。

駅の駐車場に車を止めると、村山は通りに出て連絡バスを待った。バスはすぐやって来た。

「うちの木村くんが乗っていないかったかね」

「あ、課長、どうかしたんですか」

彼はもう一度同じことを運転手に尋ねた。

「彼女ですか、その交差点で降ろしました」

「なんだって、家に真つすぐ帰らなかったのか」

村山は急いで車に戻ると、運転手から聞いた交差点に向かい、右にハンドルを切り、小路に入った。彼はまわりを見ながら、暗い小路をゆつくり走った。どこにも彼女の姿はなかった。人影すらなかった。

「なんだと、まだ家にも帰っていないというのか」

下藤は椅子から立ち上がり、一瞬われを忘れて叫んだ。

「一体、どこへ消えたんだ」

倉多が呟く。

「駅の手前の交差点で下車したそうですが……」

「本当か、もしかしたら川田のところか」

「M新聞？」

下藤と倉多が顔を見合わせた。

「木村がなにか始末を仕出かしたんでしょか」

課長は不審の色が浮べた目で倉多を窺い、恐る恐る尋ねる。

「あの子に聞きたいことがあったんだが、もういいよ。ご苦労さん」

彼は課長の背を押し部屋の外に送りだす。椅子の戻ると、向かい合って

座っていた倉多の顔を真つ正面からじつと見た。

ふと課長が廊下で聞き耳を立てているような気がした。

「外に出て話そう」

彼が所長室を出ると、倉多は黙って付いてきた。

廊下で村山とすれ違った。村山はなにか言ったが、彼はなにも応えず、

そのまま渡り廊下を通り抜け、隣接するタービン室の重い扉を押しした。

床一面に鋼鉄の頑丈な格子板を敷き詰めた巨大な体育館のような建物には煌々と灯が点され、ほぼ中央に三十五キロワットの発電用タービンの備

え付けを待っているコンクリートの台座が剥き出しのままぼつんとあった。

十数メートルもあろうと思われる高い天井には前後左右に移動するクレーンが据え付けられ、鉄の塊のようなフックがぶら下がっている。タービン台座の横を通り抜け、さらに奥の渡り廊下に入っていく。

「おい、どこへ行く」

後ろの倉多だ。

「ボイラー建屋の屋上に行こう」

「屋上？」

倉多が大声で聞き返す。

「あそこなら大声出しても誰にも聞かれずにすむ」

彼も大声で怒鳴り返すように言う。

彼は壁際の作業用のエレベーターに近づき、ボタンを押した。大きな音を立てて鉄の扉が一杯に開く。

彼は一瞬躊躇いを見せた倉多の肩に手をかけ、有無を言わず、大きな鉄の箱のようなエレベーターに押し込む。ドラム缶を叩くような音を立てて扉が閉じると、鉄の箱はゆつくり動き出す。彼は倉多の視線を無視して真つ正面を向いたまま、閉じたばかりの鉄の扉を見ていた。

3 1

「あ、課長さん、所長はいらしゃいませんかね」

川田はなにげない振りをして、突然姿を現した村山に声をかける。

倉多常務が下藤所長に会いに来ることを知って、彼は和彦と連れ立ち、

N共火を訪ねたところだった。そして由紀を探して誰もいない総務課にもぐり込んでいたのだ。

課長が戻らないうちに退去するつもりだったが、まごまごしているうちに課長と鉢合わせとなったのだ。彼のそばには罰悪そうな顔の和彦が立っている。

「……………」

なぜ室内に二人の男がいるか理解できないのか、村山はしばらくドアのところに驚いた顔で突っ立っている。

「受付に誰もいなかったんで、失礼しました。所長さんから電話を頂いたもので……。来客中のようなので、ここで待たせてもらっていたのですよ」

村山の厳しい目に、彼は言い訳がましく付け加える。

「……………」

それでも村山は返事もせずに、見慣れないもうひとりの若い男をじろじろ見ている。

「この男は今度応援に来たうちの新規記者の森野和彦ですよ」

和彦も会釈する。

「ところで、そちらにうちの木村くんが訪ねて行きませんでしたか」

村山は若い男を無視するように、急に話題を変えた。

「木村？」

「受付の……………」

村山はまだ半信半疑の目だ。

「あ、木村由紀さんね、どうしましたか」

「いや、一寸……………」と村山は言い淀み、額の汗を拭きながら、「所長は部屋にいませんが……………」という。

「倉多さんいませんか」

彼はかまをかける。

「倉多常務がいらしていることをどうして……………」

村山は黙ってしばらく彼の顔を見てから、言った。

「下藤所長さんが電話で……………」

「あ、そうでしたか……………」失礼しました」

村山はようやく納得したような顔付きになった。そして二人は部屋を出て、屋上に行つたらしいと言う。

「課長さん、二人は本当に屋上に行つたのですか」

彼は和彦と顔を見合わせ、大きく頷く。

「多分……………」先程エレベーターの音がしたようでしたから……………」

「いま頃、屋上になにをしに出掛けたと思いますか。おかしいでしょう。」

早く行かないととんでもないことになる。案内してください」

「多分、ボイラー建屋の屋上だと思う」

二人に促され、村山は懐中電灯を持って走り出した。彼と和彦はあとを追っていく。

屋上には季節風なごりの冷たい強い風が吹いていた。建設中の屋上一面に格子目の鋼板が敷き詰められ、そのうえに板を置いた作業用通路がつくられている。

二人は身をこごめ、課長の後についていく。下から照明の光が透けて見える鋼板の通路を恐る恐る遅れがちになりながら一巡したが、どこにも人影はなかった。

「二号機のほうかな」

村山は工食用照明の光の中に立ち、遅れた二人を待ちながら、独り言のように呟く。

「おい、そこでなにをしている」

突然、暗闇から声がした。

身体を硬直させ立ちつくしている村山のまえに、闇から一メートルほどの角材を持った黒い影が現れた。二人は急いで暗闇に身を隠す。村山は懐中電灯をかざした。

「あ、所長……」

懐中電灯の光のなかに目を釣り上げた下藤の青白い顔が浮かんだ。背後の闇に前のめりに倒れ込んでいる人影があった。

「俺をつけてきたのか。話を聞いていたのだな。倉多と一緒にここから飛び降りてもらうか」

下藤は棒を振り上げてじりじりと近づいてくる。村山は手すりに沿って後ずさりしていくが、ついにヘンス際に追い詰められる。

「下藤所長、やめたまえ」

川田が叫んだ。突然の大声にひるんだすきに和彦が飛び込み、足をめがけてタックルする。下藤は勢いよく仰向けに倒れ、後頭部をしたたか打つた。

下藤は意識を失い、金網の床のうえに長々とのびている。暗闇には頭から血を流している倉多が蹲っていた。

「取り敢えず、下に降ろそう。そのうちパトカーが来るだろう」

村山はパトカーと聞いて驚いて彼の顔をしばらく見ていたが、観念したのか指示に従った。

和彦に腕を取られた下藤は意識を取り戻したものの、まだ完全でないの

か、それとも抵抗を諦めたのか、腕を和彦の肩にかけ、自分の足でよたよたと歩きだした。彼と村山は倉多の腕を取り、肩にかかえて引きずっていく。

倉多をソファに横たえ、下藤を横の椅子に座らせると、彼は村山に救急車を呼ぶように指示した。

彼は虚ろな目で倉多を見ている下藤のまえに椅子をもっていき真正面に向かい合った。下藤ははじめて彼に気付いたような目をしてじろじろ見つけた。そしてやおら椅子から立ち上がろうとした。後ろで和彦が素早く両手で下藤の両肩を抑え、座らせる。

「下藤さん、話してくれませんか、どうしてこんなことになったのか」

下藤は彼から視線を外して口を開こうとしない。

救急車のサイレンが近づいてきた。

担架を抱えた救急隊員が二人、村山に誘導されて所長室に入ってきた。

一人がすぐソファの怪我人頭髪を分け、血が流れている頭部の怪我の状態を調べる。

「あ、耳殻が欠けている……」

「耳の小片が落ちていなかったですかね」

もうひとりの隊員が尋ねる。

「あ、これは古い傷かもしれない。担架を……、病院に運びますから」

村山が担架の後を追う。

「下藤さん、どうして倉多常務を殴ったのですか。話してくれませんか」

彼は村山の姿が見えなくなるのを待って、口を切る。

「……………」

「あなたは殴って意識を失った倉多常務を屋上から突き落とそうとした。

それに村山課長までをも道連れにしようとした」

「奴は死んで当然だ。どうせ……」

下藤は相変わらず視線を宙に浮かせたまま呟く。彼はじつと下藤を見つめ、口を開くのを待った。

32

突然、由紀が現れた。ドアのところまで所長がいることに気付くと、踵を返した。和彦が目ざとく見つけて、あとを追った。

「どうしたの」

振り返った由紀の目に涙が溢れた。

「テープが……ダメだったの」

「テープがどうした」

「うまく録音できていなかったようなの」

「え？　じゃ、ダメか」

彼が呟くように言ったとき、後ろからひとが近づいてきた。

「木村くんじゃないか、探していたんだよ」

振り向くと、いつ戻ってきたのか、村山が小走りに近づいてきた。

「あ、課長だわ」

「木村くん、一緒にきてくれないか」

由紀が彼を振り返る。

「待ってくれ、どこに行くんだ」

彼が叫ぶ。

「木村くん、所長が探している」

村山は彼を無視して由紀をせき立てる。

「きみ、テープ持っている」

「……はい、……持っていますか……」

由紀は彼にちらつと視線を走らせ、吃るように応える。

「そのテープは……」

「友達にダビングを頼まれたのですが……」

由紀はことさら不可解そうな表情を浮かべて課長を見つめる。

「所長はまだいるんでしょう」

村山は彼に向かって言い、二人を所長室へ誘う。

「所長、木村くんを連れてきました」

救急車についていったはずの村山を見て、下藤は驚きの表情をあらわにした。

「課長からわたしを探していると聞きましたので戻って参りましたが、何かご用でしょうか」

由紀が課長の陰から所長の前に出た。

「それでテープは？」

下藤は村山に向かって言う。

「べつに問題はなさそうですが……、木村くん、テープを出しなさい」

由紀は黙って、バッグからカセットテープを取り出した。

下藤は由紀の手から奪うようにカセットテープを取ると、しばらくしげしげと見ていた。

「これがあのときのテープかね」

「あのとき？　なんのことでしょうか」

由紀は聞き返す。

「うむ、あのとき……転んだ拍子に落としたテープ……」

「はい、そうですか……」

「そう、じゃ、いいよ、帰っても」

下藤は黙って見守っている川田と彼にちらりと視線を走らせる。カセットをポケットに仕舞うと、村山を手招きして「きみも帰っていい。木村くんを送っていきませえ。今夜のことは内間に、いいね」と耳打ちした。

「ではお先に失礼します。あ、それから倉多常務は中央病院に搬送されました」

村山も小声で応えると、背を見せて逃げるように急いで出ていった。

33

「なにも話すことはもうない。倉多は自分で転んで頭を打ったんだ」

由紀と村山が帰って行ったのを確かめると、下藤は川田に挑むような目を向ける。

「そうですかね。じゃ、角材を振り上げて課長を追い詰めていたのは一体誰ですかね、あなたじゃなかったんですか」

「そんなことは知らん」

「それじゃ、いま女子職員から受け取ったテープはなんですか。なにが録音されているのですか」

彼は矢継ぎ早に攻め立てる。

「関係ないことだ」

「それは倉多氏とのやり取りを録音したもののじゃないですかね」

下藤は一瞬ぎくつとした。彼は瞬間の変化を見逃さず、空かさず切り込む。

「……………」

下藤は下唇を噛んだまま口を開こうとない。

「下藤さん、あなたは倉多氏が密告したと思っっているのでしょうか」

彼はかまを掛け、下藤の目を覗く。

「密告？ なんのことですか。倉多がどこへなにを密告したと言っているのか」

「あなたがあくまで白を切るならばつきり言いましょうか。いいですか。

倉多常務が警察へ『田村康平社長を殺したのは下藤所長だ』と通報したというのですよ」

「な、なにを証拠に……」

下藤の顔色が次第に青ざめていく。

「なぜそんなことになったんですか」

彼は慎重に言葉を選ぶ。いたずらに責めて反発を招くことは避けたかった。それに田村康平が死亡したところ、下藤は行き付けの小料理屋にいたらしい。となれば、彼にこのまま沈黙されてはそれまでになつてしまうおそれがあった。警察もアリバイがあると考えているから、いまもつて下藤に手を出せずにいるにちがいない。

いま下藤を追及して自白させたところでこれを裏付ける決め手を欠いている。それにテープは下藤の手にある。彼を無理やり追い込むとその背後にあるものが消えてしまうおそれがあるのだ。

口を固く閉ざして問いかけに一切応えようとしない下藤を見守っている

とき、彼の脳裏に一瞬全く正反対の考えが閃いた。もしかしたら警察はアリバイがあることを逆に利用して、田村康平が自殺したのだということ裏付けようとしているのではないだろうか。警察が動き出しているのは自殺に疑いの目を向けているからではなく、逆にこれを確固たるものにしようとしているからではないのか。目撃者であるホテル従業員を探しているのもそのための用意ではないのか。だから下藤に接触しようとしないうし、その必要もないというわけか。

もしそうであればすべてが終わりだ。そうさせないためにはここで徹底的に下藤を追及して、すべてを吐かせてしまわなければならないか。

彼は迷いながら、下藤の口を固く閉ざしている薄い唇をじつと見た。

長い沈黙が続いた。

どうやって薄い唇を開かせようかと思案しているとき、とうとうしびれを切らしたのか、和彦が彼の目の前に開いた手帳を差し出した。そこには和彦の大きな字で『録音は失敗。テープは空っぽ。警察は来ない』と書いてある。

「下藤さん、あのとき、倉多氏と一緒にあなたも屋上から飛び降りようとしたんじゃないんですか」

彼は作戦を変える。

「……………」

下藤は目を剥いてちらりと彼に視線を走らせる。だがそれきりなにも応えようとしなかった。

「田村康平氏が亡くなったのは四時から六時の間らしい。そのころあなたはどこにいたのですか」

彼は賭けに出る。

「俺が社長を殺したとでもいうのか」

下藤の目が落ち着きなく動いている。

「あなたはあの夜、小料理屋でマージャンをしていたそうですね。明け方までマージャンしていたのですか」

「四時過ぎまで……、いや、五時近くまでかな」

下藤は急いで田村康平の死亡時間に合わせるように訂正した。

「それからホテルへ迎えにいくまでどこにいたのですか。確か、六時半頃だったでしたよね、ホテルに着いたのは」

「……………」

「この点がつきりすれば田村康平氏を殺した犯人は別にいることになる」

彼は謎を掛けるように顔を近づけ、じつと下藤の目を覗き込む。彼の視線を避けるように、下藤は必死に目をそむけた。

彼はしばらく同じ姿勢を続けていたが、下藤から目を離し、おもむろに立ち上がった。

「そろそろ失礼しようか。あとは警察の仕事だ。倉多氏もそのうち意識を取り戻すだろうし……。そうなればすべては明らかになるだろう」

彼は和彦を振り返って言った。

3 4

「なぜもつと追及しなかったのですか、もう少しで白状させることができただけではないですか。いまからでも遅くないですよ、戻りましょう」

タクシーを待つ間、エントランスホールを所在なく歩き回る川田を追

かけて和彦は言った。彼には川田が急に席を立ったことが理解できなかった。

「下藤所長は応えなかったけど、あの時間女将と一緒にだったんだ。だから、田村康平氏の死亡時間が四時から六時の間だとすると、下藤所長は社長を殺していないことになるのだ。そこを崩さないかぎり警察は動かない」

川田は歩きながら応える。

「じゃ、犯人は別に……」

「彼は無関係じゃないだろう。だがもしあの死亡時間の推定に誤りがなければ、手助けしたものが他にいるか、それとも……」

「じわじわと効く毒薬を使ったとか……」

「そうじゃない。やはり田村康平氏の死は自殺ということになりかねないのだ。県や警察の思惑通りにな」

「そんなことが……」

彼には川田がなにを考えているのか、分からなくなってきた。

「……許されるのですか。警察はなにがなんでも田村康平氏の死を自殺だとしたいということですか」

彼は腹立たし気に言う。

「一度そう断定したんだから、強いて覆すことはせず、できたらそのままにしておきたいだろう。警察の体面はともかく、少なくとも県としてはそうあつて欲しいと願っているだろうな。とにかく、これ以上N新港プロジェクトに支障が出ることは願ひ下げにしたいところだろうから」

なぜか、川田はいたって悠長に構えている。
「かといって、田村康平社長は自殺ではなくて誰かに殺されたのですよ、明らかに」

彼は一瞬むぎになった。

「じゃ、犯人は誰だ。誰が田村康平氏を殺したというのだ。下藤所長が一番怪しいというんだろが、彼にはアリバイがある」

「そうですね。下藤所長は倉多常務からずーと遅れてあの小料理屋に現れたのでしたよね。確か、十二時頃だったですか」

「それから六時頃までずーと女将のそばにいたのだ、小料理屋にな」

「でもそれまで仕掛けることは可能ですよ」

タクシーが来た。川田は黙って開いてあるドアから乗り込む。彼も渋々続く。

若い運転手はボタンと大きな音を響かせてドアを閉めると、行き先も聞かずに車を発進させた。川田に代わって、彼が行き先を告げても返事なかった。通信局に着くまで、誰も口をきかなかつた。

「テープがダメだったというのは本当か」

事務所のドアを開けると、川田は彼を振り返った。

「由紀さんがそう言っていました」

「どうしてダメだと分かったのかね」

「さあ、警察でじゃないんですか。時間がなくて詳しいことを聞くことができなかったんです。いま電話してみますよ」

彼は受話器を取った。

川田はソファに腰を下ろし、じつと彼を見守っている。

「テープをもって来るそうです。もしものことがあるといけないから、迎えにいつてきます」

川田を残して彼は出ていった。川田はソファに横になった。

和彦に導かれて由紀が事務所に入ってきた。川田は身を起こし、物珍しそうな目を向ける。彼女は黙って頭を下げ、テープを差し出した。

由紀の思い詰めた目に気付いて、和彦はソファに腰掛けさせ、川田を振り返った。

川田は彼女の手からカセットを奪うようにして受け取ると、手に持った小型テープレコーダーにセットして再生のボタンを押す。テープが回りだした。

テープは回るだけで、音が出ない。

「あ、やはり録音できていなかったのかしら」

彼女は擦れた声を言う。

「これがあのときのテープ……」

「そうです。あのときのテープです」

彼女は固い表情で繰り返す。川田はテープレコーダーをしばらくいじっていたが、諦めてテープルのうえに放り出す。

「巻き戻してはいないんじゃないのか」

和彦はテープレコーダーを手にとって巻き戻しはじめた。

「これが倉多常務の声だ」

「『……俺を騙した……』と言っているが……」

「うん、それでこのテープは……どうしたの。あのとき下藤所長に渡しただけじゃなかったの」

「別のテープを渡したのです……」

彼女は明るさを取り戻した。説明によると、こうだった。

バスを途中で下り、警察に行ったが生憎署長が不在で、そのままテープを持って家に帰った。課長が訪ねてきたというので、別のテープを持って、

ふたたびN共火建設事務所に戻ったのだった。一応顔を出さないと明朝の出勤時に気まずい思いをすることになるし、テープを返さないと所長や課長から返すまで執拗な追及が続くと考えたからだという。

「それに手帳を探すためにも所長に警戒されないようにしないと……」

彼女は和彦を見て小声で加えた。

「大丈夫かな。空のテープを渡されて、下藤所長は納得するかな」

彼女にどんな仕打ちが待っているか、和彦は気になるらしい。

「大丈夫よ、なんとかなるわ」

彼女は明るく応える。

「でもなぜ二人が屋上に行ったと思う。やはり覚悟の飛び降り自殺ということじゃないんですか」

和彦は彼女が入れてくれたお茶を美味そうに呑んでいる川田を見た。川田は茶碗を手持ったまま、しばらく宙を見ている。

「屋上には争った痕があった……。課長の話では、二人はテープがわれわれの手に渡ったらしいことを感じていたそうだ。課長にはそのあとの二人の行動は分からない、なにしろ課長は由紀さんを探しにふたたび外に出たからな……」

川田はじつと和彦を見た。やがて「多分、こういうことだろう」と言つて、残りのお茶を一気に呑んだ。

「……屋上には様子を知っている下藤所長が誘ったのだ。易々倉多常務が誘いに乗ったのは機会を見て下藤所長を屋上から突き落とす者にする魂胆があつたからだろう。あのテープだけでは下藤所長が喋らないかぎり逃げと押せると倉多常務は思っていたにちがいない。だから倉多常務は下藤所長に付いて屋上に上っていった。そこでどんな話があつたのか分から

ないが、争いの痕を見ると、下藤所長が先に倉多常務を襲ったのかな。われわれが行かなければ、下藤所長は倉多常務を道連れに無理心中図つていたかもしれない」

「そうですかね」

和彦は半信半疑の表情を浮かべ、川田をじつと見た。

「下藤所長はきつと仕返しを謀っている。そして倉多常務が意識を取り戻すまえに動き出すことだろう」

川田は自信満々に言った。

35

川田は何度も繰り返してテープを聞いた。やがて彼の脳裏に事件の全貌が浮かんできた。

オイルショックを機に、Sアルミは撤退を考え出しても、火力基地化を視程に入れていたT電力はなおN共火の立地推進を計る。これを受けてN新港プロジェクトをどうしても成功させたい県はSアルミの撤退を阻止するため、T電力と組んで甘い公害防止協定を掲げ、強引にN共火発電所立地計画の既成事実化（電調審への上程、認可）を進める。

一方、N市はN共火とSアルミのセット立地の点を強調し、N共火の着工はSアルミの公害防止について市との合意が前提という。このためN共火は着工をまえにSアルミに対してN市との公害防止についての合意を迫る。SアルミはN共火の甘い公害防止細目協定を前提にそろばんを弾き、公害防止についてN市との合意に踏み切る。だが予期に反して、N共火は

着工阻止の座り込みに遭い、厳しい公害防止対策を呑まされる。

「要するに、倉多常務にはN新港地区に電源を確保したいT電力にしてやられたという思いが強いんだな。オイルショックのときにすぐ撤退してしまえばN共火も撤退を余儀なくされる。これを防ぐために、T電力が県と共謀してSアルミを騙したと思いついてるんだ。それでこれの片棒を担いでいた田村康平社長を下藤所長に殺させるというのが、彼のシナリオだったのだ。そのうえ、あわよくば下藤所長を社長に据え、N共火のSアルミ持ち分の株式を高く買い取らせて完全撤退を果たす。抜け目ないからそのくらいのことは考えるだろう」

彼は自分を納得させるように、何度も小刻みに頭を上下に振りながら言う。

「実際に手をかけたのはやはり……」

和彦は彼を見た。

「よく録れたね、特ダネものだ」

彼は由紀に目を向ける。

「だが下藤所長にはアリバイがある。これを崩す決定的なものがない」

彼は和彦に視線を移した。

「あ、そう言えば、あのホテル従業員がおかしなことを言っていましたよ。部屋のなかに人影が見えたとか……」

彼の視線に応えるように、反射的に和彦の口から突いて出る。

「なんだと……」

彼は目を大きくして和彦を睨みつけた。

「デタラメじゃないですよ」

「苦し紛れにいい加減な創作をするな」

「本当ですよ。実はあのとき、彼に会って話を聞いたんですよ、あの現場で」

「どんな話か知らないが、彼が見つからなければ何の足しにもならん」

「倉多常務が……」

由紀は突然激しく身を震わした。

「倉多常務がどうした」

彼は目を見開き、由紀を見た。

由紀の話によると、あの朝、小料理屋から倉多常務が板前と一緒に一足先に出たらしい。いつもなら自宅まで送ってくれるのに、その日は一寸用事があると言って途中で先に降りたという。

「その板前さんはお父さんの幼なじみだったんですよ」

和彦はわが意を得たとでもいうような顔をした。

「それで……」

彼は静かに先を促すが、誰も応えない。

沈黙がつづく。

「倉多常務か」

突然、和彦が声を上げる。

「倉多常務は自ら手を下すことはしない。いつもと違って、八時頃から小料理屋に来て、自分のアライバイを確保しておくほど抜け目ない人間だ」

彼は殊更冷たく言う。

「そうか、分かった……」

和彦がさらに大きな声を出した。そして勢い込んでつづける。

「……下藤所長はトンでもない失敗を仕出かしたんだ。だから、倉多常務がそれを修復するためにホテルに行ったんだ」

「下藤所長本人がどうしていかないのか」

彼は冷静さを装い、さらに突き放す。

「下藤所長は最初の段階で気力を使い果たした。それに朝早く田村康平社長を迎えに行くことになっていた」

「そんな男が明け方までマージャンするか」

「そうやって時間を潰していたんですよ」

「うむ、そういうことかな。するとやはり、倉多常務は必ず仕返しに出るな。それまで待とう」

「どんな仕返しをするのですか」

「まあ、見ていよう。倉多常務は下藤所長とつて一番嫌なことを企むにちがいないな」

彼はおもむろに腕を組み、宙の一点に目を向けた。

36

倉多は脳挫傷の重症で、搬入先の病院ですぐ手術が行なわれた。経過は順調だったが、まだ意識を完全に取り戻すまでにいかなかった。

N共火とSアルミの所長同士で大喧嘩となつて、Sアルミの所長が大怪我をしたらしいという噂が広まり、テレビや新聞も連日取り上げていた。だが倉多の意識が戻るのを待っているのか、警察は相変らず動こうとしなかった。

下藤は人が変わったように働き出した。早朝から夜遅くまで工事現場を駆け巡り、工事の促進を図った。一号機の主要機器はすべて取り付けが終

わり、最後の仕上げの段階に入りつつあった。

「所長、復水器の取付けが完了したので、業者が一度通水試験をしてみたといっているのですが……」

所長がせっついていっているのが移ったのか、童顔の建設課長が所長室に入ってくるなり急ぎ込むように早口で言った。

「じゃ、いつそのこと冷却用水施設全般のチェックをやることにするか」

彼も待つていたように応える。いよいよN共火発電所の竣工のときを迎えるのだ。最終段階までにはまだまだクリアしなければならぬことは残っているが、通水試験が無事終われば、一応ゴールまで一直線だった。

「そうですか。じゃ、準備します」

「頼むよ」

彼は感慨深気に建設課長の後姿を見送った。

火力発電所では燃料を燃やして、ボイラーで高温高圧の水蒸気をつくり、蒸気力でタービンを回転させ、これによって発電機を回して発電する。

蒸気タービンの熱効率を高めるにはタービンの排圧を極力低くすることだ。

このため、タービンの排気を急速に冷却凝結させる。冷却に用いる熱交換器が復水器である。

臨海部に立地する火力発電所や原子力発電所では復水器の冷却用水に海水を用いる。取水口から放水口の水路をポンピングアップされた大量の海水が滔々と流れるさまはまさに河川そのものといつてよかった。

あくる日から通水試験の準備が始まった。

N共火の総発電出力規模は七〇万キロワットで、一基当り三五万キロワットの設備を二基設置する。このために必要な冷却用海水量は毎秒二八トンにも達する。利根川の年平均流量は毎秒二四〇トン前後であるから、毎秒

二八トンの水量といえれば十分の一の荒川なみの水量になる。一号機の規模は三五万キロワットであるから、これに必要な冷却水量は半分の毎秒一〇数トンとなるが、それでもちよつとした河川なみの水量である。

海水を取り入れる取水口近くには強力な循環水用ポンプが設置されていて、大量の海水を吸い込んで取水する。ゴミや大型の魚介類が一緒に取り込まれないように、取水口の前面には除塵柵が設けられ、ポンプの前には大型のロータリースクリーンなどのネットスクリーンが幾重にも設けられている。復水器は何万本もの細管で出来ているのでゴミや小石などは障害となるのだ。

N共火の取水口はN新港の埠頭が集まる港湾の一番奥にあった。埠頭はコの字に配置され、その一角にSアルミやN共火の専用埠頭があった。

冷却水は熱交換のための復水器を通過すると温まり、温排水となる。大量の温排水は外洋に放水するため、放水口は取水口から離れて外洋に近い港湾入口の外側に設置されていた。

取水口や放水口がチェックされた。何キロに及ぶ水路では清掃が行なわれ、ゴミや落とし物などの障害物は取り除かれた。

「おい、下藤所長が大奮闘しているらしいな……」

川田が和彦に話しかけた。

「……なんでも冷却用水施設の通水試験をやるらしい。奴さん、早く発電所を操業させてSアルミの撤退を阻止しようと躍起らしいな」

「これが倉多常務に対する仕返しですか」

彼が机から顔を上げて川田を見た。

「見学できないんですか」

「ただ水を流すだけだぞ。それに非公式のものだからどうか」

「下藤所長の様子も見たいし……、どうですか、行ってみませんか」

彼は重ねて誘う。

あの日から一週間も経っているというのに由紀からなんの連絡もなかった。彼にはそのことのほうが心配だった。

いつも腰が重い川田が急に誘いに乗り、自分でタクシーを呼んだ。誘っておきながら、彼はなにやら不思議な気がしたが、黙ってついていく。

前方にN共火の煙突が見えた。川田はタクシーを公共埠頭に着けた。

発電所の取水施設が公共埠頭と対岸にある専用埠頭の間にある。二人は歩いて取水口に向かう。

時折海から冷たい季節風が吹きつける。川田は案内を拒否されたときに備え、取水施設を見てから発電所敷地に潜り込もうと考えていたらしい。

取水施設の周りには金網のフェンスが張り巡らされている。岸壁を回って海面を覗くと、目の粗い頑丈な鉄製の柵が見えた。隙間から海水が勢よく吸い込まれている。

「試験が始まっているらしいな」

川田が呟く。

彼は返事もせず黙って海面を覗いていた。大きな口を開けた取水口から渦を巻ながら大量の海水が吸い込まれていく。まるで海の底に大きな穴が開いているようで、なんとも不思議な感じがしてならなかった。

材木や大きな板の切れ端は柵に引つ掛かるが、小さなゴミや魚は海水と一緒に粗い柵を通り抜けていく。小さなゴミはポンプの前に据え付けられたスクリーンネットで最終的に取り除かれるのだ。

彼はいつまで見ていても飽きなかった。海水の流れを見ていると自分も

吸い込まれていくような気分になるが、それは決して悪い気分ではなかった。むしろ、海面に浮いて海水とともに自分の身体が流れていくようななんともいえない開放された気分だった。

「おい、行くぞ」

川田の声がした。彼が振り返ったそのとき、海中でなにか黒い物体が動いたように感じた。彼はもう一度海中を覗き込んだ。

「川田さん、あれは……」

「どうした」

川田は彼が指さすほうに目を凝らした。海底から黒い物体が取水口の柵に向かって吸い込まれるようにゆっくり浮遊している。

「おい、あれは人体じゃないか。一一〇番しろ」

川田が叫ぶ。

彼は走った。走りながら公衆電話を探した。交差点の向こうの道路際にテレホンボックスがあった。彼は走った。

ダイヤルを回した。何年も回したことがないような音を立てて、ダイヤルがゆっくり回った。

彼は通報を了えて、テレホンボックスを離れる。

交差点に戻ると、右手の数メートル先にN共火のサービビルが見えた。

37

「やあ……」

受付カウンターに近づくなり、俯いて書き物をしていた由紀に声を掛けた。突然目の前に現れた和彦に彼女は口を開けたまま、声が出ない。

「……もうすぐすべてが解決するよ」

彼は由紀の驚きの表情を満足そうに見つめながら言う。

「……あのホテル従業員が見つかったんだ、取水口で……」

彼は断定的に言う。彼は海底から浮いてきた死体があのホテル従業員であると直感していたのだ。

「……………」

由紀は目を一層大きくした。

「所長はどこ、上にいますか」

彼は所長室を指した。

「は……、現場のほうです」

由紀は擦れた声を出した。

遠くからパトカーのサイレンが聞こえてきた。彼は「取水口のところだよ」ともう一度言つて、ビルを出た。

埠頭にはすでに人が集まりだしていた。工事人夫に混じつて付近の工場の従業員や住民の姿もあった。数台のパトカーに続いて、鑑識の大きな車がやってきた。

遅れてきたパトカーから署長が下りてきた。川田を見て、わざと聞こえるように、「やっぱり、殺られていたか」と呟く。

循環水用ポンプが止められた。死体が引き揚げられた。鑑識の車のそばに運ばれ、埠頭のコンクリートのうえに敷かれた青いシートに横たえられた。

彼は川田の肩越しに死体が運ばれていくのを見た。閉ざされた口元から

数本の頭髮らしきものが頬に垂れていた。

「溺死じゃないな、心臓マヒかな」

川田は呟く。

鑑識員による簡単な検査が終わると、死体はビニールシートに包まれて車内に運ばれた。一台のパトカーが動き出した。それに鑑識の車が従った。

一台のパトカーを残して、パトカーは次々と帰っていった。

「発見したときの様子を聞かせてくれませんかね。調書を作りたいのでね」

署長が川田に近づいてきた。

「署長直々ですか」

川田は遠くを見ている。そこに下藤所長の姿があった。

「署に行きますか」

二人は止めてあるパトカーに向かって歩き出した。彼も付いて行く。

「川田さんたちに見つかるとは因果なものだ」

車の中で、助手席に座っている署長が前を見たまま、ぽつんと言った。

川田も彼も黙つて車窓に目を向けていた。

二人は署長に付いて署長室に入っていく。執務机のまえに二脚の椅子が寄せられ、二人は腰を下ろした。

「さて、どうして取水口に行つたんですかね」

署長は二人を見て、にやつとした。そのとき短いノックがあつてドアが開いた。中年の署員が署長に近づき耳打ちした。

「一寸、失礼」

と言つて、署長が中年の署員を従えて出ていった。

「なんの用事が知らんが、客人を待たせるとはけしからん」

川田は机の上の書類を勝手に捲り、目を通していく。

せき払いがした。署長が足早に入ってきた。

「死人の口の中から変なものが出てきたというんでね」

「そういえば頭髪のようなものを嘔んでいたようですね」

彼は口を挟む。

署長は彼の顔と川田の顔を見比べるように交互に見ながら「ブンヤに隠しごとをしても仕様がなにか、それに発見者だからな」と自分に言い聞かせるように言う。

「……実は、頭髪のほかにも、肉片が口から出てきた」

「肉片？」

二人が同時に叫ぶ。

「耳殻の一部らしい。いま血液型を調べているところだが……」

「ああ、それは……」

川田が彼の顔を見た。

机の電話のベルが鳴った。

「なに、そうか、オレも行く」

署長はこれからN共火に行くという。二人も誘われるように後に従う。

外はすでに暗かった。

二人を後部座席に乗せて、パトカーはサイレンを鳴らして走り出した。

署長は助手席で視線を前に据えたまま黙りこくっている。

彼はバックミラーを覗き込んだ。対向車のヘッドライトに照らし出された若い警官と目が合った。

「結構忙しいんですね」

「はあ、いや」

緊張した表情の若い警官は要領の得ない返事をして、助手席の署長に視

線を走らせた。署長は相変わらず視線を前に据えたまま口を開こうとしない。

パトカーは市街地の狭い道を通り抜け、広い道路に出た。車は次第に加速していく。暗い夜空に煙突の信号灯が点滅している。道路を曲がると、建設中の発電所現場の灯か、一帯の闇空が灰白く見えた。

「川田さん、N共火で投身自殺があった」

「所長……」

川田が反射的に応える。彼も同じことを言い、途中で声を呑んだ。

N共火の門から敷地に入ると、突然、車の前に人影が立ちはだかった。

「誰だ、危ないじゃないか」

急ブレーキを踏んで、若い警官が叫ぶ。

「所長が……、早く、こちらです」

守衛が建設現場の闇を指して走り出す。署長は守衛の後を追う。

川田が彼を促し、ビルのなかに入る。所長室の扉は開け放たれていた。

「こんなところに手帳が……」

彼が目ざとく机のうえに置かれている黒い手帳を見付け、手に取った。

「……これは探していた田村康平氏の日記帳じゃないか」

ページを捲った。手が止まった。手帳を突きだし、彼は開いたページを

川田に示した。

最後のページの余白に「死して詫びる」と大きな字で記してあった。

遠くから救急車の警笛が近づいてきた。救急車に続いて、何台かのパト

カーのサイレンが響く。

二人は外に飛び出すと、署長を探す。

ボイラー建屋の裏側に回ると、人垣があった。その向こうに一人の男が

顔を地面に付けて倒れていた。男の頭から血が吹き出して黒い血溜まりをつくっている。

救急隊員が担架をもって近づいてきた。署長が片手を上げて制止した。鑑識員が遺体を調べ、ビニールシートで覆う。

38

「署長さん、また署に戻るのですか」

関係者の事情聴取を了えた刑事を従え、所長室のソファでお茶を呑んでいる署長を見付け、川田は話しかけた。署長はきょとんとした目で川田の顔を見上げる。

「調書の続きのことですよ、ここへ来るまえ、署で……」

「ああ、そうだね。だがどうしたのかね、N共火は。こんどは下藤所長が投身自殺だ。やはり彼がホテル従業員を殺していたんだな」

「そうですね。そんなに単純じゃないですよ。森野くん、きみから説明してあげたまえ」

川田は所長の椅子に腰掛け、机の上で黒い手帳を弄くっている彼に声を掛けた。背後から覗き込んでいた由紀が目を輝かした。

「署長さん、この手帳は田村康平社長が日記帳代わりにしていたもので、ご遺族がまえから探していたのです。わたしたちも下藤所長に手帳のことをたびたび尋ねたのですが、その都度知らないという返事でした。それで方々を探したのですが、どこにも手帳は見当たらなかった。ところが手帳が今日、この机のうえで見つかったのです。机のうえに置いていたのです

……。この手帳は多分、あの夜、田村康平社長が泊まったホテルの部屋のテーブルのうえに置いてあったものでしょう。田村康平社長を殺害したあと、下藤所長が持ち出して隠し持っていたにちがいません。そして、下藤所長は覚悟の自殺に先立ち、悔悛の意を込めて、自分が手帳を持ち出したことを明らかにしようとして自分の机の上に置いたのでしょう」

「どうしてそんなことが分かるのか……ね」

署長は威厳を示したがっているのか、せき払いをひとつした。

「最後のページに『死して詫びる』と書き込みがあったからです。田村康平社長の書体に似せて書かれていたのですが、これは下藤所長が書いた字です。これですべてが明らかでしょう。田村康平社長は自殺じゃなく、殺されたのです。二度も殺されたのですよ」

彼の説明によると、事件は二つのパートに分かれるという。第一の事件の犯行は下藤所長によって行なわれ、第二の犯行は倉多常務が実行したのだった。

あの夜、下藤は田村康平を宿舍のホテルに訪ねた。翌日の午前中に予定されていた県との会議の打ち合わせを了えて、持参のウイスキーを二人で飲んだ。そのとき下藤がウイスキーに睡眠薬を混入する。眠り込んだ田村康平の顔に枕を押しつけ、意識を失ったところで自殺を偽装するため、カーテンボックスに吊るす。

下藤はテーブルのうえの自分のコップを片づけ、黒い手帳をポケットに仕舞うと、ドアに鍵をかけ、室外に出た。彼は鍵をもったまま、非常階段を伝って外に出た。その足で、倉多と待ちあわせていた小料理屋に向かう。

「ここまでが第一の事件ですよ」

彼は続いて第二の事件について話します。

小料理屋で倉多と落ち合った下藤は、ホテルの鍵を持ち出したことに気が付き、鍵を返却する際に、自殺を裏付ける偽装の徹底を期して、手帳に田村康平の最後の言葉として「死して詫びる」を書き込み、倉多に託す。マージャンで時間を潰してから、倉多は鍵を持ってホテルを訪れ、鍵を開け、室内に入る。手帳をテーブルに置き、室内から施錠し、下藤が来るまで室内に身を隠し、密室化の工作をする。こうして自殺の偽装を完璧なものとするはずだった。

ところが首を吊っていた針金ハンガーが伸びて、田村康平はカーテンボックスから落ちて息を吹き返し、微かに意識を取り戻していた。そこで顔を見られたと思った倉多は伸びた針金を首に回し再度田村康平をカーテンボックスに吊るす。だから死亡推定時間が大きくずれることになったのだ。

だが予想外に時間がかかり、ようやく偽装工作を了えたところ、ドアのカギ穴に鍵を差し込む音がしたので、倉多は慌ててドアの陰に身を隠す。ところが壁に向かって立ったために自由が利かず、蝶番の隙間から下藤と一緒に来たホテル従業員に顔の一部を見られてしまう。

倉多はそのホテル従業員を呼びだし、岸壁から海中に投げ込む。そのときもみ合いとなつて、倉多はホテル従業員に耳殻の一部を嚙り取られる。

「口の中の肉片は倉多常務のものだったのかね」

「まあ、調べて見て下さい。血液型も形状も一致するはずですよ」

彼は川田と顔を見合わせ、意味あり気に笑った。署長はいささか憤然とした面持ちで二人を見た。

「で、所長や常務取締役という会社の要職にあるご仁がどんな動機でこんな事件を起こしたと考えているのかね」

署長は二人に皮肉な眼差しを向けた。

「動機ですか……、まあ、直接の動機は下藤所長の出世欲と田村康平社長に対する嫉みと逆恨みでしょうか。これをけしかけたのが倉多常務です。彼にそうさせたのは梶やT電力に対する反感でしょうか。彼はN共火を混乱に陥れて操業を遅らせ、電力供給の遅れを理由にSアルミの完全撤退を意図していたのではないですか」

「よしんばそうだと仮定してもだ、なぜN共火の建設所長ともあろう人がそんなけしかけに乗せられてしまったのかね。それとも倉多常務のけしかけは単なるきつかけになったにすぎないというのかね」

署長はまだ呑み込めずにいるらしい。

「下藤所長には借りがあつて倉多常務には頭が上がらなかつたのですよ。

だから倉多常務のけしかけを頭から無視することができなかつた。それに転動の話がプレッシャーとなつたらしい」

「それは……、でもそんなことがありうるかね」

「まさにSアルミが撤退を考えたとき、それを無理やり先に延ばしてもらつたことがあるんだね、下藤所長には。こんなことがあつたから、この事件では直接の動機そのものよりもその背景のほうが大きな意味を持っているように思いますな……」

川田はじつと署長の丸い顔を見つめた。そしてつづける。

「犯罪では直接犯行を実行した者に対して関心が向きがちだが、もつと錯綜した関係のなかで大きな力が作用してひとつの現象としての犯罪を生みだしているのではないか。こんどの事件でもその辺から考えないと、出世欲や嫉みに駆られたひとりの男の単なる上司殺しとして片づけられてしまうことになるだろう。今回の事件では、いつの間にか、下藤所長は倉多常務の操り人形になつてしまつていたのではないか。そしてあたかも主人に

命令されるままに、下藤所長は第一の犯行を実行したにすぎないのかもしれない。だから犯行後も平然としていたのではないかね」

「……………」

署長は川田の問いかけに沈黙を守っている。

「この事件は倉多常務が下藤所長にやらせたものだが、N新港プロジェクトがなければ生じることのなかった事件ですな。逆に、これはN新港プロジェクトが生みだした事件と言えるかもしれない……………」

川田はN新港プロジェクトのはじめの頃から振り返る。

「……………県は多くの批判を無視して、N新港プロジェクトで旧態依然のコンテナ方式タイプを採用し、強引に推進する。太平洋岸を追いだされ行き場を失った重厚長大型企業を誘致しようとする後進県のひとつの戦略だったのか、それとも県の構想力の不足か、その辺のところは判然としないが、どんな思惑からか、県の誘いに乗ったのがS金属（Sアルミ）であり、T電力（N共火）だったわけだ。だが時代の流れは突然向きを変える。突如襲ったオイルショックによる石油価格の急騰、公害裁判での企業側の全面敗訴と公害対策の一層の強化など、企業の存立基盤を揺るがす出来事が矢継ぎ早に襲う。この時点でSアルミは一度撤退を考えたらしい。だがこのときN共火は電調審を目前にしていた」

「……………」

「T電力はこの地域における将来の電力需要増を見越してN共火に隣接して大型火電基地建設を計画していた。これには地元が大反対していたので、先行するN共火発電所建設計画に対する国の承認はどうしても受けておきたかった。失敗は許されなかった。でなければ続く火電基地計画の承認は一層難しくなってしまう。T電力派遣の下藤にはN共火計画の電調審通過

は至上命令と映った。当時社長を代行して業務を遂行していた下藤は、倉多に目を瞑ってもらい、Sアルミの撤退を一時見送ってもらっていたのだ。次期社長候補であった下藤は、いずれ社長になったときに、この借りのお返しとしてSアルミの撤退に際してなんらかの便宜を図ってやれるものと思っていたのだろう。倉多にしても借りの返しを当然のこと期待していたのだ」

「だがその先は順調ではない」

「N共火の発電所建設が先行する中、Sアルミは一方的に計画縮小に走る。当面は地金精練のみとし、時機を見て完全撤退を図ろうとしていたのだ。倉多には難航する送電線問題が撤退について県の了解をうる格好なチャンスと映った。彼は操業が予定通り開始できなければSアルミは撤退することになると言明する」

「そう簡単には撤退できない……………」

「そのとおり。そうこうしているうちに、難航していた送電線問題に解決の兆しが現れた。そこで焦った倉多は田村康平社長を亡き者にすることを思いついたのだ。転勤話におびえる下藤をけしかけ、犯行に及んだというわけ」

「それにしても大の男が……………、こんなことをするかね」

署長にはどうしても腑に落ちないらしい。

「まあ、時代の変化を読み取れなかった男たちの悲哀とでもいいますかね。時代の変化を読み取っていれば、あの二人もこんな事件を起さずに済んだことでしょう。逆に言えば、あの二人は時代の流れに翻弄されたと言えるかもしれませんな、ことに自ら身の破滅を招いた下藤所長はね……………」

「……………」

署長は無言のまま、微かに頷く。

「下藤所長が投身自殺したのも最後までそのことに気付かなかったからでしょう。彼には倉多常務のこれまでの行動から見て、回復すれば必ず仕返しされ、自分が窮地に追い込まれることが分かっていた。そこで彼はその前にSアルミの完全撤退を防ぎ、倉多常務の出鼻をくじいてやろうと、最後の仕上げのつもりで発電所の操業を早める行動に出た。時期を早めたばかりに、水路の通水試験でホテル従業員の遺体を吸い寄せることになってしまったのですから、彼は最後までついてなかつたということになるのですかね。季節風が弱まれば湾内の海流も変わり、遺体が湾外に運ばれていったかもしれないに……」

「従業員の遺体が発見されたことを見て、観念して投身自殺したというわけか」

署長は漸く納得したように言う。

「それにしてもあの若い従業員を救えなかつたのですかね」

彼には掘割の水路に投げ込まれた若い従業員がまるでN新港プロジェクトに捧げられた生け贄のように見えた。N新港プロジェクトは生け贄を大きな口を開け、一呑みしたように思えた。署長の目を覗き込み、彼はしじみとした口調で言う。

「うん、まあ、とにかく倉多常務の退院を待つてよく取り調べることにしよう。それまで変なものを書いてくれるなよ」

署長は目を逸らし、強がり言いながら、ソファから身を起こすと尻を突き出すような格好でそそくさと所長室を出ていった。その後をひとりの刑事が署長の突き出した尻を押すように追いかけていく。その格好は見ているものに笑いを誘うものであつたが、川田も彼も笑うことができなかつ

た。

三人の男が死んだ。田村康平社長が死に、下藤所長が死んだ。若いホテル従業員も殺されたのだ。それに生死を彷徨う重傷の男がもうひとり……。

N新港プロジェクトは四〇万本の松を切り倒し、長年にわたって生業として生きてきた何十人何百人から土地や海を奪ってきた。白砂青松の砂浜を破壊し、農地や漁場を取り上げただけでは足りず、さらに三人も人の命を奪ってしまったN新港プロジェクトは一体なんだったのか。

彼はこのようなN新港プロジェクトに携わつたものたちを闇雲に突き動かして止まなかつたものは一体なんなのかと思う。N新港開発は単なるひとつの手段に過ぎないのに、いつのまにかそれ自体をまるで目的のようにはき違え、あくまで押し進めようとしていた力はどこからどのようにして醸し出されていたのか。田村康平社長も、そして下藤所長も、それに倉多常務もその力の犠牲になつたのだろうか。

彼はその得体のしれない力に対して激しい畏怖の念を覚え、全身を戦慄が走るのを感じた。

エピソード

意識が戻った倉多の取り調べから事件の全容が明らかになった。川田と森野和彦の推理とほぼ一致し、大きく変わるところはなかった。

ただ一点だけ違っていた。田村康平の手帳は下藤が一度ホテルから持ち出したが、倉多は下藤からホテルのテーブルへの返却を依頼されたにもかかわらず、そのまま倉多が所持していたのだ。そして屋上で頭を殴られ、下藤に奪い返されたものであった。倉多は手帳への下藤の書き込みが下藤の犯行を裏付ける唯一の証拠となると考え、もしものときに備えて自分の手元においていたのだ。

その倉多も、しばらくして息を引き取る。

脳挫傷手術の経過は順調だった。だが取り調べが終るのを待っていたように、突然、容態が急変したのだ。

川田は森野和彦と連名で書いた本事件に関する特集記事のなかで、事件を生みだした背景を詳しく分析し、時代遅れのN新港プロジェクトの問題点を指摘する。これとともに、捜査段階で早々に自殺死と断定した捜査当局の責任を追究し、犠牲となった第一発見者である若い見習い従業員を悼んだ。

程なく、森野和彦は本社の社会部への配属が決まった。

二〇数年を経たいま、N新港臨海工業団地にはいまだに広大な空き地が目立つ。

Sアルミは早々に解散し、すでに工場は撤去され、完全撤退を果たした。

工場建屋は撤去され、空き地となった工場用地には雑草が生い茂るままだ。

主を失ったN共火は、一方の親会社であるT電力に引き取られ、子会社として生き残った。急騰した石油から安価な石炭に燃料を変え、発電した電力は一般需要家用として工業団地の外へ送り出していた。T電力の広大な火電基地建設用地は不用になり、一部がN共火の石炭置場として利用されているものの、大半は空き地のままだ。

国際港N新港は海が荒れる冬季になると船舶は容易に近寄れず、N共火の火力発電用外国炭を細々と輸入するための専用港と化している。売れ残った工業用地の後始末も終わらないまま、N新港臨海工業団地の事業主体に対する責任の追及もなされず、N新港は毎年浚渫を行い、防波堤の補修や補強工事を重ね、赤字を積み増していることだろう。

空き地を見下ろすようにそびえ立つN共火の一八〇メートルの高い集合煙突から、いままも温室効果ガスである大量の二酸化炭素（炭酸ガス）のほかに、二酸化硫黄（亜硫酸ガス）や窒素酸化物などのもろもろのガスが大空に向かって勢いよく吐きつづけている。

巨大化高度化大量化つづける現代科学技術文明のもとで、工業団地開発の大型化も必然のように押し進められるが、いつも割りを食うのは弱いものたちだった。先人たちが苦勞して植林してきた砂浜の松は切り倒され、農業をいそむ農民から土地を奪い、漁業を生業としてきた漁民を海から締め出され、そして、強制的に移転させてまでして強引に押し進めたこの開発劇は一体なんだったのか。いまなお、全体の収支決算もなされぬまま、日に日を重ねつづけている。

第一話の舞台は高度成長のかげりが見えはじめた一九七〇年代後半の日本の地方都市である。県主導で必死の努力のすえに立ち上げた「希望」の工業開発事業も破綻して終わりを告げる。

あれから半世紀を経て、世界経済は成熟期を迎え、成長型経済からポスト成長経済あるいは成熟経済へ向かいつつある。このような趨勢にもかかわらず、いまもって世界の各地でこれに似た工業開発が相も変わらず進行している。

すでにポスト成長経済あるいは成熟経済へ向かいつつ兆候がいたるところに現われているのに、いまもってこの国にも経済の高度成長を夢見る政治家や経済人が多い。

彼らにはこのケースの地方都市のような運命が待っていることに全く気付いていないのだろうか。

日本の経済構造はすっかり変化している。一例を挙げれば、かつて日本は「貿易立国」を目指した。いまもそのおもいが生きている。だが企業の海外展開が進み、かつての輸出主力の経済構造が大きく変わってしまったているのではないか。

なにがそうさせたのか。その結果、なにがどう変わったのか。そして変わったことにどう対処すべきか。

経済構造の変化といっても、これは経済のグローバル化だけの問題ではない。国内の少子化現象や高齢化現象といった社会の深層の変化にも目を向けなければならないだろう。

新しい酒には新しい革袋が必要だ。

日本はもちろん、世界の先進諸国はこのような趨勢を先取りして、新しい世界経済システムの構築をめざすべきではないのか。にもかかわらず、

権力を担うもの誰一人率先して新たな行動をとろうとせず、世界経済を牛耳るグローバル企業や国際資本は強いもの勝ちとばかり、世界のいたるところで草狩り場を漁り、利益の確保に余念がない。そしてさらに経済格差を拡大させていく。

世界の富の大半が一部の極少数の富裕層に集中してしまい、経済格差がますます拡大する一方、世界経済構造がますます硬直化し、システムそのものがますます脆弱化していつていけるのだ。経済システムはもとより、経済格差拡大によって社会そのものもますます不安定化してしまう。そして不安定化した社会は、やがて崩壊へと進むことであるう。

(第一話 完)

この物語はフィクションであり、登場する人物や団体等は実在するものとは一切関係がありません。

地球の箱船を求めて 第二話 そしてみんな死んでしまった

生野以久男

二〇一四年七月三十一日第一版発行

(c) Ikuno Ikuno 2014

発行所 kinokopress.com

代表 森岡正博

所在地 大阪府堺市学園町一―一 大阪府立大学人間社会学部

倫理学研究室内

連絡先 www.kinokopress.com 内の連絡先に問い合わせ

本文レイアウト+デザイン 森岡正博

本書およびPDFファイルの無断複写は、著作権法上の例外を除き、禁じられています。

ISBN なし